

兵庫県芦屋市

月若遺跡発掘調査報告書

第96地点

—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅷ—

2009

芦 屋 市

芦屋市教育委員会

兵庫県芦屋市

月若遺跡発掘調査報告書

第96地点

—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅶ—

2009

芦 屋 市

芦屋市教育委員会

序 文

本市では、阪神・淡路大震災の復興事業として、山手幹線の整備を進めています。本市教育委員会は、この事業に先立って、平成10年に埋蔵文化財の試掘・確認調査を実施しました。その結果、事業地内には遺跡が濃密に分布していることを把握し、道路建設の工事の前に膨大な数の発掘調査を実施する必要があることがわかりました。しかし、住宅の復興をはじめ、数多くの震災復興調査に迫られていた本市教育委員会では、山手幹線に伴う発掘調査に迅速な対応をすることができない状況にあったため、本市は兵庫県および神戸市に支援を要請しました。その結果、本市が神戸市へ事務委任することにより、平成12年度から本事業に関連する発掘調査と報告書の作成をしていただくことになりました。

平成19年度からは、本市教育委員会の調査体制も整い、自ら発掘調査を行うことになりました。そして、その結果実施したのが、本書で報告する月若遺跡第96地点の発掘調査です。

今回の発掘調査では、縄文時代から近現代にわたる遺跡が数多く見つかりました。その中でも、小銅鐸は、全国でもこれまでに五十数例しか出土しておらず、兵庫県下でも三木市高篠鐸に次いで二例目となる重大な発見となりました。

これら発掘調査の成果を収めた本書が、郷土の歴史について関心を深めていただく契機となり、さらに学術研究および教育資料として広く活用していただく一助となれば幸いです。そして、今後とも本市の文化財保護へのご理解とご支援をお願いしたく存じます。

最後になりましたが、発掘調査および本書の刊行にあたりまして多大なご協力を賜った月若町をはじめとする多くの市民の皆様や、神戸市・神戸市教育委員会、本事業の関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成21年3月31日

芦屋市教育長
藤原 周三

例 言

1. 本書は、月若遺跡第96地点の埋蔵文化財発掘調査報告書で、芦屋市文化財調査報告第76集として公開するものである。
2. 調査地は、兵庫県芦屋市月若町66番3・4、69番3に所在する。
3. 調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「月若遺跡」の分布範囲内に位置している。本遺跡は、平成16年(2004)3月31日に公開された『兵庫県遺跡地図』[兵庫県教委2004]と、平成13年(2001)3月31日に公開された『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図』[芦屋市教委2001]で周知し、遺跡保護の取扱いを行っている。
4. 調査は芦屋市が計画する都市計画道路山手幹線街路事業に伴うもので、芦屋市教育委員会が調査主体となって実施した。
5. 本発掘調査の実施ならびに整理作業、報告書の印刷・刊行に係る費用は、芦屋市が負担した。
6. 本発掘調査の実施に際しては、兵庫県教育委員会文化財審査指導係深井明比古係長・柏原正民主査からの指導・助言を受けた。
7. 本事業は、当初、芦屋市が神戸市に事務委任し、平成12年度から平成18年度までの発掘調査を委託した。その間、調査機関となっていた神戸市教育委員会からは多くのご協力を得るとともに、今回の発掘調査でも数年間にわたる経験を活かしてのご助言を得た。特に、発掘調査および小銅鐸の保存処理に際して、埋蔵文化財指導係丸山潔主幹、埋蔵文化財調査係千種浩係長、同係安田滋主査、神戸市立小磯記念美術館山本雅和学芸係長、神戸市立博物館宮本宏明学芸課長、神戸市教育委員会埋蔵文化財センター中村大介学芸員からは、これまでの事業の継続の観点から多くの助言とご協力を賜った。
8. 本発掘調査は、平成20年(2008)2月18日から4月30日まで実働55日で実施した。それに引き続き、整理作業および報告書(本書)の作成を平成21年(2009)3月31日まで、芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課三条文化財整理事務所(芦屋市役所三条分室)において実施した。
9. 本発掘調査の面積は、210㎡である。発掘調査では5面の遺構面を検出・記録したため、延べ調査面積は1,050㎡となる。
10. 本発掘調査は、本市社会教育部生涯学習課文化財担当学芸員竹村忠洋・同課嘱託守田めぐみ(学芸員)・同課嘱託白谷朋世(学芸員)が担当した。調査組織の詳細については、第1章第2節に記した。
11. 本書の編集は、竹村・守田が担当した。
12. 本文の執筆は、竹村・守田・白谷と本市社会教育部生涯学習課主査(文化財担当)森岡秀人が行った。執筆分担については、日次および担当節・項末尾に掲げた。
13. 本発掘調査および遺物・資料の整理作業・報告書作成は竹村・守田・白谷が担当し、調査・整理補助員として本市生涯学習課臨時の任用職員である関分ゆみ・近藤奈保子・桑原育世・佐藤春花・西岡崇代・本庄瑛美・山本麻理・横森美和子が従事した。また、平成19年度および平成20年度の間限臨時的任用職員である天羽育子・魚津純子・小原由利絵・新野純子・須田佑子・住本孝太・平山裕之・前田ひさ子の協力を得た。
14. 発掘作業は、株式会社長谷川工務店に委託した。
15. 発掘調査状況のビデオ撮影記録は、芦屋市教育委員会が山本徹男氏(市内在住・映像作家)に委託した。ビデオ撮影に係る費用は、芦屋市教育委員会生涯学習課が負担した。
16. 小銅鐸の応急保存処理について、財団法人元興寺文化財研究所尼子奈美枝氏から多大なご教示とご協力を賜った。
17. 小銅鐸については、森岡の指導・助言の下、京都造形芸術大学教授内田俊秀氏・兵庫県立考古博物館長石野博信氏・奈良県立橿原考古学研究所総務企画調整部長寺澤薫氏・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部考古第一室長難波洋三氏に鑑定を依頼し、ご指導、ご教示、ご助言を賜った。また、奈良国立博物館学芸部には、森岡が赴き岩戸晶子研究員・古澤橋教育課長から、写真・略図比較照会の上、古代風鐸との属性・型式・用途の違いを中心に種々ご教示を賜った。
18. 小銅鐸の現状写真については、森岡が依頼し、梅原卓一写真事務所梅原卓一氏のご厚意とご負担で撮影していただいた。図版6で用いた写真は、梅原氏の撮影によるものである。
19. 小銅鐸のX線撮影について、神戸市教育委員会および神戸市埋蔵文化財センターに協力していただいた。図版38で使用したX線写真は、同センター中村大介学芸員に撮影していただいたものである。

20. 小銅鐸の保存処理および自然科学分析を株式会社京都科学に委託しており、平成21年(2009)3月31日現在、実施中である。当作業に係る費用は、芦屋市教育委員会生涯学習課が負担した。その成果品は、平成21年(2009)7月に納品される予定である。図版5で使用した小銅鐸の小破片の写真は、同社が撮影したものである。なお、これらの成果を含め、小銅鐸に関する報告書を平成21年度に刊行する予定である。
21. 本書に掲載した地図は、第7図が国土地理院発行5万分の1地形図「大阪西北部」(平成11年要部修正)図幅、第9図が芦屋市発行2千5百分の1基本図「芦屋駅」(平成10年3月修正)図幅をそれぞれ使用した。
22. 発掘調査に伴う遺構・遺物の写真・実測図等の資料・記録類および出土遺物は、芦屋市教育委員会が保管している。
23. 発掘調査および整理作業の過程で、下記の方々からご助言・ご教示・ご協力を賜った。ご芳名を記し、深く感謝の意を表する(五十音順、敬称略)。
 相澤教子 浅岡俊夫 尾子奈実枝 伊井孝雄 勇 正広 石野博信 井上洋一 今村一代 岩戸品子 内田俊秀
 宇野慎敏 梅原章一 梅本素子 岡崎正雄 奥井哲秀 柏原正民 北山峰生 久保あき子 小島静子 進藤 武
 水津真実 菅本宏明 武末純一 竹村陽子 千種 浩 常松幹雄 寺岡 洋 寺澤 薫 寺前直人 戸塚洋輔 中村大介
 仲谷由利子 中井みどり 離波洋三 野田昌夫 春成秀爾 深井明比古 福井英治 藤川祐作 藤原理恵 古川 登
 前田敬彦 前田義人 松田和義 丸山 潔 南 健太郎 向井一雄 村川弘弘 森井貞雄 安田 滋 柳田康雄
 山崎頼人 山村 薫 山本敬男 山本雅和 古澤 脩 渡邊邦雄 渡辺 昇

凡 例

1. 本書で使用した方位・座標は、平面直角座標系第V系(日本測地系)である。標高は、東京湾中等潮位(T.P.)で表示している。また、図中で使用した方位は庫標北を示している。
2. 土層断面図の土色は小山正志・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2000年後期版(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)を使用した。
3. 本書における遺構名の表記は次のようにした。
 掘立柱建物：SB 溝：SD 井戸：SE 土坑：SK ビット：SP 自然流路・河道：SR 性格不明遺構：SX
4. 遺構は遺構面ごとに発見した順に2桁以上の連番を付し、上記の遺構名と番号とで表現する。それぞれ第1遺構面から第4遺構面にかけて、以下の遺構番号まで使用した。
 SB01、SD07、SE01、SK09、SP176、SR04、SX03
5. 各遺構面の平面図は縮尺1/80、調査区壁および深掘トレンチの土層断面図は縮尺1/40、各遺構平面図および断面図は縮尺1/10・1/20・1/40とした。
6. 遺物実測図は縮尺1/4を原則とする。ただし、一部遺物の形態、性状に合わせ、寛永通寶を縮尺2/3、製塩土器を縮尺1/3、縄文土器や石鏃などを縮尺1/2、円筒埴輪を縮尺1/6にするなど任意に設定した。
7. 本文中の年号は原則的に西暦表記とし、元号と西暦を用いる場合には、「平成20年(2008)」と表記した。
8. 本文中では、引用および参考とした文献を「〔執筆者名もしくは機関・組織名 刊行年(西暦)〕」という形で記載した。これについては、本文末尾に引用・参照文献目録を掲載している。
9. 写真図版における遺物写真の右下の数字は、遺物実測図の番号に対応する。写真の縮尺は原則として任意である。
10. 土層註記については、土色、性質、粒径、しまりの順に記すことにする。土色は原則として土色帖に従い、必要に応じて視認による色名を付加した。なお、本書では、褐色の「褐」を「褐」に改めて用いている。土の性質については、シルト質・砂質土・粘質土・砂礫に大別し、必要に応じて粘性の強弱を記した。粒度は細粒砂・中粒砂・粗粒砂の3分類を基本とし、適宜シルト質・砂礫に大別し、必要に応じて粘性の強弱を記した。粒度の揃わない層については、粒子の小さい順から大きい順に記し、特に多く含有するものについては「主体○粒砂」として付け加えた。しまりについては、悪い、やや悪い、やや良い、良い、かたくしまるの5段階に分けた。

本文目次

序 文
例 言
凡 例

第1章 調査の経緯・経過

- 第1節 調査に至る経緯 (竹村忠洋) ... 1
- 第2節 調査組織
 - 1. 平成19年度(本発掘調査および遺物・資料整理) (竹村) ... 2
 - 2. 平成20年度(遺物・資料整理および報告書の作成・印刷・刊行) (竹村) ... 2
- 第3節 調査の経過
 - 1. 本発掘調査の経過 (竹村・守田めぐみ) ... 3
 - 2. 整理作業および発掘調査報告書の作成・編集など (竹村・守田) ... 3

第2章 調査地をとりまく環境

- 第1節 芦屋市の歴史的環境 (竹村) ... 8
- 第2節 月若遺跡の概要 (竹村) ... 12

第3章 発掘調査の概要

- 第1節 本発掘調査の方法 (竹村) ... 14
- 第2節 基本土層 (竹村) ... 15
- 第3節 遺 構
 - 1. 第1遺構面 (竹村・白谷朋世・守田) ... 19
 - 2. 第2遺構面 (竹村・白谷) ... 34
 - 3. 第3遺構面 (竹村) ... 39
 - 4. 第4遺構面 (竹村) ... 43
- 第4節 遺 物
 - 1. 遺物包含層出土の遺物 (守田) ... 44
 - 2. 第1遺構面に伴う遺構の出土遺物 (守田・白谷・竹村・森岡秀人) ... 46
 - 3. 第2遺構面に伴う遺構の出土遺物 (守田・白谷) ... 64
 - 4. 第4遺構面に伴う遺構の出土遺物 (守田) ... 66

第4章 まとめ (竹村) ... 67

引用・参照文献 73

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 兵庫県と芦屋市の位置	1	第24図 第3遺構面平面図	40
第2図 小銅鐸を鑑定する村川行弘委員	3	第25図 第3遺構面ビット・土坑・砂眼土層断面図	41
第3図 調査風景（3月8日）	5	第26図 第4遺構面平面図	42
第4図 調査風景（3月8日）	5	第27図 S R09土層断面図	43
第5図 調査風景（4月1日）	6	第28図 寛永通寶	44
第6図 調査風景（4月4日）	6	第29図 遺物包含層出土遺物	45
第7図 芦屋市内主要遺跡分布図	9	第30図 第1遺構面遺構出土遺物	47
第8図 呉川遺跡第22地点の近代の遺物包含層	11	第31図 S E01出土遺物	49
第9図 月若遺跡および寺田遺跡調査地点分布図	13	第32図 土器群1・3出土遺物	50
第10図 調査区地区別図	14	第33図 土器群2出土遺物	51
第11図 調査区北壁・深掘トレンチ1北壁土層断面図	17	第34図 S R02-1（埋土B・D～F層）出土遺物	53
第12図 防空壕跡平面図・立面図・断面図	20	第35図 S R02-2（埋土C層）出土遺物	55
第13図 第1遺構面（S R02・03埋没後）平面図	22	第36図 S R03出土遺物	57
第14図 第1遺構面（S R02・03埋没前）平面図	23	第37図 製塩土器	59
第15図 第1遺構面ビット土層断面図	24	第38図 瓦（1）	60
第16図 第1遺構面ビット・土坑・溝土層断面図	25	第39図 瓦（2）	61
第17図 S P33土層断面図	26	第40図 円筒埴輪	63
第18図 S E01平面図・立面図・土層断面図	28	第41図 石製品	64
第19図 S R02-1護岸遺構平面図・断面図	32	第42図 第2遺構面ビット・土坑出土遺物	65
第20図 S R02・03土層断面図	33	第43図 S X03出土遺物	65
第21図 第2遺構面平面図	35	第44図 土器群4出土遺物	66
第22図 第2遺構面ビット・土坑・溝土層断面図	36	第45図 S K09出土遺物	66
第23図 S X03平面図・土層断面図	38		

表 目 次

第1表 芦屋川右岸地域出土古代瓦一覧表（1）	70	第2表 芦屋川右岸地域出土古代瓦一覧表（2）	71
------------------------	----	------------------------	----

写 真 図 版 目 次

図版1

工事が進む山崎線芦屋川トンネル（西から、4月15日撮影）
調査区北壁土層（南西から）

図版2 第1遺構面全景・S E01

第1遺構面（S R02・03埋没前）全景（南西から）
S E01（南から）

図版3 S R02-1・土器群2

S R02-1護岸遺構（南東から）
土器群2-1・2-2（南から）

図版4 小銅鐸が出土したS P33

S P33の位置（西から）
S P33検出状況（南東から）
S P33土層（南東から）

図版5 小銅鑄

- ①クリーニング前的小銅鑄
- ②型持孔
- ③破断面の状況
- ④鑄身上部にみられる痕跡

調査区北壁土層(南から)
調査区東壁土層(南西から)

図版6 製造土器の調整・胎土

- ①第37図166外面
- ②第37図166内面(1)
- ③第37図166内面(2)
- ④第37図169内面
- ⑤第37図168内面
- ⑥乳白色系・布目
- ⑦第37図167内面(1)
- ⑧第37図167内面(2)
- ⑨淡橙色系・布目
- ⑩第37図170内面
- ⑪灰色系・布目
- ⑫第37図171外面
- ⑬第37図172内面
- ⑭第37図173内面
- ⑮第37図174内面
- ⑯褐色系・ナデ

図版10 調査区土層(2)
調査区南壁土層(北西から)
深堀トレンチ1 北壁土層(南から)

図版11 近現代の遺構
電信柱アンカー(西から)
防空壕跡(南西から)
地下施設(南東から)

図版12 第1遺構面(S R02・03埋没後)
第1遺構面(S R02・03埋没後)全景(西から)
第1遺構面(S R02・03埋没後)全景(南西から)

図版13 第1遺構面(S R02・03埋没前)
第1遺構面(S R02・03埋没前)全景(西から)
第1遺構面(S R02・03埋没前)北半(北東から)

図版14 S B01
S B01全景(南から)
S B01全景(北から)
S P21・01土層(西から)
S P02・25土層(西から)
S P03土層(南から)

図版7 調査地の現況と周辺

調査地の既存建物(南西から)
調査地現況(南西から)
調査地現況(北西から)
既存建物の旗瓦組の束(南西から)
工事中の山手幹線芦屋川トンネル(西から)
調査地から西方の山手幹線(東から)
調査地東側の石垣(南東から)
西芦屋町30番地に設置したコンテナハウス(西から)

図版15 第1遺構面のビット・土坑・溝
S P15土層(南から)
S P27(S E01内)土層(南から)
S P48・49・63土層(西から)
S P49土器出土状況(南から)
S P51・52土層(南から)
S P73土層(南から)
S K03土層(西から)
S D03土器出土状況(南から)

図版8 調査風景

調査風景(3月18日)
調査風景(3月25日)
調査風景(3月28日)
調査風景(3月28日)
調査風景(4月4日)
調査風景(4月4日)
調査風景(4月14日)
調査風景(4月17日)

図版16 S E01(1)
S E01検出状況(南から)
S E01およびS P27掘削状況(北から)
S E01掘削状況(北から)
S E01土層(北から)
S E01東部土層(北から)
S E01西部土層(北から)
S E01土層(南から)

図版9 調査区土層(1)

S E01東部土層(南から)

S D07土層(南西から)

図版17 S E01(2)

S E01竊・遺物出土状況(南から)
S E01遺物取り上げ後の竊出土状況(北から)
S E01完掘状況(南から)
S E01土師器Ⅲ(43)出土状況(東から)
S E01須恵器輪(49)出土状況(南から)
S E01須恵器鉢(53)出土状況(北から)
S E01竊群下の埋土(北から)
S E01下位遺構の埋土(南から)

図版18 土器群1・2

土器群1(南から)
土器群2-1(南から)
土器群2-2(南から)

図版19 S R02-1

S R02-1護岸遺構(北西から)
S R02-1護岸遺構(北東から)

図版20 S R02-1・2

S R02断割1土層(南東から)
S R02-1埋土D層瓦器類(92)出土状況(南西から)
S R02-1杭埋土断面(南から)
S R02-2完掘状況(北から)
S R02断割1土層(東から)

図版21 S R03

S R03(南から)
S R03断割1土層(南から)
S R03断割2土層(南から)

図版22 第2遺構面

第2遺構面全景(西から)
第2遺構面全景(南西から)

図版23 第2遺構面のビット・土坑・溝

S P90土層(南から)
S P101土層(南から)
S P118土層(南から)
S P142土層(南から)
S P170土層(北から)
S K06土層(西から)
S K07土層(西から)

図版24 S X03

S X03検出状況(南から)
S X03掘削状況(北から)
S X03上位埋土土層(南から)
S X03下位埋土土層(南から)
S X03掘削状況(南東から)
S X03完掘状況(東から)
S X03完掘状況(北から)

図版25 第3遺構面

第3遺構面全景(西から)
砂眼検出状況(北東から)
砂眼土層断面(南東から)

図版26 第4遺構面・深掘トレンチ

第4遺構面全景(西から)
S K09土層(南から)
被物痕跡の土層(南西から)
深掘トレンチ1(北西から)
深掘トレンチ2(北東から)

図版27 遺物包含層・第1遺構面遺構出土遺物

寛永通寶
刻字もしくはヘラ記号をもつ須恵器片
S D03出土瓦器類
遺物包含層出土遺物(1)
遺物包含層出土遺物(2)
第1遺構面ビット・土坑・S R01出土遺物

図版28 S E01出土遺物

S E01出土遺物
S E01出土土師器Ⅲ
S E01出土須恵器輪

図版29 土器群1・2・3出土遺物

土器群1・3出土遺物
土器群2出土遺物

図版30 S R02出土遺物(1)

S R02埋土B・D層出土遺物
S R02埋土D層出土遺物
S R02埋土E・F層出土遺物
S R02埋土B層出土須恵器壺

S R02埋土D層出土土師器杯
S R02埋土D層出土瓦器碗
S R02埋土E・F層出土瓦器碗
S R02断割 1 26層出土縄文土器

小銅鐸X線写真(1)
小銅鐸X線写真(2)
小銅鐸X線写真(3)

図版31 S R02出土遺物(2)

S R02埋土C層出土遺物
S X02出土遺物
S R02礎除去時出土遺物
S R02埋土C層出土須恵器蓋杯
S X02出土土師器杯

図版32 S R03出土遺物

S R03出土遺物(1)
S R03出土遺物(2)
S R03出土漁撈具
S R03出土須恵器杯蓋
S R03出土須恵器杯身
S R03出土イイダコ壺

図版33 製造土器

製造土器(外面)
製造土器(内面)

図版34 瓦

瓦当・丸瓦・契斗瓦・平瓦(C類)
平瓦(B・C類)

図版35 埴輪・石製品

円筒埴輪(外面)
円筒埴輪(内面)
石鏃(表)
石鏃(裏)
砥石・結晶片岩

図版36 第2遺構面・第4遺構面出土遺物

第2遺構面ビット・土坑・S X03出土遺物
土器群4・S K09出土遺物

図版37 小銅鐸第一次クリーニング後現況

小銅鐸現況写真(1)
小銅鐸現況写真(2)
小銅鐸現況写真(3)

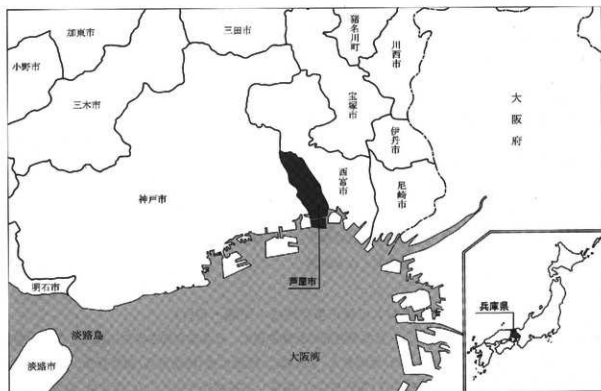
図版38 小銅鐸X線写真

第1章 調査の経緯・経過

第1節 調査に至る経緯

今回、発掘調査を実施した月若遺跡第96地点は、兵庫県芦屋市月若町66番3・4、69番3（敷地面積249.0㎡）に所在し、山手幹線街路事業地内に位置している。当該事業は、平成7年(1995)1月17日に発生した兵庫県南部地震の震災復興事業の一つに位置づけられており、兵庫県尼崎市から神戸市長田区までを結ぶ延長約29.5kmの幹線道路として、沿線の各市によって事業が進められてきた。芦屋市域では約2.3kmの区間が事業対象であり、平成21年(2009)3月31日現在、山手幹線全線開通を目指して、今回の調査地を含む芦屋市月若町から松ノ内町にかけての芦屋川横断工区区間303.5mで、工事が行われている最中である（山手幹線芦屋JⅤ工事事務所発行『山手幹線芦屋川横断工区街路事業』）。

さて、市域における街路事業地内には寺田遺跡・月若遺跡・業平遺跡・大原遺跡・打出岸造り遺跡・翠ヶ丘古墳群が分布していたため、文化財保護法第57条の3（当時）に基づく発掘通知書が、平成9年（1997）12月19日付で、芦屋市長北村春江より本市教育委員会に提出された。これを受けて、本市教育委員会では、本事業によって埋蔵文化財が大規模に損壊を受けると判断し、街路事業地内における未確認の遺跡を含め、各遺跡の範囲および遺構面・遺物包含層の具体的内容を把握することを目的として、平成10年(1998)2月2日～3月2日にかけて試掘・確認調査を実施した（寺田遺跡第103地点、月若遺跡第49地点、業平遺跡第43地点、大原遺跡第32地点、打出岸造り遺跡第24地点）〔森岡・竹村2005c〕。その結果、調査対象となった先行買収地19ヶ所の内、15ヶ所において埋蔵文化財の存在が確認された。なお今回の



第1図 兵庫県と芦屋市の位置

調査地については、既存建物があったため、確認調査を実施できなかった。

芦屋市教育委員会では、その後も用地買収が整い次第、追って試掘・確認調査を実施する予定となっていた。しかし、住宅の再建や土地区画整理事業をはじめとする震災復興関連事業に伴って、埋蔵文化財発掘調査の件数が激増する当時において、芦屋市教育委員会が山手幹線街路事業の発掘調査を迅速に実施することは大変困難であると判断された。そこで、芦屋市および芦屋市教育委員会は、山手幹線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の取扱いについて兵庫県教育委員会と協議した。その結果、地方自治法に基づく自治体間の一部事務委託として、調査主体を芦屋市教育委員会とし、調査機関として西側の隣接市である神戸市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。これについては、平成12年度に「埋蔵文化財の発掘調査業務に関する協定書」（以下、「協定書」と略す）が、芦屋市・芦屋市教育委員会と神戸市との間に、兵庫県教育委員会を立会人として締結された。

この協定書に基づき、平成12年度には神戸市教育委員会によって、事業地における試掘・確認調査が実施され、事業地内各地点における埋蔵文化財の取扱いが決められた。それ以降の本発掘調査についても、協定書に基づいて平成18年度まで神戸市教育委員会が調査機関となって実施され、その翌年度（平成19年度）まで神戸市教育委員会により整理作業および報告書の作成が行われた。

一方、平成18年度をもって神戸市教育委員会との協定書の締結期間が終了したため、平成19年度以降は、芦屋市教育委員会が本事業と関わる発掘調査を実施することとなった。これに対応するために、芦屋市教育委員会は、専従の嘱託職員を1名採用した。平成19年度の発掘調査対象地は月若遺跡第96地点の1件のみで、その整理作業および報告書（本書）の作成は平成20年度に実施することとなった。（竹村忠洋）

第2節 調査組織

今回の本発掘調査および遺物・資料整理、報告書作成は、芦屋市教育委員会を主体として、以下の調査組織で実施した。

1. 平成19年度（本発掘調査および遺物・資料整理）

芦屋市教育委員会教育長藤原周三、社会教育部部長松本博、社会教育部次長・生涯学習課課長川崎正年、社会教育部主幹白川誠二、生涯学習課（文化財担当）課長補佐大橋伸一、同課主査（文化財担当）森岡秀人（学芸員）、同課主事春木和子（総務担当）、同課学芸員竹村忠洋（本発掘調査担当）、同課嘱託守田めぐみ（学芸員、本発掘調査担当）、同課嘱託白谷朋世（学芸員、本発掘調査担当）、同課嘱託坂田典彦（学芸員）、同課臨時的任用職員国政恭子・木本真味・竹歳真子、同課調査・整理補助員桑原育世・國分ゆみ・近藤奈保子・佐藤春花・西岡崇代・本庄美美・山本麻理（竹村）

2. 平成20年度（遺物・資料整理および報告書の作成・印刷・刊行）

芦屋市教育委員会教育長藤原周三、社会教育部部長橋本達広、社会教育部主幹白川誠二、生涯学習課課長津村直行、同課主査（文化財担当）森岡秀人（学芸員）、同課主査（総務担当）細井良幸、同課主事春木和子（総務担当）、同課学芸員竹村忠洋（報告書作成・編集）、同課嘱託守田めぐみ（学芸員、報告書作成・編集）、同課嘱託白谷朋世（学芸員、報告書作成）、同課嘱託坂田典彦（学芸員）、同課臨時的任用職員

木本貞味・田中智美、同課調査・整理補助員桑原育世・西岡崇代・山本麻理・横森美和子（竹村）

第3節 調査の経過

1. 本発掘調査の経過

本発掘調査は、竹村・守田・白谷を調査担当者として、平成20年(2008)2月18日から4月30日まで実施55日で実施した。また、発掘調査と並行してコンテナハウスや三条文化財整理事務所において遺物洗浄や写真整理などを行った。調査・整理補助員としては、桑原・國分・近藤・佐藤・西岡・本庄・山本が従事した。

2月28日と4月15日には、発掘作業を委託した株式会社長谷川工務店が調査区に基準杭を設置し、国土標系第V系の座標を投影させた。3月1日と3月8日には、発掘調査を映像で記録するために、市内在住・映像作家山本徹男氏にビデオ撮影を依頼した。なお、発掘調査の経過および作業内容の詳細については、本節末に本発掘調査の日誌抄を掲げて記す。

(竹村・守田めぐみ)

2. 整理作業および発掘調査報告書の作成・編集など

本発掘調査終了後は、芦屋市教育委員会生涯学習課三条文化財整理事務所において、竹村・守田を担当者として、平成20年度に遺物・図面・写真整理・発掘調査報告書(本書)の作成・編集を行った。整理補助員としては、桑原・西岡・山本・横森が従事した。

平成20年(2008)5月14日には、遺物洗浄中に小銅鐸が確認された。この小銅鐸について、5月22日に芦屋市文化財保護審議会村川行弘委員に鑑定していただき、藤原教育長、橋本社会教育部長、津村生涯学習課長を交えて、今後の方針について協議した(第2図)。さらに、上記の協議を受け、森岡・竹村・守田の3名で遺物の同定作業を最優先とし、鑑別方法の具体策を検討、複数の側面からの専門調査を考案し、関係機関への具体的連絡を森岡がとり、6月4日には京都造形芸術大学教授内田俊秀氏に、6月12日には兵庫県立考古博物館館長石野博信氏に、6月18日には奈良県立橿原考古学研究所総務企画調整部長寺澤薫氏に、6月19日には独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部考古第一室長難波洋三氏に小銅鐸の鑑定を依頼するとともに、その学術的価値や現状・保存処理方法等について多くのご指導・ご教示を賜った。前後して、5月23日には森岡が奈良国立博物館学芸部に出張し、岩戸品子研究員(考古)、吉澤悟教育課長(考古)と面会し、風鐸(古代寺院)との青銅器としての違いを詳細に比較調査し、その属性や形態上の特性がまったくない点を確認して、小銅鐸と判断する傍証とした。

小銅鐸の保存処理と自然科学分析は、実施可能機関数社による見積り合わせを行い、平成20年(2008)10月15日から平成21年(2009)7月までの予定で決定機関の株式会社京都科学に委託した。ただし、保存処理などが間に合わなかったため、本書では小銅鐸が出土した遺構と小銅鐸のクリーニング前の観察に限って報告す



第2図 小銅鐸を鑑定する村川行弘委員
右手前から藤原教育長、森岡圭宏、村川委員
橋本部長、津村課長、細井主査

る。なお、小銅鐸については、平成21年度に別途報告書を刊行する予定である。

発掘調査報告書の印刷・製本は、芦屋人へあしやびとへが行った。

(竹村・守田)

【本発掘調査日誌抄】

平成20年(2008)

2月18日(月) 晴れ

本日前9時半より社会教育部白川主幹、生涯学習課竹村・守田、街路課藤本主幹・三宅主査、長谷川工務店松島氏・山端監督作業員が出席の下、開始立会を行った。

発掘調査は、既存建物の解体工事に引き続き行状であった。準備工として、1週間前にコンテナハウスを設置しており、本日はネットフェンスや他の器材の搬入のみを行った。工事用日置シートは張らず、最低限のネットフェンスのみ立てることになった。午後から水道メーターが設置された。

建物の基礎は煉瓦組で、これらを重機で撤去した。既存建物に住んでいた今村一代氏によると、建築師に「大正6年」の墨書があったということであった。

建物基礎を撤去後、重機掘削を行った。途中、工事用付設道路に面した南側の切通で、基本土層を確認した。また、調査地南東部にトレンチを設定し、重機掘削の深度を確認した。

2月19日(火) 晴れ

バックラーを搬入し、建物基礎の解体を進めた。4 t ダンプ3台で、残土を芦屋浜の処分場まで搬出した。

調査地東半の建物基礎解体と重機掘削が終わり、仮土層番号を設定した。仮1層：表土・機土、仮2層：灰褐色土(近世～近代耕土)、仮3層：灰褐色土(中世耕土)、仮4層：灰褐色土(遺物包含層)、仮5層：暗灰褐色土(遺物包含層)。

調査地中央北部で土器群1・攪乱1・2、SK01・02を抽出し、撮影した。仮5層は表面近くまで、重機で慎重に掘削を進める。重機掘削は、北東部を残して、調査地全体のおよそ2/3を終えた。

2月20日(水) 晴れ

朝からバックラーによる解体作業を進めた。本日から山本調査補助員が遺物の取り上げや遺物洗浄に従事した。

調査地北壁に側溝を設定した。調査地中央部には、黒色煉瓦による壁をもち、床面がコンクリートの地下施設が検出され、略測した。埋土からは戦後のガラス瓶やプラスチック製品などが出土した。

2月21日(木) 晴れ

調査地西部を中心に、引き続き重機で掘削した。この際、調査地西端の中央周辺を少し削り過ぎた。西側に隣接する月若遺跡第70地点の調査区を再掘削し、その東壁面にあたる土層の断面観察と写真撮影を行った。重機掘削と並行して、人力掘削により仮5層上面を検出した。調査地東壁に沿って側溝を設定した。

2月22日(金) 晴れ

調査地北壁の側溝を掘削した。北壁および東壁土層の略図を作成し、基本土層を設定した。1層が近現代表土、2層が灰褐色土(近世～近代)、3層が淡灰褐色土(近世～近代)、4層が淡灰褐色土(近世)、5層が灰褐色土(中世)、6層が茶褐色土(古代、仮5層)、7層が暗灰褐色土である。

7層上面を第1遺構面と捉え、6層を掘削した。調査地北東部でSK01を検出した。また、土器群2、SE01を検出した。本日、バックラーを搬出した。坂田篤託、神戸市教育委員会山本主査、芦の茅グループ藤川氏が来訪した。

2月25日(月) 晴れのち曇り

今日も解体材などの搬出を行う。第1遺構面を精査し、遺構を検出する。それと同時に遺構配置略図を作成した。

近現代の遺構は地下施設以外に、調査地西部中央に防空壕跡らしきもの、北西隅に電信柱アンカー(攪乱3)、南東部に廃棄土灰、中央北部に土坑状のものを検出した。地下施設のレベリングを行った。

調査地の南西部では草壁、北西部ではSD01・02を検出した。天気予報では、明日は雨ということなので、調査地全体を養生した。坂田篤託、今村氏が来訪した。

2月26日(火) 雨

今日は雨天のため、発掘作業は中止したが、発電機のみ搬入した。コンテナハウスで図面や日誌などの諸記録を整理した。

2月27日(水) 曇り時々雪

まだ風が強く、天候が思わしくない。午前中にハイブレッシャーと撮影用足場(二段)を搬入した。

午前中は現場の復旧を行い、第1遺構面検出状況の全景撮影のため、清掃を行った。土器群2-北(製塩土器)に分けた。午後、第1遺構面検出状況の全景写真を撮り、調査地に対し西と南西方向から撮影した。空が暗くても風も強く、時折雨がぱらつく天気であった。なお、後日判明したことが、この日、小銅鐸が出土していた。

2月28日(木) 晴れ

今日は、全景写真時の写真撮影足場の位置の打ち合わせのため、街路課藤本主幹や山手幹雄、芦屋JVJ事務所の方々が来訪した。また、藤川氏が来訪した。

測量業者が国土院を投影した基準測量杭を設置した。土器群2を撮影した。ピットを次々と半掘し、その土層断面を撮影した。一部、幅尺1/10での土層断面図を作成した。

防空壕跡の掘削を行った。入口付近は階段状になり下へ降りる構造になっていた。部屋の底は踏み固めてあり、耕作面の足跡のようにぼこぼことしたくぼみが見られた。

2月29日(金) 晴れ

ピットを半掘し、写真撮影、土層断面図作成、完掘という流れで、記録作業を進めた。SE01は、土手を残して上面10cmを掘削した。その際、完形に近い東横須恵遺跡が出土した。

北西隅の攪乱3については、土手を残しながら掘削し、写真を撮った。花崗岩の関知石が検出された。針金の束が見え、電信柱アンカーと考えられる。埋土からは、黄末遺物が出土した。

3月1日(土) 晴れ時々曇り

ピットの半掘と埋土の撮影や、SD01・03の掘削と撮影を行った。SD03からは完形に近い瓦器が出土した。全景写真のために調査地全体の清掃を行った。

昼食後、第1遺構面(本番の第1遺構面[SR02埋没後])の全景を撮影した。午後2時半頃、山本徹男氏がビデオ撮影を行った。今村氏に調査状況を説明した。全景写真を撮影した後、第1遺構面平面図を作成した。SE01の掘削では、円錐が黒々と顔を出す。掘削が機軸になるので狭い井戸ではないと思われた。

3月3日(月) 曇り時々雨



第3図 調査風景（3月8日）

今日は天気が悪く、風強い。第1遺構面平面図の作成が中心であったため、作業員の人数を減らし、静かであった。S E01は、少し深く掘削した状態で撮影した。里土の焼土層からは、完形の土師器皿が出土した。また、S R03からは完形の須恵器杯身が出土した。S R02・03の断面位置を決めて、調査を終えた。

3月4日(火) 晴れ

S R02・03を断ち割る。S R02では、礫下に完形の瓦器碗が出土し、写真を撮影した。S E01は、土層断面を撮影した。

3月5日(水) 曇り時々晴れ、時折雪

S E01は、土層断面図を作成した。実測は白谷、土層註記は守田が行い、白谷が追記した。

白川主幹、藤川氏が来訪した。

3月6日(木) 晴れ時々曇り

S E01は、土層断面図の註記を行った後、写真撮影し、土手を除去した。S R02は、護岸遺構の礫を抽出した。現状を撮影し、磁石を略図に記入した後、磁石を除去した。S R02 C層付近で、マーブル状に暗灰色土が広がるS X02を抽出した。土器群2は、この遺構に伴うと考えられた。ただし、明確に検出できなかったことから、土手を残して埋土を掘削すると同時に、断ち割りを行った。森岡主査が来訪した。

3月7日(金) 曇り時々晴れ・雨

S E01は、礫や土器を除去しながら、土層断面図を補正した。S R02は、護岸遺構の検出を行い、光波測距器と手掘り併用して、縮尺1/20で平面図を作成した。S R02とS R03との切り合い関係や、遺構ラインを確定するため、再度精査を行った。S X02は西宮部にも断削されたが、遺構の彫形が不明確である。白川主幹、街路課職員が来訪した。通行人の見学があった。

3月8日(土) 晴れ

午前中は、第2遺構面(本書の第1遺構面〔S R02埋没前〕)の全景写真を撮影するために、清掃と白線引きを行った。S X02は、土層断面を観察した結果、遺構ではないと判断した。

午後第2遺構面の全景写真を撮影し、地上から個別遺構を撮影した。その後、山本徹男氏がビデオ撮影を行った。竹村の家族、近藤調査補助員一家、天羽調査補助員が来訪した。

3月10日(月) 曇り

今後は、実測図の作成が中心である。現場は、静かであった。

S X02付近のS R02 C層は、B層の下に潜っていくようで、土器や瓦などは傾斜面に投棄されたものと解釈するのが妥



第4図 調査風景（3月8日）

当であろう。しかし、土器片の密集度が非常に高く、遺構の性格については注意が必要である。

3月11日(火) 晴れ

3月8日の清掃時に検出した新規のピットの記録作業を行った。S R02の護岸遺構の平面図を引き続き作成し、断削1のA・B層を掘削した。S E01はレベリングの後、礫を取り除いた。白川主幹、街路課三益主査、六甲山築造部調査会浅岡氏が来訪した。

3月12日(水) 晴れ

昨日に続き、平面図や土層断面図の追加を行った。S E01は、礫を除去した後に写真撮影を行った。S R03は、下層にさらに砂礫層が認められた。また、S R03の西部に認められる砂礫層地境をS X01と名付けた。

3月13日(木) 晴れ時々曇り

S R02・03は、平面図を追記後、レベリングを行った。護岸遺構の礫には、六甲花崗岩・布引花崗閃緑岩・結晶片岩などが認められた。S R02南半のB層を掘削した。S E01は、北半部を完掘し、土層断面図を補正した。S X01は、平面図を作成した後、完掘し、写真撮影、レベリングを行った。

S X02からS R02にかけて、断ち割ったところ、花崗岩が並んでいる状況が認められた。下層に、護岸遺構があるかもしれない。さらに、調査区の西半では7層を5cmほど掘削した。

元生涯学習課臨時任用職員国政恭子氏が来訪した。

3月14日(金) 曇りのち雨

久しぶりの冷たい雨である。コンテナハウスで遺物洗浄および図面整理を行った。午後には、芦屋市文化財保護審議会村川委員、森岡主査、坂田彌生が来訪した。

3月17日(月) 晴れ

今日はサンテレビによる芦屋市の文化財保護行政に関する取材などで、徹たたく1日が過ぎていった。取材班を連れて午前中には白川主幹が、午後には街路課三益主査とインターンシップの大学生4名、方方には尼崎市田能資料館学芸員水津氏が来訪した。

S E01は南半の下部を掘削し、土層註記の補正を行った。S R02は、レベリングを行い、土器を取り上げた。断削1の北側土手および1区の礫を除去したところ、直径10cm程度のピットが認められた。護岸遺構に伴う枕痕跡であろうか。

3月18日(火) 晴れのち曇り

S R02北半部の礫を除去すると同時に、杭痕跡に注意し精査を行ったところ、3基ほど検出できたので平面図に追加した。S R02北部を掘削していくと、下層の礫が集中している



第5図 調査風景（4月1日）

様子が見られた。S E01は図面を補足し、掘削を行った。

調査区西半分は7層を少し掘り下げ、第3遺構面(本青の第2遺構面)を精査した。暗褐色や黒褐色土の遺構が認められた。北西部の溝(S D07)は、土器を多く含んでいるようである。

午後には、藤原教育長、社会教育部松本部長、白川主幹、國政氏が来訪した。

3月19日(水) 曇りの雨

本日中にS R02B層の完備状況を撮影するために、作業開始時間を早めた。全体に軽く清掃を行い、なんとか午前9時頃に撮影を終えた。S E01もレベリングを終えた。坂田暢弘、藤川氏が来訪した。

10時頃から本格的に雨が降り出したので、発掘作業を中止した。コンテナハウスで、図面整理と遺物洗浄などを行った。

3月21日(金) 曇りの晴れ

一昨日と昨日の雨で、朝は現場の復旧から始まった。S E01は、土手をはずしながら、図面の補足を行った。調査区西半分は、第3遺構面とて検出したピットを半掘し、写真撮影、メモ記録、遺構分布図の作成を行った。S D07は、土手と出土土器を残した状態で写真撮影を行った。

調査区南東部は、S R03やS R02C層を残して、7層の掘り下げを開始した。S R02北東区は、C層を掘り下げた。

午後には、白川主幹、兵庫県教育委員会岡崎氏・深井氏が来訪した。

3月22日(土) 晴れ

今日は久しぶりに春の陽気を感じられた。S D07は土層断面図および平面図の作成にかかった。S R02は下層の平面実測、S R02全体の補足を行った。S E01は完掘した。

3月24日(月) 晴れ

S D07は土手を除去し、完掘した。S E01は下層を東西方向に断り割り、図面の追記を行った。S R03下層を掘削した。S R02Ⅱ・Ⅲ区はC層を掘削し、第3遺構面を検出した。I区は礎を残した状態で実測した。調査区北壁は実測を進めたが、土層の検討課題が多く残った。

夕方には、近藤調査補助員、木庄調査補助員が来訪した。

3月25日(火) 晴れ

第3遺構面のピットを次々に半掘し、写真や記録におさめていく。須恵器が出土したものがあり、第2遺構面で見出したピットも含まれている。S R02は、下層を写真に撮り、掘削を開始した。この時、S R02内で新たに検出したS X03も検出状況を確認した。S R02の断削Ⅰ内26層から押出文土器の小片が出土した。また、S R03土手から古墳時代前期の円筒土輪の破片が出土した。近藤調査補助員が来訪した。



第6図 調査風景（4月4日）

3月26日(水) 晴れ

昨日掘削したS R02の断削Ⅰは、土層断面を撮影し、実測図を作成した。S X03は半掘し、写真を撮った。S X03内に3基のピットが確認できたため、これを優先して北東区のピットを記録していった。また、今頃は金曜日に基準測量杭を打ち直すため、今ある基準測量杭を除去した。

3月27日(木) 晴れ

遺構の半掘が進み、平面図やレベリングが忙しくなってきた。全体的に図面のチェックも行い、仕上げていく。

今日は森岡主査、坂田暢弘、國政氏が来訪した。

3月28日(金) 晴れ時々曇り

第3遺構面の全景写真撮影に向けて、遺構の掘削や土層の整理を進めた。午後には、測量業者が基準杭を打ち直した。

S X03は土手を除去し、下層を平面的に検出した。調査区北壁と東壁は、清掃しながら、土層の検討を行った。S R07を検出し、半掘した。白川主幹、街路課早見氏、長谷川工務店松島氏が来訪した。

3月29日(土) 曇りの晴れ

第3遺構面の全景を撮影するため、朝から清掃と白線引きに従事した。調査補助員は、平面図、レベリングを進め、11時頃から全景写真を撮影した。その後、山本徹男氏がビデオ撮影を行った。白川主幹、近藤調査補助員一家、天羽調査補助員が来訪した。

3月31日(月) 曇り時々雨

第3遺構面の遺構の中では、まだ須恵器が伴うものがあり、上層の遺構を見逃しているようである。S R03は、断削の壁面を撮影した。S X03は、平面図とレベリングが終わり次第、礎の除去をはじめた。さらに、調査区南西部では、7層の掘削を開始した。

4月1日(火) 曇りの晴れ

S X03は、引き続き礎を取り除いた。砂岩、結晶片岩、玉石、砥石などを確認したが、これらの石は中央に縦位に据えているように見え、9層を挟むように入り込んでいる。調査区北東区以外では7層を掘削し、8層上面を検出したところ、北西区を中心にピットが数基見つかった。埋土の根柢から次の遺構面に伴うものか、第3遺構面のものであるかの注意が必要である。

川崎次長、白川主幹、津村課長、細井主査が現場を訪れた。

4月2日(水) 曇り時々晴れ

S X03は、完備状況の平面図を作成した。調査区北東部以外では、全体的に8層上面が検出できた。検出したピットを半掘したところ、数cmと浅く、遺構ではないと考えられるも

のや、上面遺構の無り残しと考えられるものであることがわかった。そこで、第4遺構面は次の9層上面とした。

4月3日(木) 曇り時々晴れ

昨日、S X 03の記録が終わったため、全面的に7・8層の掘削にかかった。9層上面を抽出し、精査した。北西部では、地盤による砂眼が検出された。

北壁の分層と土層の検討を行った。S X 03とS R 02の切り合い関係が解いた。調査区北壁面を縮尺1/50で作成しはじめた。

街路課北田課長、中尾主幹が来訪した。

4月4日(金) 曇り

第4遺構面(本書の第3遺構面)を9層上面と捉えて、本日は検出状況の全景写真を撮影した。足場は西側のみ組み立てた。第4遺構面の平面図を作成した。

4月7日(月) 曇りのち雨

朝から天気が悪かったが、南半部の9層の掘削にかかった。午前中に雨が降り出し、発掘作業を中止した。コンテナハウス内で図面整理と遺物洗浄を行った。

4月8日(火) 晴れ

昨日の降雨により、現場復旧から開始した。掘削をしながらかつ同時に第4遺構面の平面図も作成していった。調査区北半部では、砂眼が検出された。また、調査区南壁の土層断面図を作成しはじめた。

兵庫県西宮土木事務所、芦屋市街路課、山手幹線芦屋JV工事事務所の視察があった。

4月9日(水) 曇り時々晴れ

南半部の9層掘削があらたに終わると、10層上面において黒い埋土をもった遺構のようなものが認められた。それらの内の2つを断ら割ったところ、深さは30cm程度と深くなるものの、遺物も認められず、土質が9層と同じであることから、人為的な遺構ではないと判断した。

平面図とレベリングが終わり次第、調査区北半も砂眼の部分を除いて9層の掘削にかかった。砂眼については断ら割を行い、写真と土層断面図を記録することにした。明日は雨の予報なので、終了間際になんとか写真を取り終えたが、撮影時の光の加減がよくないことから急入りに発生して現場を去った。

4月10日(木) 雨のち晴れ

朝から雨であった。全員、三条文化財整理事務所に出勤して作業を行った。主に図面整理と遺物洗浄を行った。洗浄中に法隆寺式軒丸瓦の破片が出てきた。

4月11日(金) 曇り

朝、調査区南西部は完全に水没していた。復旧後、南半部において第5遺構面(本書の第4遺構面)の精査を行った。幸い、砂眼の断りには断れなかったもので、もう一度撮影し、土層断面図にとりかかった。北東部では、S R 02の底でS R 09が検出された。黒い粘質土の埋土である。調査区北壁西半の分層や実測図の補正を行った。藤川氏が来訪した。

4月14日(月) 曇りのち晴れ

調査区北半部のレベリングを行い、その後、10層上面を検出した。平面図および調査区北壁の土層断面図を進めていった。

4月15日(火) 晴れ

測量業者が基準測量杭を打ち直した。調査補助員は、コンテナハウスで図面整理と遺物洗浄を行った。本書の第4遺構面の全景を撮影した。その後、平面図の続きや、土層註記を行った。

白川主幹、森岡主査、細井主査、街路課北田課長、三栄主

査が来訪し、今後の調査についての協議が行われた。発掘調査の残りは実働7日で、コンテナハウスなどの撤収は4月末日に行うことに決まった。その後の整理作業は、三条文化財整理事務所で行うこととなった。

4月16日(水) 曇り一時雨

天候が優れず、途中、降雨が激しくなる中で作業であった。南半部のレベリングや、調査区北壁の土層註記の補正を行った。その後、調査区北半部に深掘トレンチ1を設定し、重機で掘削した。下層からは遺構・遺物はまったく確認されなかった。写真撮影と縮尺1/20で北壁土層断面図を作成した。トレンチの深さは現地表面から約2.9mまで及んだが、水が湧くことがなかった。17層以下は、黄褐色の砂層に礫が混じり込んだ層が中心で、街路課が以前行った調査によれば、この層がずっと深部まで続くとのことである。また、地下8mくらいで巨礫が多く認められ、湧水層に達したらしい。森岡主査と坂田暢弘が来訪した。また三条分室管理人神谷氏の見学があった。

4月17日(木) 雨のち曇り

雨のため発掘を中止し、コンテナハウス内で遺物洗浄、実測図のチェックなどを行った。

4月18日(金) 雨時々曇り

昨日に引き続き雨が降る。現場を中止し、遺物洗浄に従事した。白川主幹、細井主査が来訪した。

4月21日(月) 快晴

現場の復旧を行い、深掘トレンチ2を設定した。現場の撤収等も同時に進めた。調査地周辺の写真を撮影した。午後は深掘トレンチ2の記録作業を行った。

4月22日(火) 晴れ

調査区を囲っていたフェンスや防塵シートの撤収をはじめた。撮影用足場や発電機などを撤出した。調査は、図面の補正と、調査区全体のレベリングを中心に行った。調査区北壁の土層断面実測が終了した後、調査区壁に見える土層片を取り上げた。本日をもって現地の作業はすべて終了した。

4月23日(水) 晴れ時々曇り

今日からは、コンテナハウス内での遺物整理と三条文化財整理事務所での図面整理とに分かれて作業を行った。

4月24日(木) 雨

コンテナハウスで遺物洗浄および遺物整理を行った。今日より遺物実測を開始した。

4月25日(金) 晴れ

本日は全員が三条文化財整理事務所で作業した。図面整理と遺物実測を進めた。

4月28日(月) 曇り時々晴れ

調査補助員はコンテナハウスに出勤し、撤収前の片付けを行った。

4月30日(水) 晴れ

コンテナハウスを撤収した。ハウス周辺のフェンス等も解体した。三条文化財整理事務所で作業を続けながら、引き上げてきた器材や荷物の受け入れを行った。午後2時頃、完全に撤収し、現状復旧の状況を撮影した。

(竹村・守田)

第2章 調査地をとりまく環境

第1節 芦屋市の歴史的環境

今回、発掘調査を実施した月若遺跡第96地点は、兵庫県芦屋市月若町66番3・4、69番3に所在しており、阪急電鉄神戸線芦屋川駅から南西に約300mの場所に位置している(第9図)。調査地周辺では、平成22年(2010)の開通に向けて、山手幹線芦屋川トンネルをはじめとする関連工事が着々と進められている(図版1・7)。

芦屋市は、兵庫県の南東部に位置する阪神間の住宅都市である(第1図)。市域の形状は南北に細長く、その規模は東西2.5km、南北8.3km、面積18.57km²を測る。市域の地形は、六甲山地と大阪湾に挟まれた北高南低の変化に富むものとなっており、山地・丘陵・台地・段丘・沖積扇状地・沖積低地・砂州・浜堤・砂浜が形成されている[辻2002・2003a、辻・矢作・辻本・田中・バリノ2003、松元・田中・辻2007]。市域を流れる主要な河川には、芦屋川と宮川がある。

現在の市街地は、六甲山地南麓の台地・丘陵部と神戸平野とも呼称される東西に細長い平野部を中心に形成されている。市の推計人口総数は、平成21年(2009)2月1日現在、93,155人となっている[芦屋市広報課2009]。狭隘な平野部には、阪急電鉄神戸線、JR東海道本線(神戸線)、国道2号線、阪神電鉄本線、国道43号線、阪神高速国道3号神戸線・5号湾岸線が並行して通っており、東西交通の要衝となっている。さらに、先に触れたとおり、平成22年(2010)には都市計画道路山手幹線が全線開通する予定である。

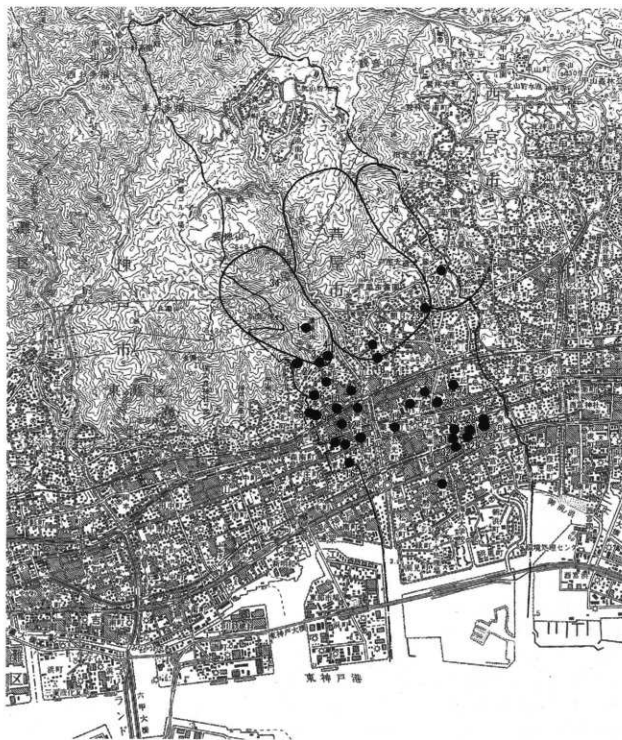
市内に分布する遺跡は、平成21年(2009)3月31日現在、137遺跡が周知されている。それらの内、主要な遺跡について時代を追って概観する(第7図)。

芦屋市域において最も古い遺跡は後期旧石器時代のもので、岩ヶ平・朝日ヶ丘・堂ノ上・打出小槌遺跡など台地および丘陵に立地するものと、津知遺跡のように沖積扇状地に立地するものがある。

縄文時代の遺跡は早期から晩期まで認められるが、その立地は山地および丘陵に立地するもの(山芦屋遺跡・朝日ヶ丘遺跡など)、沖積扇状地に立地するもの(芦屋廃寺遺跡・寺田遺跡・六条遺跡・前田遺跡・津知遺跡・業平遺跡・若宮遺跡など)に大きく分けられる。

弥生時代に入ると、前期から中期前半までは、寺田遺跡・清水遺跡・津知遺跡・若宮遺跡および金津山古墳下層など、比較的低地に立地している遺跡が目立つが、中期中葉から後期前半には、六甲前山に立地することが特徴的な高地性集落である会下山遺跡・城山遺跡や、丘陵・台地に立地する山芦屋遺跡・城山南麓遺跡など、高所に分布が偏る傾向が認められる。一方、月若遺跡・寺田遺跡・芦屋廃寺遺跡・業平遺跡・打出小槌遺跡など、平野部の諸遺跡でも当該時期の遺構・遺物が確認されているが、その数は少ない。後期後半になると、先に挙げた高所立地の集落は減少する一方で、芦屋川右岸の扇状地を中心に遺跡群が形成される。当時代の水田跡は、前田遺跡や津知遺跡で検出されており、扇状地縁辺部から沖積低地にかけて耕作地が形成されていたと推測される。江戸時代には、「堂ノ上」(現在の楠町付近)から外縁付鉋Ⅱ式銅鐙が出土している。

古墳時代では、その初葉において、芦屋川右岸の遺跡群が引き続き居住域となっている。前期になると、三条岡山遺跡や三条会下遺跡など丘陵・台地上の遺跡において堅穴住居跡をはじめとする遺構や遺物が認められるものの、扇状地においては遺構・遺物量が減少する。中・後期になると再び扇状地上で遺構・



- | | | |
|-----------------|-------------|----------------------|
| 1 娘山遺跡 | 13 六条遺跡 | 25 久保遺跡 |
| 2 金下山遺跡 | 14 清水遺跡 | 26 豊ノ上遺跡 |
| 3 三条古遺跡・山戸屋遺跡 | 15 新田遺跡 | 27 元塚 |
| 4 娘山古遺跡・芦屋川水原遺跡 | 16 津屋遺跡 | 28 金澤山古墳 |
| 5 宮庭跡 | 17 丹波神社境内古墳 | 29 小松原遺跡 |
| 6 三条会下遺跡 | 18 藤ヶ谷遺跡 | 30 打出小塚古墳 |
| 7 西山町遺跡 | 19 栗平遺跡 | 31 打出小塚遺跡 |
| 8 三条岡山遺跡 | 20 大原遺跡 | 32 若宮遺跡 |
| 9 三条九ノ坪遺跡 | 21 打出中遺り遺跡 | 33 徳川遺跡 |
| 10 芦屋町寺遺跡 | 22 八十家古墳群 | 34 徳川大坂城東六平松石橋山側御所跡 |
| 11 月野遺跡 | 23 朝日ヶ丘遺跡 | 35 徳川大坂城東六平松石橋奥山側御所跡 |
| 12 寺田遺跡 | 24 阿保親王塚古墳 | 36 徳川大坂城東六平松石橋寺ヶ平御所跡 |

第7図 芦屋市内主要遺跡分布図 1 / 50000

遺物が顕著に検出されている。また、中期から竈を造り付ける堅穴住居跡がみられるようになり、7世紀代には堅穴住居から掘立柱建物に移行している。当時代の水田跡は、津知遺跡や大原遺跡などで検出されている。

市内の古墳は、4～7世紀にかけて数多く築造されている〔白谷・森岡2008〕。阿保親王塚古墳(前期)、金津山古墳(中期)、打出小槌古墳(中期)などの大型古墳や駒塚古墳(後期)が翠ヶ丘丘陵上に分布している。さらに、平成20年(2008)に実施された若宮遺跡(第45地点)の確認調査では、埴輪や葺石を伴う濠状遺構の一部が確認され、埋没古墳の存在が推測されている。また、平成20年(2008)には、三条岡山遺跡(第19地点)において古墳時代中期後葉の円墳が3基検出され、丘陵上に初期群集墳が存在していることが明らかとなった。後期には、業平遺跡において後期前半(TK10型式段階)の横穴式石室墳などが検出されている。その後、六甲山地南麓では、城山古墳群や三条古墳群、八十塚古墳群などの群集墳が形成される。芦屋神社境内古墳も、本来、笠ヶ塚群集墳を構成していた横穴式石室墳である。

古代令制下、芦屋市域は摂津国菟原郡域に含まれ、当郡には賀美・葦原(葦屋)・佐才・住吉・覚美・天城・津守・布敷の八郷が存在したが(『倭名類聚抄』巻六、摂津国第七十二)、その内の葦屋郷の大半や賀美郷が市域にあったと考えられている。この時期の集落跡は、芦屋廃寺遺跡・月若遺跡・寺田遺跡をはじめとして芦屋川右岸の遺跡群で確認されている。さらに、これらの遺跡から検出された遺構・遺物の中には官衙的要素の強いものが目立ち、芦屋川右岸地域に寺院・郡衙・駅家が集中していたことが推測されている。古代寺院としては、白鳳文化期に建立された芦屋廃寺がある。郡衙としては、寺田遺跡(第90地点)において「大領」「少領」の墨書をもつ須恵器が出土したことから、当地点周辺が菟原郡衙の前半期の所在地と推定されている。駅家については、平安時代前期の大型建物跡が検出された津知遺跡(第2地点)や、隣接する神戸市東灘区所在の深江北町遺跡(第9次調査)において「驛」の墨書土器が出土したことから、両遺跡周辺が葦屋驛ないし驛戸集落の所在地の有力な候補地となっている。さらに、月若遺跡と寺田遺跡では、芦屋廃寺跡出土の創建期瓦と同型式の単弁八弁蓮華文軒丸瓦や複弁八弁蓮華文軒丸瓦、均正忍冬唐草文軒平瓦が出土しており、芦屋川右岸に分布する各遺跡の中に官衙に関連する施設があったようである。墓制では、藤ヶ谷遺跡において奈良時代の古墳が検出されている。遺物では、三条九ノ坪遺跡において白雉3年(652)を示すと考えられる「三 壬子年」の紀年銘をもつ木簡が出土している。芦屋廃寺遺跡では、「寺」の刻印をもつ鉄鉢形の須恵器が8点出土している。

古代後半～中世においても、芦屋廃寺遺跡・月若遺跡・寺田遺跡が居住域となっているようであるが、新たに六条遺跡・清水遺跡・前田遺跡・津知遺跡・船戸遺跡・打出小槌遺跡・若宮遺跡などにおいて集落跡に伴う遺構が検出されており、その結果、集落遺跡数は増加している。また、古代末以降には、三条岡山遺跡・冠遺跡・久保遺跡・打出小槌遺跡など丘陵・台地に立地する遺跡や若宮遺跡など沖積地に立地する遺跡でも、犁痕などの耕作地に関連する遺構が数多く検出されており、耕作域が拡大していることがわかる。

16世紀に入ると、摂津豊島の土豪、瓦林政頼が鷹尾山(通称、城山)に鷹尾城を築くが、その山麓部に分布する城山南麓遺跡では、同時期の建物跡や火葬墓などが確認されている。

その後、芦屋地方は、天下統一を成し遂げた豊臣秀吉の直轄地となるが、慶長20年(1615)の大坂夏の陣で豊臣家が滅びると、徳川家譜代領となった。元和3年(1617)には、戸田氏鉄に与えられ、尼崎藩となった。幕府は戸田氏鉄に大坂城の修築を命じ、元和6年(1620)～寛永6年(1629)に、西宮市から神戸市東部に及ぶ六甲山地南麓の山地および丘陵部において、大坂城再築に伴う石垣用石材の採石場が経営され

る。この採石場跡は、現在、「徳川大坂城東六甲採石場跡」と呼称され、市内の採石場は、岩ヶ平・奥山・城山の3つの刻印群に細分されている。六甲山中や市街地には当時の採石跡や刻印石・矢穴石・割石などの関連石材が多数分布しており、岩ヶ平刻印群を中心に開発に伴う発掘調査が数多く実施されている。また、石切丁場から切り出された石材は浜辺まで運搬され、大坂城までは大阪湾を介して運ばれたが、海浜部に位置する呉川遺跡では搬出されずに残された刻印石・割石が見つかり、近年、宮川河口付近や西蔵町でも同様の石材が確認されている。



第8図 呉川遺跡第22地点の近代の遺物包含層

寛永12年(1635)には、戸田氏に替わって青山氏が、宝永8年(1711)には松平(板井)氏が尼崎藩主となるが、その間、芦屋地方は尼崎藩領であった。明和6年(1796)には、市域に存在した四ヶ村の内、芦屋村・打出村は大領となり、三条村・津知村は尼崎藩領として明治維新を迎える。

近世後半から近代にかけての埋蔵文化財包蔵地としては、産業用水車場跡である芦屋川水車場跡や、月若遺跡の東部でみつまっている複数の竈などが挙げられる。市指定文化財である小阪家住宅は、阪神・淡路大震災によって全壊し、移築復元を前提として解体されたが、その際に発掘調査が実施され、当建物の建設時期が18世紀後半～末であることが解明されている。

明治時代になり、慶応4年(1868)、天領である芦屋村・打出村は兵庫鎮台(改称して兵庫裁判所)の管下に入り、その後、第一次兵庫県に属した。残る三条村・津知村は、明治2年(1869)の版籍奉還により尼崎藩県となり、明治4年(1871)の廃藩置県によって尼崎県の管下へ属した。同年11月には、尼崎県は第二次兵庫県に編入され、その結果、四ヶ村すべてが同一行政管下へ置かれることとなった。明治22年(1889)4月には、町村制施行に伴い四ヶ村は合併し、精道小学校の校名をとって、精道村が発足した。

交通に関しては、明治7年(1874)に大阪と神戸間に官設鉄道(現在のJR線)が開通し、大正2年(1913)には芦屋駅が新設された。また、明治38年(1905)の阪神電鉄の開通に伴い、打出停留所と芦屋停留所が開設した。大正9年(1920)には、阪急電鉄神戸線の開通によって、芦屋川停留所が開設された。昭和2年(1927)には、阪神国道(現在の国道2号線)が開通した。こうした交通網の急速な整備を背景に、明治から昭和初頭にかけて、住宅地化が急速に進んだ。呉川遺跡第22地点の確認調査では、明治40年代から昭和10年代にわたる陶磁器類やガラス瓶、歯ブラシなど、膨大な数の日常生活用品が出土している(第8図)。

昭和15年(1940)11月10日には、市制施行に伴い、芦屋市が誕生した。発掘調査では、1940年代前半に作られた防空壕跡や1945年の空襲による戦災の痕跡が多数みつまっている(竹村2009)。戦後の復興の中、昭和26年(1951)3月3日には、「芦屋国際文化住宅都市建設法」が公布され、恵まれた住環境を活かした町づくりが行われることとなった。

このような芦屋市を平成7年(1995)1月17日午前5時46分に発生した兵庫県南部地震が襲い、甚大な被害を受けた。その後、復興が推し進められているが、埋蔵文化財では住宅の再建をはじめとする復興事業に伴い、震災復興調査が激増した。月若遺跡においても例外ではなく、平成21年(2009)2月28日現在、その調査地点数は104地点を数える(確認調査・工事立会・慎重工事を含む)。(竹村)

第2節 月若遺跡の概要

月若遺跡は、現在の月若町・西山町・西芦屋町に分布しており、その範囲は東西約250m、南北約350m、面積約52,700㎡を測る(第9図)〔芦屋市教委2001〕。当遺跡周辺には、芦屋廃寺・寺田・西山町遺跡が隣接しており、市内では埋蔵文化財が最も濃密に含まれる地域である。これらは埋蔵文化財包蔵地としては行政的に区分されているが、各遺跡間では時期や遺構の性格などにおいて密接な関係が認められる。なお、山手幹線は、芦屋川右岸地域において月若遺跡と寺田遺跡の分布範囲を東西に貫通している。月若遺跡において、山手幹線街路事業に伴う事前調査地点は、第68・70・79・81・89・96地点である。

月若遺跡は、芦屋廃寺遺跡D地点として昭和60年(1985)に実施された試掘調査によって、その存在が明らかとなった(第1地点)。既往の調査によって、縄文時代早期から江戸時代に至る複合遺跡であることが判明している。地形的には沖積扇状地中位面に立地しており、標高は約20～30mである。遺跡分布範囲の東端では、芦屋川の河岸段丘崖と考えられる崖状地形が検出されている(第69・89地点)。

縄文時代では、早期・前期・中期・後期の土器・石器が若干確認されており(第2・13・18・19・71・81地点)、第13地点では早期末～前期初頭の土坑が確認されている。

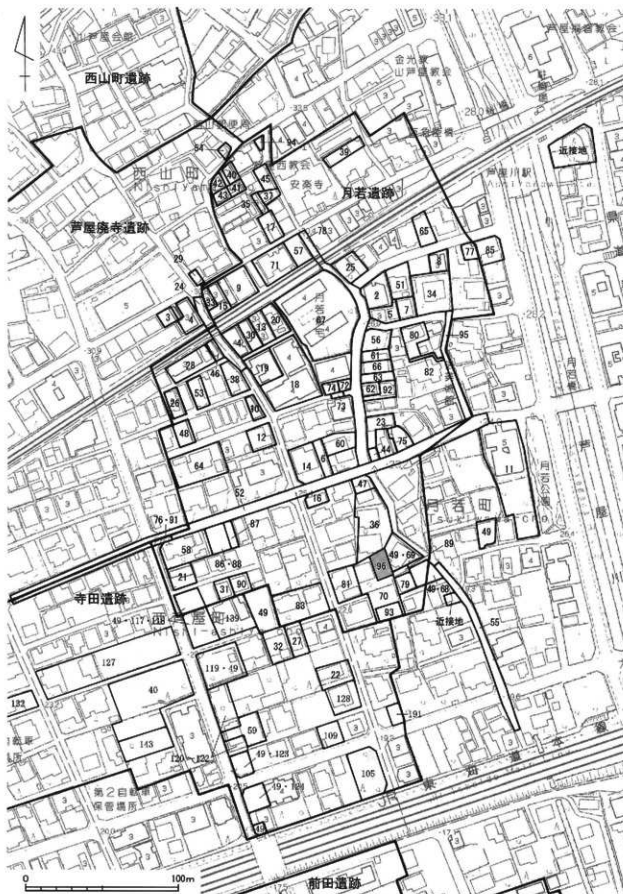
弥生時代では、弥生時代前期の遺構・遺物は確認されておらず、中期後半の土坑が第12地点で検出されている。しかし、後期前半までの遺構や遺物は非常に少ない。それに対して、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭になると、竪穴住居跡をはじめ、居住域に伴う多くの遺構が検出されており、大規模な集落が形成される。

古墳時代に入ると、前期の遺構は比較的少ないが、中期以降、竪穴住居跡やビットが多数検出されている。出土した遺物の中には、子持勾玉や有孔円板、白玉、勾玉などの滑石製模造品や土製勾玉などの祭祀遺物が認められる(第1・10・12・18・19・69地点)。

古代においても、引き続きビットなど居住域に伴う遺構が多く認められており、遺物も多数出土している。それらの中で、第81地点で古代の大溝から出土した法隆寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦1点と均正忍冬唐草文軒平瓦2点を含む多量の瓦片や埴は注目される。さらに、月若遺跡の南方に位置する寺田遺跡第191・197地点からは、古代の丸瓦・平瓦片が出土しており、西方に近在する寺田遺跡第181地点でも、単弁八弁蓮華文高句麗様式軒丸瓦1片と均正忍冬唐草文軒平瓦1片が出土している。これらの各地点出土の瓦当は、芦屋廃寺跡の創建期およびプロト創建期のものと同型式であると考えられる。これらの出土瓦から、古代において月若遺跡南部や寺田遺跡の東部に、寺院関連施設や官衙的施設があったことが推定される。なお、月若遺跡第81地点の大溝からは、瓦片と一緒に埴形滓を含む鉄製品生産に伴う鉱滓が出土している。

中世では、掘立柱建物をはじめ居住域に伴う遺構が多数見つかった。第70地点の調査結果から、当地点付近に逆「コ」字状に区画する堀が存在した可能性が指摘されている。第71地点では、15世紀頃から耕作地となっている。その他にも居住域から生産域に変化した地点が認められる。なお、近世～近代の特徴的な遺構として、酒造関連とみられる甕が10基近く検出されている(第8・13・18・25地点など)。

今回の調査地は月若遺跡分布範囲の東部に位置しており、隣接する第69・70・79・89地点をはじめとする周辺の調査結果からは、弥生時代後期以降の遺構・遺物包含層があることが推測された。(竹村)



第9図 月若遺跡および寺田遺跡調査地点分布図 1/2500
(ゴシック体は月若遺跡、明朝体は寺田遺跡の調査地点番号を示す。)

第3章 発掘調査の概要

第1節 本発掘調査の方法

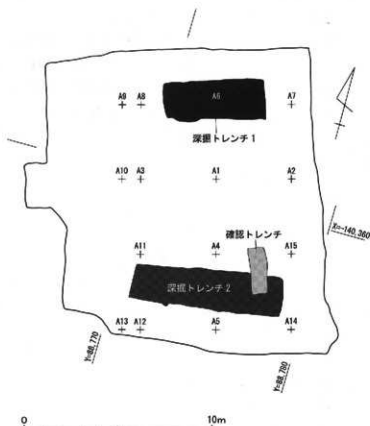
今回の調査地点は、都市計画道路山手幹線の道路敷用地内に位置している。本地点の周辺をみると、東側に月若遺跡第69・89地点、南および西側に第70地点が隣接している(第9図)。第69・70地点は平成14年(2002)に〔前田・石島・中村2004〕、第89地点は平成18年(2006)に発掘調査が完了しており〔斎木編2008〕、ちょうど両地点に挟まれた未調査区域が本調査地点といえることができる。これらの内、東側に隣接する第69・89地点は、芦屋川の旧流路に伴う谷地形に位置しており、今回の調査地点とは地形的に異なる様相であった。そこで、今回の調査は、南および西側に隣接する第70地点の基本層序や遺構面数をはじめとする調査結果を参考にした。

調査開始の直前まであった既存建物は、埋蔵文化財に影響を与えないように基礎部分を残して解体された(図版7)。そこで、発掘調査は、まず建物基礎部分の除去から始めた。それと並行して安全フェンスや防塵シートの設置を行った。また、調査地から西へ約130m離れた市有地(西芦屋町30番地)にコンテナハウスを設置した(図版7)。

調査区は、先述のとおり、第69地点と第70地点に挟まれた未調査範囲に設定することになった。しかし、調査地北側にはブロック塀が存在していたので、安全を確保するために、その根元から約2m控えを

とって、調査区の北辺を設定した。また、調査地東側は、宅地面に伴う石垣があったため、それが崩壊しないように石垣から約2m控えて調査区東辺を設定した。調査区の南側には、切り通して設けられた工事用の仮道路が走っており、調査区の南辺は切り通しの上端を残すように設定した。残る西側は、第70地点の発掘調査区が埋没していたので、今回の調査地点と第70地点の各遺構面の実測図とを合成できるように、第70地点の調査区壁が現れるところまで掘削することにした。

このようにして、調査区の形態は、おおよそ台形～矩形を呈し、その規模は東西約14m、南北約16mの範囲となり、面積は210㎡となった(第10図)。



第10図 調査地区区割図 1/200

調査深度は、月若遺跡第70地点の調査深度までとし、具体的には10層上面(第4遺構面)までとした(第11図)。なお、第4遺構面の記録後、さらに下層の状況を確認するために、深掘トレンチを2基設定し、現地表面から約2.9mの深さに相当する深度まで掘削した(第10・11図、図版26)。

調査区を掘削するにあたって、まず、調査地南東部に重機で確認トレンチを掘削し、機械掘削の層位を確認した。その結果を受けて、掘削の方法は、近現代の堆積土(1～2層)、近世の耕作土(3層)、中世の耕作土(4層)、中世の遺物包含層(居住域に伴う旧表土、5層)を重機(0.25m)で掘削し、6層からは人力で分層発掘しながら、遺構面の検出に努めた。

人力掘削によって生じた残土は、調査区西側に設けた残土の仮置き場までベルトコンベアーで運搬し、重機を常駐させ、随時4tダンプカーで場外に搬出した。

遺構面の検出にあたっては、月若遺跡第70地点で検出されている第1～5遺構面に対応できるようにすることを念頭において行った。しかし、遺構面を5面検出したものの、結果的には第70地点の遺構面と整合性をもって対応させることはできなかった。なお、遺構面の名称について、本書では、調査時の「第1遺構面」を「第1遺構面(S R 02・03埋没後)」に、調査時の「第2遺構面」を「第1遺構面(S R 02・03埋没前)」に、調査時の「第3遺構面」を「第2遺構面」に、調査時の「第4遺構面」を「第3遺構面」に、調査時の「第5遺構面」を「第4遺構面」に呼び変えている。

調査区の地区割について、発掘作業を委託した長谷川工務店が、その平面形に則して、4m間隔の方眼ができるように基準点を設置し、各基準点には平面直角座標系第V系(日本測地系)の座標値を投影させた。各基準点は、A1～A15と名付けた(第10図)。遺物取り上げの際には、A1杭を中心として調査区を4分割し、「北東区」「北西区」「南東区」「南西区」と名付けて出土位置を記録した。

写真撮影には、35mmフィルム(白黒ネガ・カラーポジ)とデジタルカメラ(300万画素)を用いた。実測図は、調査区配置図を縮尺1/50、第1～5遺構面平面図を縮尺1/20、調査区北壁・南壁および深掘トレンチ1北壁、深掘トレンチ2南壁の土層断面図を縮尺1/20、各遺構の平面図や土層断面図などを縮尺1/10ないしは1/20で作成した。その際、平面実測図の多くは、光波測距器を用いて測点し、作成した。

なお、施行者と打ち合わせた結果にしたがって、調査区は埋め戻さなかった。

(竹村)

第2節 基本土層

今回の調査では、調査区北壁・南壁・東壁・西壁で認められたおおよそ調査区全体の堆積状況を示す土層を基本土層として設定した(図版1・9・10)。ただし、調査区東壁は、ちょうど流路(S R 01・02等)の中に位置しており、その土層はそれら流路の埋土の縦断面をみている状況であった。一方、第4遺構面より深部の土層については、調査区内に設定した深掘トレンチ1・2の壁で観察した。そこで、本節では、第11図に調査区北壁および深掘トレンチ1北壁の土層断面を示し、基本土層を説明する。

なお、第11図に示した土層註記では、基本土層の番号を上層から下層に向かって順にアラビア数字を付した。一方、遺構埋土をはじめ、部分的に認められる土層については、円囲いのアラビア数字で層序に従って通し番号を付けた。土層番号に続けて、土色・性質・粒径・しまり・包含物・性格などを順に記した。色調は『新版標準土色帖2000年後期版』(農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修)を用い、客観化を図った。

基本土層は、1層から17層まで設定した。なお、1～5層および11～17層については、機械掘削で除去したため、性格などの詳細は不明である。

1層は、にぶい黄褐色粘質土で、現表土および近現代盛土である。近現代遺構の埋土も含んでいる。

2層は、暗灰黄色粘質土で、近世～近代の耕作土と考えられる。

3層は、にぶい黄色砂質土で、やや粘性がある。2層に伴う水田の床土、もしくは近世の耕作土と考えられる。

4層は、にぶい黄褐色砂質土である。植物の根に伴う鉄分が顕著に認められる。中世後半～近世の耕作土と考えられる。SR01は、当層を切っている。

5層は、にぶい黄褐色砂質土である。粒子は中粒砂～粗粒砂で、上層の耕作土と比べてやや粗い。上部が土壌化しており、東播系須恵器、瓦器、瓦質土器、白磁、青磁などの中世遺物を多く包含している。中世の居住域に伴う土壌層と考えられる。なお、SR02は当層上面から切り込んでいる。

6層は、暗褐色粘質土である。古墳時代後期～飛鳥時代の土器片を多く包含している。当層が第1遺構面を覆っている。古墳時代後期～古代の居住域に伴う土壌層と考えられる。SR03は当層上面から切り込んでいる。

7層は、黒褐色粘質土であるが、砂や細礫等が多い部分や土壌化の強弱が認められ、全体的にみると雰囲気は一樣ではない。おそらく、長い時間をかけて徐々に堆積していったものと推測される。これは、土石流による堆積(8層)の後、その上面に土壌が形成されていく過程を示している可能性が高い。弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器を含んでいるが、本調査地西方の既往調査地点と比べて土器の包含量は少ない。弥生時代後期～古墳時代前期の土壌層と考えられる。第1遺構面の基盤層である。また、小銅鐙が出土したSP33の基盤層でもある。なお、当層は土壌化が顕著で遺構埋土との区別が難しかったため、当層上面から約10cm掘り下げて、第2遺構面を検出した。しかし、調査区北壁で観察すると、古墳時代前期の溝であるSD07(第11図㊟層)が確実に当層上面から掘り込まれていることから、第2遺構面に伴う遺構のいくつかは、当層上面から掘り込まれているものと考えられる。

8層は、にぶい黄褐色砂質土である。当層は、第3遺構面を覆っている。中粒砂を主体とし、粗粒砂・小礫が極わずかに混じる。部分的に暗褐色ブロック土が混入するなど、極めて不均質である。7層の影響を受けて、上部は土壌化しており、7層との境界は不明瞭である。弥生時代後期以前の土石流堆積物と考えられる。

9層は、黒色粘質土である。土壌化しており、しまりは良い。当層上面が第3遺構面である。また、第4遺構面を覆っている。SR02断面1では、当層に対応すると考えられる黒褐色砂質土から縄文時代早期の山形押型文土器(第34図112)が1点出土したが、表面が摩滅しており、後世に混入した可能性が高い。他に遺物はまったく出土しておらず、当層の堆積時期は不明である。

10層は、灰黄褐色～にぶい黄褐色砂質土である。当層上面が第4遺構面である。しまりは悪い。土石流堆積物と考えられる。上部は9層の影響を受けて土壌化しているため、9層との境界は不明瞭である。植物の根の痕跡と考えられる不定形の黒褐色の部分が多く認められた(図版26)。当層からは、遺物がまったく出土しておらず、堆積時期は不明である。

11～17層は、深掘トレンチ1・2で確認した深部の堆積層である(図版10)。いずれの層も遺物の包含は確認されていない。土石流堆積物と考えられる砂礫層が認められる(17層)。また、土壌層もみられる(12層)。これらの土層の堆積時期は不明であるが、良くしまっており、非常に古いものである可能性

が高い。

(竹村)

第3節 遺構

発掘調査では、1～5層までを機械掘削し、6層から人力で掘削した。遺構面は、本調査地の南側と西側に接する月若遺跡第70地点の調査結果を参考にして、第1～4遺構面までを検出した。各遺構面の時期は、第1遺構面が古墳時代後期～中世、第2遺構面が弥生時代後期～古墳時代前期である。ただし、第2遺構面で検出された遺構の中には、本来第1遺構面に属するものが多く含まれていた。また、第3・4遺構面は、縄文時代か弥生時代の遺構面と考えられるが、時期は不明である。なお、機械掘削で検出および記録を省略した遺構面の時期と性格については、2層上面が近世～近代の耕作面、3層上面が近世の耕作面、4・5層上面が中世の耕作面と推定される。

ところで、機械掘削した土層の内、5層には中世の遺物が比較的多く包含されており、6層上面が中世の集落跡に伴う遺構面であった可能性が高いと判断される。7層上面にあたる第1遺構面では、古墳時代後期から中世の遺構が一挙に検出されたことから、遺構の帰属時期に混乱が生じ、遺構と整理の分布状況が的確に把握できなかった。そのため、6層上面を中世の遺構面として捉えて、遺構の検出と整理に努めておくべきだったと考える。

(竹村)

1. 第1遺構面

第1遺構面は、6層に覆われており、7層を基盤層とする遺構面である。遺構には、古墳時代後期から鎌倉時代に至る掘立柱建物、ピット、土坑、井戸、溝、土器群、流路などが検出されている。これらの中には、先述したとおり、本来、6層上面に伴う遺構も多く含まれていると考えられる。

発掘調査時には、当遺構面において、調査区東部で検出された流路であるSR02が埋没した後の遺構面を第1遺構面、埋没以前の遺構面を第2遺構面として捉えようと試みた。しかし、調査後に出土遺物を整理した結果、両遺構面に伴う遺構の先後関係は時期的に整合性をもって区分されておらず、第1・2遺構面を時期別に捉えられていないことがわかった。そこで、本書では、発掘調査時の第1・2遺構面を合わせて第1遺構面とし、調査時の第1遺構面を第1遺構面(SR02・03埋没後)、調査時の第2遺構面を第1遺構面(SR02・03埋没前)に区別した。

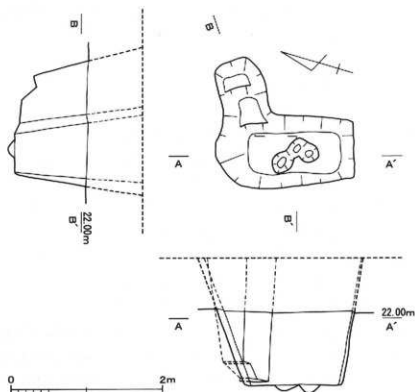
(竹村)

(1) 第1遺構面の検出状況と近現代の遺構

調査地には、発掘調査開始の直前まで木造家屋が建っていた(図版7)。この建物の建築年代は分らないが、この建物にお住まいであった今村一代氏のお話によれば、建物の屋根裏の部材に大正6年(1917)の墨書があったということであり、これが建築年代を示している可能性がある。

当建物の解体にあたって、その作業で埋蔵文化財が損壊を受けることを避けるために、建物の基礎は残して、発掘調査の中で除去することにした。そのため、調査開始時には、建物の基礎等が残っていた(図版7)。

発掘調査では、まず、建物基礎を慎重に除去した後、重機で確認トレンチを設定し、機械掘削の層位を6層上面までと判断した。そこで重機で6層上面まで掘削した。ただし、調査区西半部においては人



第12図 防空壕跡平面図・立面図・断面図 1/50

北西隅でみつかった(第13図、図版11)。現地表面からは、深さ約160cmを測る。3ヶ所に針金を巻きつけて結合した木材2本が底に設置され、その上に間知石2石が置かれていた。木材の大きさは、直径約17~21cm、長さ約153cmのものと、直径約16~18cm、長さ約164cmのものである。市内で確認されている類例としては、金津山古墳第9地点SK1が挙げられる〔森岡・木南1996〕。

防空壕跡は、発掘調査直前まであった木造家屋の南東部床下に作られたものと考えられる(第12・13図、図版11)。形態から防空壕跡と判断した。遺構は、隅円の長方形を呈する室部と、その北東部に接続する出入口部からなる。室部の規模は、その内法寸法を示すと考えられる底面で、長辺122cm、短辺56cmを測る。当時の地表面からの深さは、170cm程度であったと推定される。室部の床面には家屋の床束を据えた可能性が高いとみられるが、検出されている。出入口部は、その下部に基盤層を削り出して二段の段差が設けられているが、地上まで続く階段ではない。埋土の様子から、一挙に埋め戻されたと推測できる。

地下施設は、調査区南西部でみつかった(第13図、図版11)。現地表面からは、深さ約90cmを測る。平面形態は長方形を呈し、壁は鈹津煉瓦で築かれている。内壁および床面はモルタルで仕上げられており、北壁からは土管による排水管が東方に延びている。地下空間の内法寸法は、長辺約190cm、短辺約123~131cmを測る。埋土からは、戦後のガラス瓶やプラスチック製品などが出土していることから、戦後に埋められたことがわかる。

(竹村)

(2) 掘立柱建物およびピット

当遺構面では、ピットが85基検出された(S.P01~85)。出土遺物の製作時期や埋土の違いなどから、古墳時代後期から中世にわたる複数の時期のものが混在していることがわかる。これらピットの多くは、本米、掘立柱建物などの構築物を構成していたものと推測されるが、今回の調査ではピットの位置や埋

力掘削量を減らすために、7層上面まで機械掘削した。

機械掘削の後、人力で6層を除き去して検出した7層上面が第1遺構面である。当遺構面では、まず、近現代の遺構の埋土除去からはじめた。近現代の遺構は上半部が重機掘削で削平されており、目立つものとしては電信柱アンカー、防空壕跡、地下施設がある(第12図、図版11)。これらの埋没時期については、昭和30年代から当地にお住まいであった今村氏がその存在を知らなかったことから、それ以前であることは確実である。

電信柱アンカーは、調査区

土の様相から、掘立柱建物1棟を確認することができた(SB01)。なお、当遺構面では、小銅鐸を出土したピットであるSP33も検出されているが、これについては次項で別に記す。

①掘立柱建物

SB01は調査区北西部で検出されたもので、今回の調査区で検出された3基のピット(SP02・03・21)から構成される(第13・14図、図版14)。さらに、本地点の西側に隣接する月若遺跡第70地点で検出されているSB103の3基のピットが同じ建物を構成するものと考えられる(前田・石島・中村2004)。これら6基のピットからは、桁行2間(3.4m)、梁間1間(1.7m)の規模をもつ側柱建物に復元される(第13・14図、図版14)。建物主軸が真北から西へ22°振っている。SP02・03・21の埋土は、灰黄色系である。ピットの規模は、最も大きいSP03が径33cm、最も小さいSP02が径22cm、深さが最も深いSP02が32cm、最も浅いSP21が16cmを測る。中世の建物と考えられる。

②ピット

当遺構面で検出されたピットの平面形態は、その大半が円形を呈している。そのような中で、SP04・58などは隅隅の長方形を呈する。SP25・50などには、柱痕が認められる。

埋土には、黒褐色系、暗褐色系、灰黄色系、にぶい黄褐色系がある。出土土器から、黒褐色系が弥生時代～古墳時代前期、暗褐色系が古墳時代中期～古代、灰黄色系が中世、にぶい黄褐色系が近世である傾向が認められる。その中で、次項に記す小銅鐸を出土したSP33は、当遺構面で唯一黒褐色を呈しており、特異である。

(竹村)

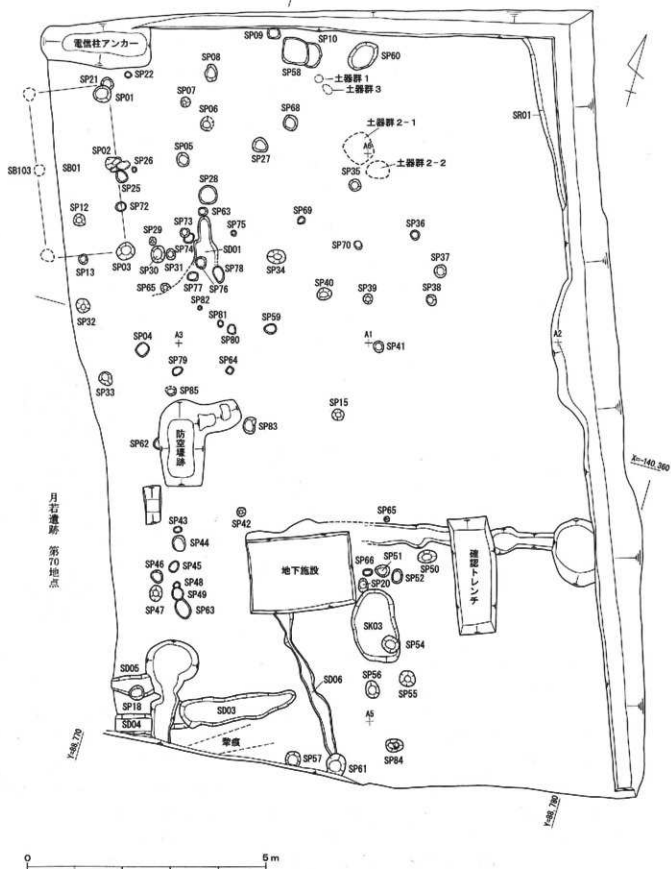
(3)小銅鐸を出土したピット(SP33)

①小銅鐸の出土状況

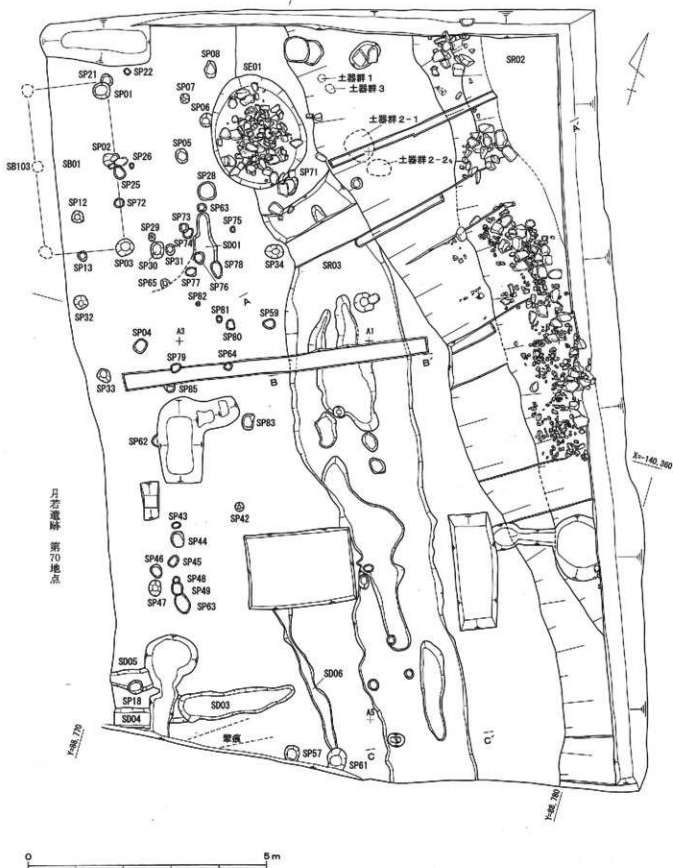
平成20年(2008)4月30日に発掘調査現場を撤収した後、本市三条町に所在する芦屋市教育委員会生涯学習課三条文化財整理事務所で遺物整理を開始し、洗浄作業を行っていたところ、5月14日に土師器や須恵器と一緒に小銅鐸が取り上げられていることが判明した。遺物取り上げカード(「TW96(山幹)⑤ 第1遺構面精査 080227」)から、それらが2008年2月27日の第1遺構面精査時に、調査区西部中央付近から出土していることがわかった。その後、第1遺構面の全景写真の細部を検討したところ、第1遺構面西部中央においてピットとして検出されたSP33内に小銅鐸片が写っていることを確認することができた(図版4)。

この写真から出土状況を検討すると、2月27日に第1遺構面(SR02埋没後)の全景写真の撮影のために、手ガリによって清掃していた際に、鐸身A面(図版5)を上側にした状態で埋没していた小銅鐸に対して手ガリが水平方向に引っ掛けられ、その衝撃で埋没状況における高位の部分が大きく破損して遊離し、取り上げられたと推測される。小銅鐸の破断面の形態と写真に写っている状況とを合わせて検討すると、小銅鐸の破断面がおおよそ埋没状態での水平位置を示しているものと推測される。つまり、水平方向では、鐸身A面が上側で、鈕側が少し高く、鐸身裾側が少し低い状態で埋没していたと考えられる。

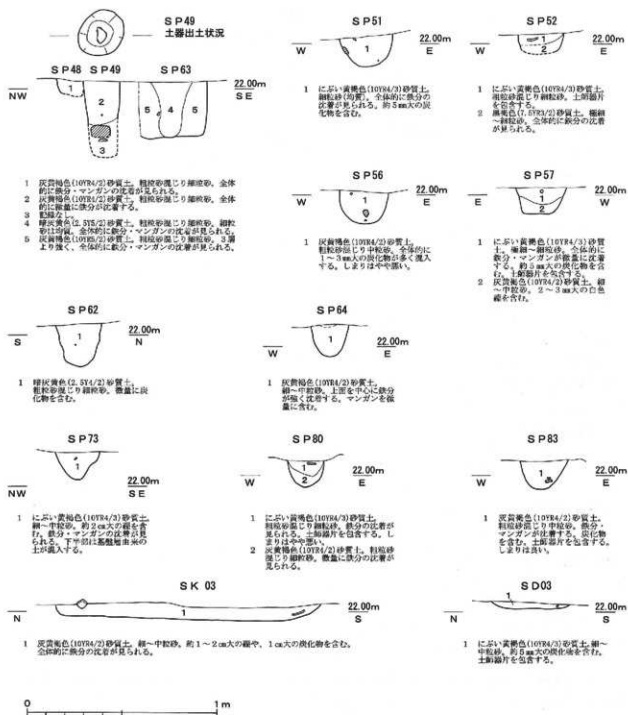
なお、破断面の形態等を観察すると、取り上げられた小銅鐸片と写真に撮影されている小銅鐸片は明らかに異なっている(図版4・5)。そこで、出土遺物をすべて調べ直したが、撮影されている小銅鐸片はみつからなかった。結果的に、発掘調査時に小銅鐸の半分が廃棄されてしまったと判断される。発掘調査において、大変貴重な小銅鐸の出土状況を確認できなかったばかりか、その破片を消滅させてしまい、調査担当者として取り返しがつかないことをしてしまったと反省している。



第13図 第1遺構面 (SR02・03埋没後) 平面図 1/80



第14圖 第1遺構面 (S R02・03埋没前) 平面圖 1/80

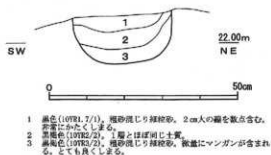


第16図 第1遺構面ピット・土坑・溝土層断面図 1/20

②SP33の形態・規模・埋土

当遺構の平面形態は、おおよそ円形を呈する。長軸約31cm、短軸約27cm、深さ約15cmを測る。埋土は3層に分層した(第17図)。先述したとおり、第1遺構面に伴う遺構の埋土は灰黄色系のものが多いのに対して、当遺構の埋土は黒褐色を呈し、大変目立っていた。また、埋土が非常に良くしまっていることも特色として挙げられる。これらの中で、小銅鐸は第17図の1層か、実測の時にはすでに削られていた1層よりも上層に包含されていたものと判断される。

なお、多くの青銅器出土地の立会経験を有する森岡は、当遺構の性格について、ピット等の掘形をも



第17図 SP33土層断面図 1/10

埋没時期とはまったく関係ない。また、SP33の出土遺物には、土師器の細片5点が確認されているが、いずれも時期を判断できるものではなかった。そのため、基本層序から小銅鐸の埋没時期を検討する。

SP33が検出された第1遺構面では、古墳時代後期から中世の遺構が検出されている。ただし、その基盤層である7層は、その上面から古墳時代前期(布留式新段階[森岡・西村2006])の溝であるSD07が掘り込まれていることが調査区北壁の土層断面で確認されていることから(第11図)、古墳時代前期の遺構が7層上面に存在していることは確実である。一方、7層を約10cm掘り下げて検出した第2遺構面において、古墳時代初頭(西摂4様式[森岡・竹村2006b])の土器群4・5が検出されている。ただし、この土器群も掘形が見つけれなかっただけで、本来は7層上面から掘り込まれている落ち込みなどに伴っていた可能性は十分ある。

一方、SP33付近は機械掘削の際に削りすぎた箇所であり、本来検出すべき基本土層6層上面を超えて一部7層まで削っている可能性がある。そのため、この付近は、第2遺構面に伴う遺構がすでに露出していたことが考えられる。

これらのことを考慮すると、7層を基盤層とする第1遺構面に伴う遺構の上限は、古墳時代初頭～前期まで遡らせることができる。なお、芦屋川扇状地上に立地する月若遺跡、寺田遺跡、芦屋廃寺遺跡などでは、黒褐色の埋土は古墳時代前期以前である傾向が認められている。

以上の結果、SP33は古墳時代初頭～前期の間に形成されたものである可能性が高い。全国の小銅鐸の埋没時期については、庄内式期が下限となるものが認められており、月若鐸の埋没時期とは矛盾しない。そこで、月若鐸は古墳時代初頭(西摂4様式[森岡・竹村2006b])から古墳時代前期(布留式新段階[森岡・西村2006])のピットから出土したものと捉えておきたい。(竹村・守田)

(4) 土 坑

第1遺構面では3基の土坑が見つかった。その内、SK03の土層断面を第16図に示した。SK03は不整な楕円形を呈するもので、長径158cm、短径93cmを測る。深さは18cmで、浅い。埋土からは「て」の字状口縁の土師器皿や緑釉陶器、須恵器壺(第30図33)が出土していることから、古代後半のものと考えられる。(竹村)

(5) 井 戸

SE01は、調査区の北部中央に位置しており、基本土層7層上面で検出した遺構であるが、出土遺物

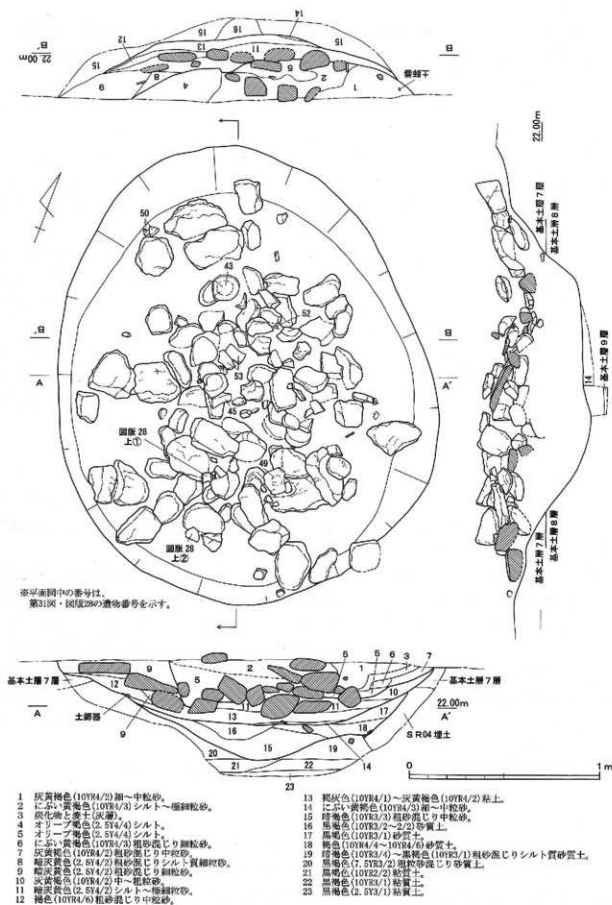
と埋土の様相から、本来は基本土層6層上面から掘られていたものといえる。また、S R04や基本土層8層を切り込み、底面は基本土層9層に達している。ただし、土層観察用土手における観察の結果、S E01の埋没過程において同じ場所に新たな遺構を再構築した様子が確認されたので、炭化物や焼土を濃厚に含む埋土をもつ上位遺構と、植物遺体を含む粘土や水成層を埋土とする下位遺構に分けて記述する(第18図、図版16・17)。

S E01の上位遺構は、長軸約195cm、短軸約150cmほどの範囲に炭化物や焼土が濃密に広がった状態で検出されたもので、平面形は不定形である。このため、炉状遺構や火葬窯の可能性を考えて掘削したところ、深さ20cmほどの碗状の遺構で、人頭大の花崗岩礫を多く含むことが判明した。遺構埋土は、焼土の小ブロックを含む灰黄褐色細～中粒砂(第18図1層)と黒色・暗灰色の炭化物と赤褐色焼土を大量に含むにぶい黄褐色シルト～極細粒砂(第18図2層)、1・2層の直下に黒～暗灰色の炭化物と赤橙～赤褐色の焼土で構成された灰層(第18図3層)が見られる。さらに、その下には、鉄分の含浸は顕著だが、焼土をほとんど含まない均質なオリーブ褐色シルト(第18図4・5層)がある。これらは、下位遺構内に堆積した砂層(第18図9・10層)を掘削して、人為的にシルト(4・5層)を貼って遺構のベースとしたものと解される。このシルト層の上に3層があることからS E01上位遺構が被熱したことは明らかであり、その性格は、竈の下部構造や炉状遺構と想定する。なお、当初予想した火葬墓については、骨片が確認されなかったことから、その可能性は低いと考える。2層は灰層に砂が流入したもの、1層は上位遺構の最終埋土もしくは上位遺構埋没後に掘削されたピット埋土と捉えてよいであろう。ところで、上位遺構の東寄りには下端に薄い焼土層の認められる灰黄褐色粗砂混じり中粒砂(第18図7層)がみられることから、構築前の空焚きを想定したり、4・5層以上が補修による貼土と捉えることもできよう。

この遺構からは、完形に近いものを含めて土師器皿・碗・甕、須恵器杯・碗・鉢、磁器碗が出土している。特に3層から出土したものは残存率の高いものが多いが、その出土状態は雑然としており、遺構内に埋納されたというよりも、花崗岩礫と共に遺構内に投入されたと見るべきである。

残存率の高い遺物を実測し、第31図に図示した。土師器皿(39～44)、土師器甕(図版28①・②)、東播系須恵器碗(48～52)と鉢(53)や中国白磁の細片(図版28③)のように平安時代後期の供具を主体とし、8世紀代に遡りうる土師器甕(45)、須恵器杯(46・47)が少量認められる。後者については、ベース層に由来するものと考え、S E01上位遺構が機能を果たした時期は、平安時代後期頃と言え。編年の進んでいる東播系須恵器を根拠としてより厳密に言うならば、3層出土の東播系須恵器碗の内、口縁部および底部の形態の最も新しい(50)と鉢(53)を根拠として、S E01上位遺構の廃絶時期を11世紀末葉～12世紀前半と見たい。なお、(48)は弱いながらも底部が突出する平底碗で、11世紀後半の資料であるが、S E01のベース層からの出土例は乏しい。このことから(48)が、S E01上位遺構の初現期の資料と言えるのかもしれない。ところで、平安時代後期以後に伴例の多い瓦器は、1・2層に細片が3点含まれているのみで、3層以下からは出土していない。

一方、S E01の下位遺構は、上位遺構より一回り大きく、長軸242cm、短軸200cm、深さ52cmを測り、平面形は楕円形、断面形は碗状である。埋土は上から暗灰黄色粗砂混じり細粒砂(第18図8・9層)や灰黄褐色中～粗粒砂(第18図10層)といった自然堆積層、植物性の有機物を含む滞水性の暗灰黄色シルト～極細粒砂(第18図11層)、水成層と考えられる褐色粗砂混じり中粒砂(第18図12層)、極めて粘性が強く均質である褐色～灰黄褐色粘土(第18図13層)、にぶい黄褐色細～中粒砂の流入土(第18図14層)と、水流によるレンズ状堆積層が観察でき、上位遺構と大きく異なる。砂を主体とする流入土の多い中で、11層



第18図 SE01 平面図・立面図・土層断面図 1/20

と13層は滲水性が高いといった特徴があり、SE01が水溜まりの状態で井戸として機能していた時に形成されたものと考えられる。ただし、SE01の下位遺構は湧水層に達していないので、掘り抜き井戸ではなく、溜井と考えられる。ちなみに、8・9層は、SE01の下位遺構が機能を停止した後に流入した、最終埋土と言えよう。なお、13・14層より下位には基本土層8・9層由来でSE01の影響を受けて攪拌されて汚れた砂(第18図15~18層)とSR04埋土、基本土層8・9層相当層(第18図19~23層)が見られる。

下位遺構から出土した遺物は、土師器碗・皿・甕、須恵器杯・壺・甕、黒色土器碗、土鍾であるが、上位遺構と違って残存率の低い細片が多く、図示できたのはわずかに2点である(第31図54・55)。さらに、図化できなかった細片もあわせて検討すると、8・9層からは土師器皿・甕や須恵器杯が、11・13層からは土師器甕が、15~18層からは土師器の甕、須恵器の壺・甕、黒色土器碗が出土している。これらは、いずれも細片であるため時期の特定は困難であるが、総じて上位遺構出土遺物よりも古い印象を受ける。また、上位遺構で検出された東播系須恵器、白磁等は確認できず、上位遺構で出土点数の多かった土師器皿についても10層以下では出土が認められない。このことから、ひとまずSE01下位遺構の上限年代は9世紀以降とし、その下限年代は平安時代後期頃と推定する。

なお、SE01検出時にその中央付近に当遺構より後出するビットSP27が、SE01完掘時に、その底面でSP125・126・127が確認されている。これらの一部については、第15・22図に土層断面図を挙げている。(白谷朋世)

(6) 溝

当遺構面では、5条の溝(SD01・03~06)が検出された(第13・14・16図、図版15)。

SD01は、調査区北西部で検出された溝で、北西から南東へのびている。溝の南西側は、幅を増していくが、次第に肩が消えている。検出長は約94cm、最大幅は約47cm程度である。非常に浅く、深さは約3cmしかない。

SD03~05は、南西部で検出された北東から南西へのびる溝である。いずれの埋土にもふい黄灰色細~粗粒砂で良く似ている。各溝の規模は、SD03で検出長約248cm、最大幅約60cm、深さ約3cm(第16図、図版15)、SD04で幅約41cm、深さ約4cm、SD05で最大幅約47cm、深さ約3cmを測る。なお、SD03からは土師器・須恵器とともに完形に近い瓦器碗(第30図34)が出土しているが、本来、重複するビット(SP116)に伴うものであると考えられる。SD06は調査区南部で検出された北西から南東へのびる溝である(第13・14図)。最大幅は約35cmであり、深さは約10cmを測る。埋土は中~粗粒砂である。出土遺物から、7世紀前半頃のものと考えられる。なお、当溝に連続するものが、南側に位置する月若遺跡第70地点第1遺構面で検出されている(前田・石島・中村2004)。

なお、調査区南西隅で、北東から南西へ走向する犁痕が検出された(第13・14図)。

(竹村)

(7) 土器群

後述するSR02の埋土C層中で検出された3つの土器片や瓦片が集中する箇所を、それぞれ土器群1~3と呼称した(第13・14図、図版18)。いずれも、調査区北東部に位置しており、SR02の北側西肩部にあたる。なお、土器群1~3の出土遺物には、完形のものは認められない(第32・33図、図版29)。

①土器群1

土器群1では、東西約30cm、南北約20cmの範囲から須恵器が23片、土師器が150片出土している。こ

れらは、土師器の高杯や甕、須恵器の杯・高杯など、8世紀第1四半期を中心とするものである(第32図56～61)。

②土器群2

土器群2は、遺物の出土状況から2つに分けることができ、北西側のものを土器群2-1、南東側のものを土器群2-2と呼称した(第13・14図、図版3・18)。

土器群2-1では、東西約60cm、南北約70cmの範囲から、須恵器が19片、土師器が108片出土している(第33図)。また、製塩土器が45片(第37図)、瓦が7片(第39図)出土している。一方、土器群2-2では、東西約50cm、南北約40cmの範囲から、205片の製塩土器片が出土している(第37図)。これらの製塩土器片は、その出土状況から一括性が高いものと考えられる。製塩土器以外にも、須恵器が3片、土師器が3片認められる。

土器群2-1・2-2から出土した遺物は、8世紀後半のものが主体となっている(第33図)。これらの中には、前記の多量の製塩土器片、須恵器四耳壺などの耳部、古代の平瓦片など、官衙的要素が強い遺物が多く認められることが特徴として挙げられる。

なお、土器群2-1・2-2を取り上げた後、ちょうどその位置付近のSR02の埋土C層を掘削する中で、土器が集中する箇所が見つかり、SX02と名付けた。しかし、明瞭な掘形が認められなかったことから、最終的には遺構として取り扱わなかった。この遺物が集中する箇所は、土器群2-1・2-2と位置が重なっており、両者は関連している可能性が高い。なお、この箇所から出土した遺物は、第35図125～131である。

③土器群3

当土器群は、土器群1の南東側に位置しており、東西約30cm南北約30cmの範囲から須恵器が6片、土師器が7片出土している(第13・14図)。これらの出土遺物は、土器群1と同様に8世紀第1四半期を中心とするものである(第32図62・63)。

以上、土器群1～3について記述してきたが、出土遺物の年代からは、土器群1・3が8世紀前葉、土器群2が8世紀後半のものと推測される。これらの中で、土器群2の出土遺物には官衙的な要素が強く見受けられる。

(竹村)

(8) 流 路

第1遺構面では、3条の流路(SR01～03)が検出された(第13・14図、図版2・3・12・13)。SR01からは土師質羽釜や備前焼鉢、染付磁器などが出土しており、中世～近世、SR02からは律令期の土師器・須恵器、回転台土師器、車播系須恵器、瓦器などが出土しており、古代～中世、SR03からは土師器、須恵器などが出土しており、飛鳥時代のものと考えられる。これらと基本土層の関係をみると、SR01は4層を、SR02は5層を、SR03は6層を切っている(第11図)。

ところで、今回の調査地の東側は、現状において芦屋川の旧河道に伴うものと推測される谷地形となっており、調査地東側の南北道路は、傍示川の名残である(第9図、図版7)。調査区東端に位置するSR01・02は西側の肩しか検出されていないが、これらが傍示川の旧流路になる可能性は高い。

その一方で、本地点東側に隣接する月若遺跡第69地点[前田・石島・中村2004]および第89地点[斎木編2008]では、SR01・02の東肩は確認されておらず、芦屋川の旧河道である谷地形に従って、そのまま東方へ傾斜していくことも十分考えられる。

①SR01

調査区の北東部で検出された北西から南東方向に流れる流路である(第13図、図版12)。基本土層4層を切っている。4層を機械掘削した際には、当流路の肩付近に1段以上の石列が確認された。

第1遺構面では、西側肩の一部が検出されているが、東側の肩をはじめ、その大半が調査区の範囲外となっている。なお、調査区東壁は、ちょうどSR01の縦断面が観察できるような位置となっている(図版9)。調査区北壁土層断面図(第11図)の①～⑤層が当流路の埋土である。これらにはラミナがみられる砂層が認められ、出土遺物の中には表面が摩耗した土器片が含まれていることから、水流があったものと推測される。層序や出土遺物から判断すると、当流路は、14～18世紀頃に流れていたと考えられる。

なお、本調査地東側に隣接する月若遺跡第69地点では、谷地形に伴う近世の石積み遺構が検出されており、SR01と同時期のものと考えられる。さらに、検出された位置や埋没時期などから、当流路は本調査地点の南方に位置する寺田遺跡第191地点SR1〔守田・竹村2009〕や第197地点で検出された近世の流路(SR1)と同一の流路であると推測される(第9図)。そして、既往調査の結果から、当流路が近世の居住域の東限を画していると推測することができる。

②SR02

SR02は、調査区東部で検出された北西から南東へ流下する流路で、西側の肩のみ検出された(第14・20図、図版3・13・19・20)。当流路の時期は、大きく古代と中世に分かれる。調査時に細別した埋土について、A・B・D～G層は土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・瓦・砥石を包含しており、古代末～中世のもの、C層は土師器・須恵器・瓦・砥石を包含しており、古代のものであることが分かった(第11・20図)。なお、C層は細分することができ、上層を黄C層、下層を黒C層と呼称した。ここでは当流路を時期で二分し、古代の段階をSR02-1、古代末～中世の段階をSR02-2と名付けて報告する。

SR02-1 古代末～中世の流路は、幅250cm以上、深さ100cm以上である。12世紀代に礫を用いた護岸遺構が築かれており、当遺構はSR02-2がある程度埋没した段階に作られたと考えられる(第14・20図、図版3・19)。流路の肩に沿って直径30cm程度の円礫を敷き詰めている。裏込めは認められない。当流路の北部では、底面に径約10cmのビットが7基検出されている(第19図、図版20)。これらは80～110cm程度の間隔で並んでおり、護岸遺構に伴う杭痕跡であると推測される。護岸遺構を構成する礫は花崗岩の円礫が主体を占めるが、チャートや砂岩などの岩石も認められる。さらに、当地域では産出しない結晶片岩の破片が1点含まれており、その長辺は約23cm、短辺は約11cmを測る(図版35)。

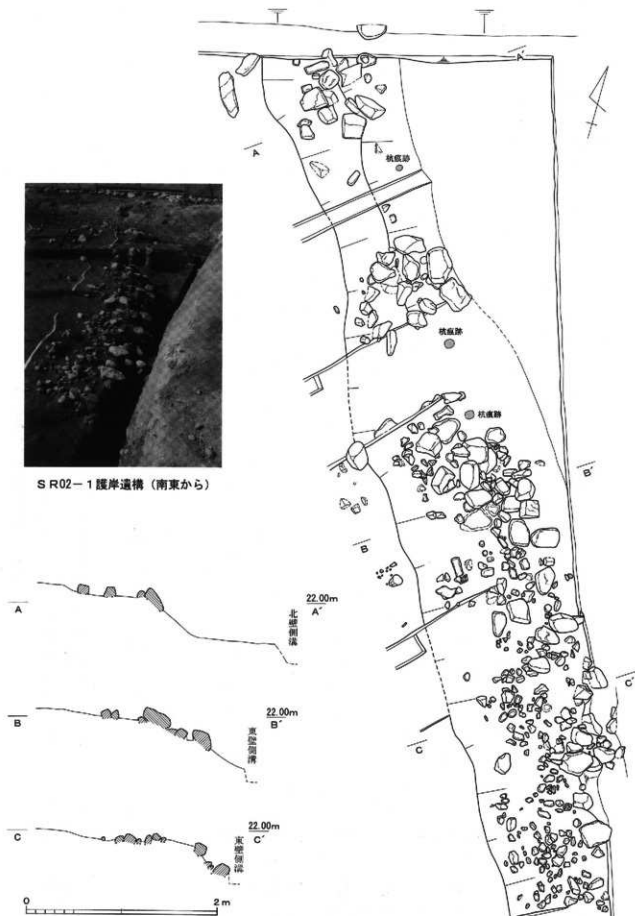
護岸遺構上には、埋土A・D層が堆積している。各埋土から出土した遺物を見ると、D層のものが12世紀後半～13世紀中葉、E層のものが12世紀前半～中葉、F層のものが11世紀後半を中心とする時期のものである(第34図)。これらの遺物の時期から、SR02-1は11世紀後半～13世紀中葉頃に流れていたと考えられる。

SR02-2 古代の流路は、出土遺物から7～9世紀頃のものと考えられる。埋土は土壌化した砂質土が主体で、流水はほとんどなかったと推測される。なお、断割1の北方の埋土中には径30～40cm程度の礫が多く含まれていた(図版20)。

前記の土器群2や、その下位の遺物が多数包含される箇所(調査時にはSX02と呼称)は埋土C層中に位置しており、両者は深く関係しているものと考えられる。そして、これらの遺構から出土した古代の瓦片や多量の製塩土器片などは、SR02-2の肩部に廃棄されたものと推測される。

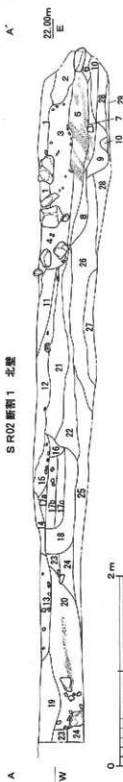


S R02-1 護岸遺構 (南東から)



第19図 S R02-1 護岸遺構平面図・断面図 1 / 40

SR02 斷割 1 北壁



- 1 灰黒褐色の(10分)の土質、粗砂を混じり細砂の、1—3mmの塊が散在する。塊に土粒状の構造が見られる。しほりは多い。SR02—1の底土質。
- 2 土質は灰色の(10分)の土質、粗砂質。5mmの塊が散在する。しほりは非常に少ない。SR02—1の底土質。塊に土粒状の構造が見られる。しほりは少ない。SR02—1の底土質。
- 3 土質は灰色の(10分)の土質、粗砂質。5mmの塊が散在する。しほりは非常に少ない。SR02—1の底土質。塊に土粒状の構造が見られる。しほりは少ない。SR02—1の底土質。
- 4 灰黒褐色の(10分)の土質、粗砂—中粒砂質。しほりはやや多い。塊は塊状の塊と云えるが、SR02—1の底土質。
- 5 灰黒褐色の(10分)の土質、粗砂—中粒砂質。しほりは少ない。塊は塊状の塊と云えるが、SR02—1の底土質。
- 6 灰黒褐色の(10分)の土質、粗砂—中粒砂質。しほりは少ない。塊は塊状の塊と云えるが、SR02—1の底土質。
- 7 灰黒褐色の(10分)の土質、粗砂—中粒砂質。しほりは少ない。塊は塊状の塊と云えるが、SR02—1の底土質。
- 8 灰黒褐色の(10分)の土質、粗砂—中粒砂質。しほりは少ない。塊は塊状の塊と云えるが、SR02—1の底土質。
- 9 灰黒褐色の(10分)の土質、粗砂—中粒砂質。しほりは少ない。塊は塊状の塊と云えるが、SR02—1の底土質。
- 10 灰黒褐色の(10分)の土質、粗砂—中粒砂質。しほりは少ない。塊は塊状の塊と云えるが、SR02—1の底土質。
- 11 灰黒褐色の(10分)の土質、粗砂—中粒砂質。しほりは少ない。塊は塊状の塊と云えるが、SR02—1の底土質。
- 12 灰黒褐色の(10分)の土質、粗砂—中粒砂質。しほりは少ない。塊は塊状の塊と云えるが、SR02—1の底土質。
- 13 灰黒褐色の(10分)の土質、粗砂—中粒砂質。しほりは少ない。塊は塊状の塊と云えるが、SR02—1の底土質。
- 14 灰黒褐色の(10分)の土質、粗砂—中粒砂質。しほりは少ない。塊は塊状の塊と云えるが、SR02—1の底土質。
- 15 灰黒褐色の(10分)の土質、粗砂—中粒砂質。しほりは少ない。塊は塊状の塊と云えるが、SR02—1の底土質。

SR03 斷割 1 北壁

[illegible]

SR03 斷割 2 北壁



断面位置は、第14図に示す。

第20图 SR02-03土層断面図 1/40

ところで、本地点東側に隣接する第69地点〔前田・石島・中村2004〕と第89地点〔斎木編2008〕では、形成時期が弥生時代後期後半まで遡る谷地形が検出されており、芦屋川がある東方へ向かって傾斜している。第89地点では、この谷地形を東側の河道に向かう崖状地形の肩部から落ち際と捉えており、古墳時代から中世においても地形的な変化はなかったと考えられている〔斎木編2008〕。これら両地点の調査結果からは、SR02-1・2が旧河道に伴う大きな谷地形の一部であると考えられることができる。

なお、第4遺構面の遺構として報告するが、SR02-2の底面において古墳時代後期の土坑(SK09)が検出されていることから、当流路の形成時期が古墳時代後期以前であると言うことができる。そして、この地形が弥生時代後期中頃以降から近代に至るまで、芦屋川扇状地上に展開する居住域の東限になっていたと考えられる。

③SR03

SR03は、調査地中央付近を南流する流路である(第14図、図版2・13・21)。幅は1.8～2.6m、深さは0.4m程度である。北部はSR02やSX03に切られている。埋土はラミナが認められる砂礫層が主体で、水流があったと推測される(第20図、図版21)。弥生土器・土師器・須恵器・埴輪・イイダコ壺・土鍾・石鏃が出土している。出土遺物から7世紀前半のものと考えられる。(竹村)

2. 第2遺構面

第2遺構面は、7層を約10cm掘り下げて検出した遺構面である。ただし、当遺構面で検出されたSD07は、調査区北壁の土層断面で確認すると7層上面から掘り込まれているが(第11図)、平面的にはそれらの埋土が7層と同様に土壌化し、両者ともに黒褐色を呈していることから、7層上面で検出することが非常に困難であった。そのため、7層を少し掘り下げることによって、はじめて遺構を検出することができたものである。当遺構面は、弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺構面であるが、第1遺構面で見逃していた古墳時代後期以降の遺構も多く含んでいる。遺構の種類は、ピット、土坑、溝、土器群、性格不明遺構、流路などである。(竹村)

(1)ピット

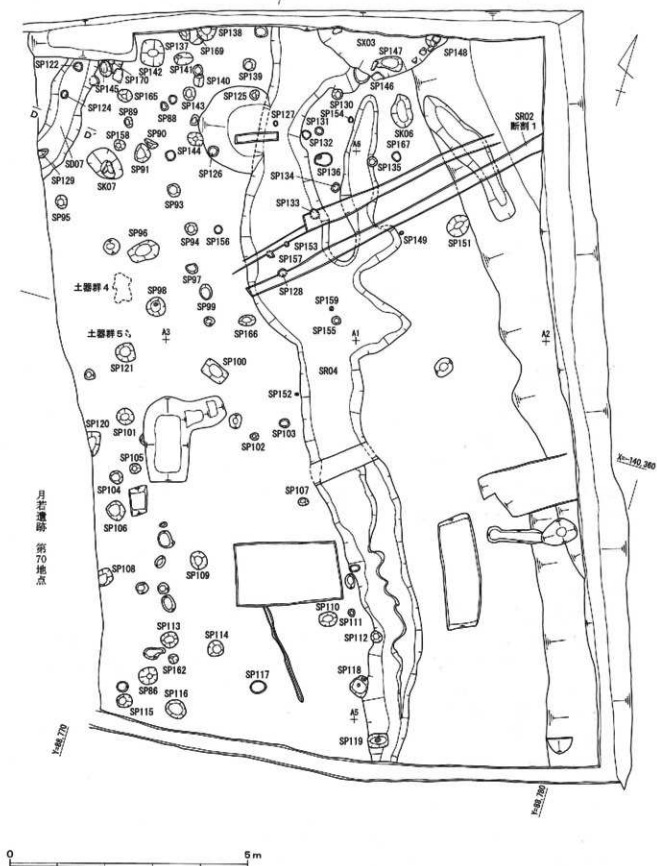
当遺構面では、ピットが84基検出された(SP86～170)。これらの時期は、弥生時代後期後半から中世のものまで含まれている。これらの内、古墳時代後期以降のものは、先述したとおり、第1遺構面に伴っていたものが見逃されてしまい、本遺構面で検出されたものである。それらの時期は、埋土の色調の差違等からおおよそ区別することができ、弥生時代後期後半～古墳時代前期のものは黒褐色系、古墳時代後期以降のものは暗灰色や黄褐色系の色調を呈する傾向が認められる。

これらのピットの多くは、本来、掘立柱建物等を構成していたものと考えられるが、復元することはできなかった。(竹村)

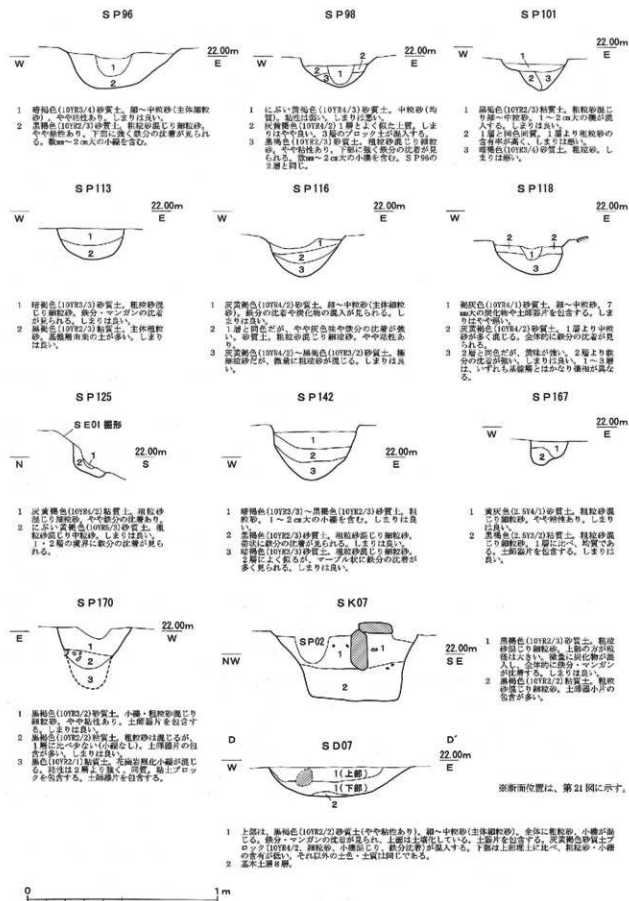
(2)土 坑

当遺構面では、土坑が2基検出された(SK06・07)。

調査区北西部に位置するSK07は、不整な円形を呈しており、長径80cm、短径57cm、深さ37cmを測る(第21・22図、図版23)。上部には径20cm前後の礫が数石認められた。埋土から出土した須恵器から、6世紀後半のものと考えられる。本来、第1遺構面に伴っていたものである。(竹村)



第21図 第2遺構面平面図 1/80



第22図 第2通横断面ビット・土坑・溝土層断面図 1/20

(3) 溝

調査区北西部で1条の溝が検出され、S D07と呼称した(第21・22図、図版23)。調査では7層を約10cm掘り下げた面で検出しているが、調査区北壁の土層を観察した結果、本来、7層上面から掘り込まれていることが明らかである(第11図⑨層)。規模は幅0.6~0.7m程度、深さ0.15mを測る。埋土は2層に分けることができたが、いずれも黒褐色の粘質土である(第22図)。埋土の下部に土器と礫が包含されていた。出土遺物から、古墳時代前期(布留式新段階[森岡・西村2006])のものと考えられる。

なお、当溝は、月若遺跡第70地点の古墳時代前期の溝(S D201)と連続する同一の遺構である[前田・石島・中村2004]。(竹村)

(4) 土器群

調査区北西部で、2ヶ所の土器片の集中箇所が検出された。北側のものを土器群4、南側のものを土器群5と呼称した(第21図)。これらの土器群については、7層上面ですでに土器片が見え始めており、何らかの遺構があることが認識できていた。しかし、7層の土壌化が著しく、遺構の掘形を検出することはできなかった。これらのことと、前記のS D07が7層上面から掘り込まれていることから考えると、土器群4・5は7層上面から掘り込まれた落ち込みなどの遺構に伴っていた可能性が高い。

土器群4は、東西約30cm、南北約65cmの範囲に、約300点の土器片が集中していたものである。これらは、西撰4様式に比定され[森岡・竹村2006b]、古墳時代初頭のものである。

土器群5は、東西約10cm、南北約15cmの範囲に、約30点の土器片が集中していたものである。これらの土器片には時期を特定できるものが認められなかったが、土器群4の土器片と雰囲気がよく似ていることから、同時期のものであると考えられる。(竹村)

(5) 性格不明遺構(S X03)

S X03は調査区北東部の北壁沿いに確認された遺構で、第2遺構面で検出したものではあるが、本来は第1遺構面に帰属する遺構である(第23図、図版24)。S X03の東には、S R02が深く切り込んでおり、その西肩部がS X03上に及んでいることから、S X03の本来の遺構上端はS R02(第23図1層)によって削平されている。このため、S X03の検出レベルは、S R02の影響を受けないS X03西部が、S X03東部よりも25cm以上高い。平面的にはS X03検出時のベースは、西部がS R04埋土(第23図7層)、中央部から東部が基本土層9層(第23図8層)であり、S X03がS R04の東肩を切る形となっている。

S X03は調査区北側にのびるため、その全容は不明であるが、調査区では、東西263cm、南北112cmの範囲で検出しており、平面形は半円に近い不定形である。遺構南西部は30cmほどの深さで底面が平らな皿状の遺構であるが、北東側はさらに一段下がり、深さは50cmを超える。この部分は椀状で、底面にはピット状のくぼみがいくつも見られる。このため、S X03は椀状の土坑やピットの集合体である可能性が考えられる。S X03からは拳大から人頭大程度の花崗岩礫(亜円礫や亜角礫が多い)が多数出土しており、これらの礫が個々の土坑やピットに関連して配置されていた可能性もある。また、これらの石のなかに、西摂地域では産出しない結晶片岩や砂岩製の砥石(図版35-②)が含まれていた。なお、S X03の掘形は、南西部が基本土層9層に収まっているのに対して、北東部は基本土層10層に達している。

S X03の埋土は、上位に、にぶい黄褐色砂質土(第23図2層)と灰黄褐色粗粒砂混じり細粒砂(第23図3層)がみられる。2層からは、土師器の杯・甕、須恵器の杯・壺、土師質焼成の瓦、製塩土器が出土している。

3層からは、土師器の杯・壺、須恵器の杯・碗が出土している。2・3層は下位の埋土と土質や色調がかなり異なることから、単純にSX03の上位埋土と捉えるほかに、SX03の埋没後にその上位に構築された別遺構の可能性もある。この場合、2層はSP148の埋土と見ることができる。2層出土の遺物を見ると、古墳時代の須恵器片が多いが、瓦片の存在から遺構の年代が奈良時代以降に下がることは明らかである。もっとも、下位埋土からはより新しい時期の遺物が出土しているので、SX03の上位埋土は、本調査地点より北方に位置していた古墳時代以来の包含層が崩壊し、流入堆積したものと考えられる。ちなみに、このような遺物包含層の再堆積はSE01でも認められる現象であり、古代末～中世初頭に六甲南麓において土石流が起きた可能性を示唆すると言えよう。

- 38 -

ようになったと考えられる。6層からは、土師器杯・甕、須恵器杯・碗・甕が出土しており、最も年代の下る平底の須恵器の碗ないし壺(206)はおおむね9世紀前半のものである。よって、4層と6層の遺物に年代の開きは認められないので、4層と6層を一連のものと捉えておく。

SX03の性格については、SR02との位置関係から古代の河岸に位置すると想定した場合には、河岸の護岸や流路固定用の杭に関わる遺構と解釈することができよう。その一方で、6層がポットホールに堆積した水成層にも見えることから、SR02肩部の洪水堆積と見ることもできよう。なお、SX03の埋没年代は、下位埋土から出土した遺物をもって9世紀前半以後と見ることができる。(白谷)

(6) 流路

当遺構面では、第1遺構面のSR03とおおよそ同じ位置に重複するように流路が1条検出され、SR04と名付けた(第11・20・21図、図版22)。当流路は南流している。規模は、幅1.5m前後、深さ約0.3mを測る。埋土は、ラミナがみられる砂礫層である(第11図③層)。埋土からは遺物がまったく出土しなかった。そのため、詳細な時期はわからない。(竹村)

3. 第3遺構面

第3遺構面は、土石流堆積物と考えられる8層に覆われ、土壤層である9層を基盤層とする遺構面である(第24図、図版25)。9層は、調査区の北半部では粘質土でしまりが良いが、南半部では砂粒が多く含まれており、しまりはやや悪い。

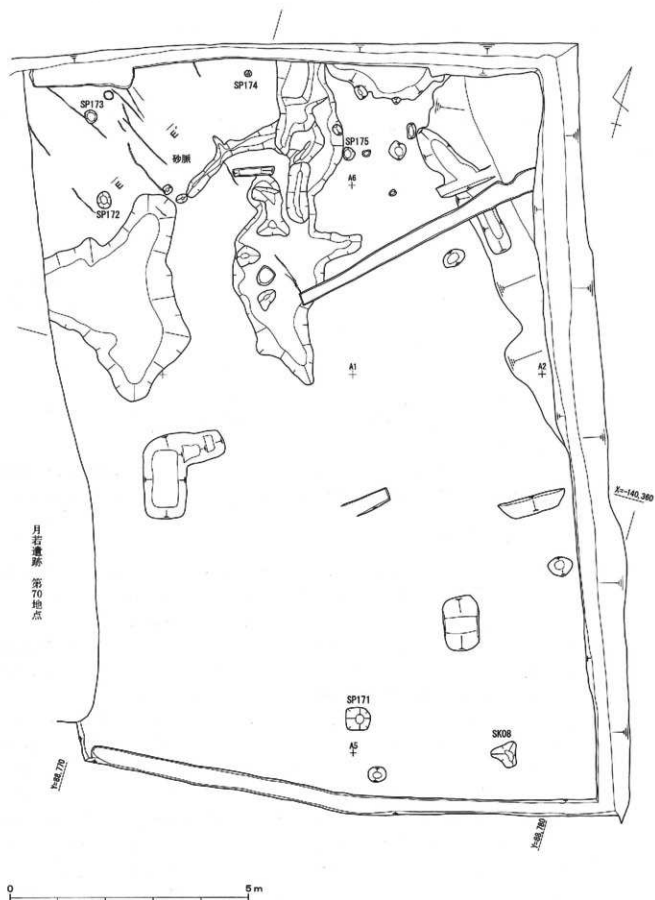
当遺構面は北東から南西へ緩やかに傾斜する自然地形となっているが、これは、芦屋川に向かって南東方向へ傾斜する弥生時代以降の地形と大きく異なっている。調査区の北半部では、8層を堆積させた土石流によって形成されたと推測される9層を挟る落ち込みが認められる。

当遺構面では、ピット、土坑、地震の液状化現象に伴う砂脈が検出された(第24・25図、図版25)。しかし、人工的な遺構の数は極めて少ない。さらに、当遺構面を覆う8層からは遺物がまったく出土しておらず、当調査地点付近では弥生時代後期以前には、ほとんど人間活動の痕跡が認められない。

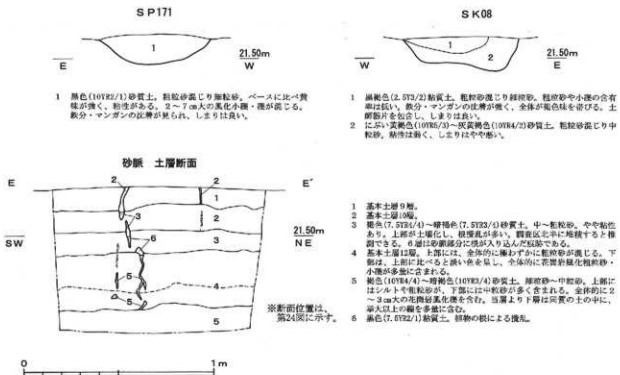
ところで、基本土層8・9層は、本地点から南西に約90m離れている寺田遺跡第128地点の11・12層に対応すると考えられる[辻2003b]。そして、第128地点では、11層から弥生時代中期の土器片が出土している。12層については、周辺の調査結果とC14年代値(4000±130BP)[辻・矢作・辻本・田中・パリノ2003]から縄文時代後期～晩期の後背湿地堆積物と考えられている。今回の調査では遺物が出土しなかったため、当遺構面の時期は不明であるが、第128地点の報告に従えば、縄文時代晩期～弥生時代中期の遺構面と考えることができる。(竹村)

(1) ピット

当遺構面では、ピット5基(SP171～175)が検出された(第24・25図、図版25)。これらのピットの規模をみると、径が最も大きいSP171で径約51cm、最も小さいSP174で径約15cm、最も深いSP171で深さ約29cm、最も浅いSP172で深さ約5cmを測る。埋土は黒褐色系を呈する。なお、これらのピットからは遺物がまったく出土しなかった。(竹村)



第24図 第3遺構面平面図 1/80



第25図 第3遺構面ピット・土坑・砂脈土層断面図 1/20

(2) 土坑

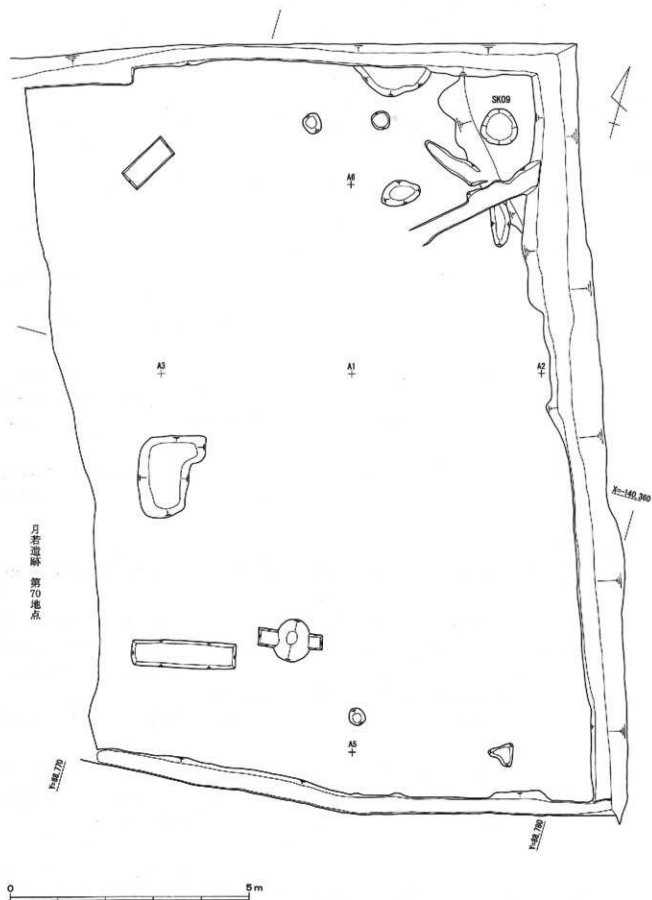
調査区南東部で、土坑1基(SK08)が検出された(第24・25図)。当土坑は不整な平面形を呈し、長径約56cm、短径約49cm、深さ約21cmを測る。土器片を出土しているが、細片のため時期不明である。(竹村)

(3) 砂脈

当遺構面では、北西-南東方向に走る筋状の砂脈が14条確認された。砂脈の長さは、30~170cm程度である。砂脈は、おおよそ同じ方向に走っており、検出面で認められた砂粒を観察すると、ほぼ同様のものではあった。これらのことから、いずれも地震によって同時に生じたと推測される。

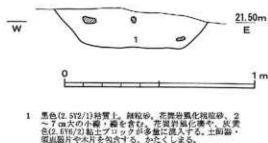
これらの内、比較的明瞭な部分を対象に斯ち割り、土層断面を観察した(第25図、図版25)。その結果、砂脈には5層から噴き上がったものと、3層から噴き上がったもの、2層から噴き上がったものが確認された。なお、噴き上がった砂粒の大きさは、極細粒砂~細粒砂である。

当砂脈を生じさせた地震の発生時期について、これらが基本土層9層上面で検出されたことを考えれば、弥生時代後期以前ということになる。しかし、本調査地点から北北西に約30m離れた月若遺跡第102地点の確認調査でみつかった砂脈からは別の時期を考えることもできそうである。この第102地点の確認調査は平成20年(2008)12月に実施したが、面積約2.4㎡の第2トレンチにおいて砂脈の断面が観察された。この砂脈は中世の遺物包含層を貫いていることから、中世以降に起きた地震に伴うものであることは明らかである。この砂脈の時期を考慮すると、今回の調査地点の砂脈は噴出面を確認しておらず、中世以降に発生した地震に伴う当時の地表面まで噴出していない砂脈である可能性が考えられる。芦屋川扇状地上で見つかっている地震痕跡としては、芦屋寺遺跡第62地点で見つかっている砂脈や地割れ痕跡(寒川・森岡・竹村2001、森岡・竹村2006a)、寺田遺跡第40地点の砂脈[森岡・竹村2005a]、寺田遺跡第119地点の地滑り痕[山田編2001]、寺田遺跡第144地点の砂脈[竹村・山内2009]が挙げられる。寒川



第26図 第4遺構面平面図 1/80

旭氏のご教示によれば、これらはいずれも慶長元年(1596)に起こった慶長伏見地震に伴うものである。これらの事例から、今回の調査で見つかった砂脈も慶長伏見地震に伴うものである可能性が高い。なお、小阪家住宅(芦屋廃寺遺跡第45地点)では、宝永4年(1707)に発生した宝永南海大地震に伴う砂脈が検出されている(森岡・木南2005b)。(竹村)



第27図 SK09土層断面図 1/20

4. 第4遺構面

第4遺構面は、9層に覆われ、10層を基盤層とする遺構面である(第26図、図版26)。

当遺構面では、SR02-2の底面で土坑1基(SK09)が検出された。ただし、この土坑は古墳時代後期のものであることから、本来は第1遺構面に伴うものである。

その他に、樹木の根の痕跡などと考えられる不整な楕円形で黒褐色を呈する部分が多く認められた。

当遺構面の時期については、遺物が伴わなかったため、不明である。しかし、第3遺構面と同様に寺田遺跡第128地点の土層と対応させると、今回の調査地点の基本土層10層は寺田遺跡第128地点の12層下部に対応すると考えられる(辻2003b)。第128地点の12層は、縄文時代後期から晩期の後背湿地堆積物であるということである。この見解を参照すると、本調査地点の第4遺構面の時期は、縄文時代後期から晩期であるということができる。

なお、当遺構面は、隣接する月若遺跡第70地点の第5遺構面と対応している(前田・石島・中村2004)。(竹村)

(1) 土 坑

調査区の北東隅において、土坑1基(SK09)が検出された(第26・27図、図版27)。検出位置は調査区北東部で、ちょうどSR02-2の底部にあたる。

平面形はおおよそ円形を呈し、規模は長径82cm、短径76cmを測る。検出面からの深度は、21cmである(第27図)。埋土は黒褐色を呈する粘性の強い土質で、中には拳大以上の粘土ブロック土が含まれている。また、同様の大きさの布引花崗閃緑岩と考えられる礫も含まれており、他の遺構と様相を異にしている。

埋土からは土師器・須恵器が出土している(第45図)。それらの他には、遺存状態の良い木片が出土している。出土した須恵器は、田辺編年TK43型式に比定され(田辺1966・1981)、古墳時代後期(6世紀後半)の遺構であると考えられる。

先述したとおり、当土坑は古墳時代後期のものであることから、第4遺構面に伴うものではなく、第1遺構面に伴うものと判断される。古墳時代後期の土坑が、SR02-1の底面に存在していたことから、当流路が古墳時代後期以前からこの位置を流下していたということができる。(竹村)

(2) 植物痕跡

当遺構面では、前記のとおり、黒褐色の部分が斑状にみられた(図版26)。それらを断ち割り、土層を観察したところ、明瞭な堀形は認められず、遺物もまったく出土しなかった。これらのことから、当遺構は、人為的なものではないと判断され、樹木の根の痕跡などであると考えられる。(竹村)

第4節 遺物

縄文時代から近世にかけて、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・埴輪・製塩土器・イイダコ壺・土鍾・瓦・石鏝・石製品・鉄製品・小銅鐸・銭貨が出土している。土層や遺構ごとに取り上げた遺物は208コンテナで60箱、ビニール袋で600袋を数える。古墳時代後期、古代前半、中世前半の遺物とその主体を占めている。以下に、遺物包含層出土の遺物と、各遺構面の遺構出土遺物とに分けて記述する(第28～45図、図版5・6・29～38)。ただし、製塩土器・瓦・石製品については、まとめて記述している。(守田)

1. 遺物包含層出土の遺物

(1) 近世の銭貨(第28図1、図版27)

1は寛永通寶で、近代の電信柱アンカーの埋土に混入していたものである。銅製で、背文はない。「寶」字の「貝」の下部が「ス」字状となる「ス貝宝」であることから古寛永と言える。下端をわずかに欠く。直径2.3cm、厚さ0.1cm、重量2.1gを測る。(守田)

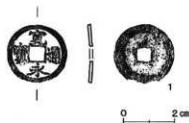
(2) 4層出土の遺物(第29図2、図版27)

4層は重機で除去したため、取り上げた遺物は少ない。2は東播系須恵器の碗である。見込み部にくぼみを残し、底部外面下に段をもつ。平高台で糸切り痕を明瞭に残す。森田稔氏による編年では第I期第2段階で、11世紀末から12世紀前半である[森田1986・1995]。(守田)

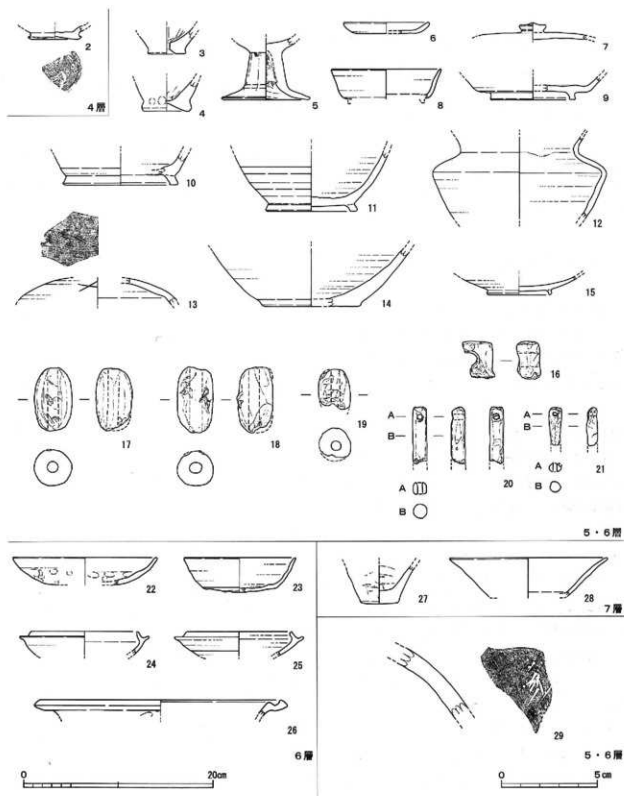
(3) 5・6層出土の遺物(第29図3～26・29、図版27)

5層は重機掘削の対象となったが、弥生時代～中世の遺物が多く出土した。その内容は、弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・瓦質土器・磁器・埴輪・瓦・土製品など多岐にわたる。一方、6層出土遺物は、第1遺構面の遺構に伴う中世遺物が少量混入しているものの、古墳時代後期～古代の土師器・須恵器が主体であった。第29図に図化した遺物のうち、3～21・29については、5・6層を一括で取り上げたもので、3～5が弥生時代後期後半～庄内期併行の土器、6が土師器、7～14・29が須恵器、15が灰釉陶器、16がイイダコ壺、17～21が土鍾である。また、22～26は、第1遺構面検出のための6層上面精査時に出土したもので、22が土師器、23～25が須恵器、26が瓦質土器である。

3・4は弥生時代後期後半から庄内式併行期のもので、有孔鉢と甕の底部である。5は高杯である。摩滅が激しいが、外面はハケ調整後、ヘラミガキを施している。胎土は密で焼成は良好である。庄内期のものとみられる。6は手づくね成形の土師器皿である。にぶい黄褐色で焼成は良好である。7は須恵器の杯蓋である。やや扁平な擬宝珠様のつまみをもち、その径は2.9cmである。回転ヘラケズリ後、回転ナデで調整する。8・9は杯身である。8は高台部が欠損した杯Bである可能性が高い。9はやや内側に高台



第28図 寛永通寶 2/3



第29図 遺物包含層出土遺物 1/4、29のみ1/2

を貼り付け、古い様相が認められる。10～13は壺である。10・11は長頸壺などの底部で、外方に踏ん張る高台を有する。体部外面は回転ヘラケズリを施し、上位のみ回転ナデで仕上げる。内底面には粘土塊を残し、器肌が荒れている。12は短頸壺の頸部から体部にかけてのものである。外面にはオリーブ灰色

の自然軸が多くかかる。13は破片の形状から壺の肩部と想定され、肩部内面の屈曲をもとに図上復元をしている。体部外面は回転ヘラケズリ後に回転ナデが施され、「X」印のヘラ記号が認められる。14は東播磨系須恵器の捏鉢である。体部下位は丸みをもって立ち上がり、見込み部にくぼみをもたない。第Ⅱ期のうちでも早い段階に位置付けられ、12世紀中葉から後半にかけてのものであると言える。29は須恵器壺の体部であろう。外面には、判読できないものの、刻字もしくはヘラ記号、またはヘラ先擦過痕が認められた。

15は灰釉陶器の皿である。山下峰司氏によると、定型化したいわゆる三日月高台をもつ黒笹90(K90)窯式期第2段階のもので、9世紀後半に比定される(山下1995)。残存する体部内面には施軸が認められるが、内底面には重ね焼きの痕跡が認められ、高台接地部には釉薬は施されていない。なお、SR02や月若遺跡第81地点においても、9世紀後半から末の灰釉陶器が出土している(安田編2006)。

16は土師質の釣鐘形イイダコ壺の釣手部分である。扁平で頂部が角張り、体部と釣手部の間にくびれが存在する形態である。釣手と体部を貼り付けた接合部で割れている。釣手部円孔は直径1.4cm程度である。17～19は卵形をした中型の管状土鍾である。17・18はほぼ完存し、いずれも孔径は1cm程度である。それぞれ90g、89.5gを測る。18は径1.7cm程度の礫を含む。20・21は棒状有孔土鍾である。20は孔径が0.6cm程度である。21は頂部が扁平につくられ、孔径は0.3cm程度である。

22は土師器の杯Aで、おおむね8世紀後半から末の所産であろう[古代の土器研究会1992]。23～25は須恵器の杯身である。26は瓦質土器の塼である。15世紀中頃のものであり(小森2005)、本来、遺構に伴う遺物を取り上げたものと考えられる。(守田)

(4) 7層出土の遺物(第29図27・28、図版27)

7層からは弥生土器と古式土師器が出土している。27は弥生土器の甕の底部で、平底で外面にはタタキを施す。28は土師器の高杯である。直線的に外方に伸びる杯部や、ヨコミガキが施されていないことから、布留3式段階のものである(西村・池峯2006)。(守田)

2. 第1遺構面に伴う遺構の出土遺物

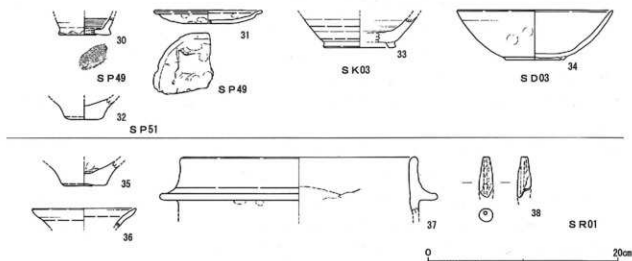
ここでは第1遺構面に伴う遺構から出土した遺物について記す(第30図、図版27)。第30図30～32がピット、33が土坑、34が溝、35～38が流路からの出土である。(守田)

(1) ピット出土の遺物(第30図30～32、図版27)

第1遺構面のピットは基盤層の年代と埋土の様相などから、古墳時代中期～近世のものであると考えられるが、遺構の時期を特定できる遺物は少なかった。その中で、第30図では3点図化している。

30はSP49出土の須恵器である。糸切り平高台をもつ、いわゆる壺Gの底部と見られる。同じピットの埋土中位からは土師器皿(31)が出土している。巻き込みが退化した段階の「て」の字状口縁で、約2mmの薄い器壁をもつ。外底面には接合痕が明瞭に認められ、円盤を切り込んで成形する技法をとる。口径は11.0cmと規格化された小型品で、法量や口縁部形態から11世紀半ばから後半に比定される(橋本1992、百瀬・近江1995、伊野1995)。32はSP51出土の弥生土器の甕である。この他に須恵器壺の頸部や土師器皿も出土しており、中世のピットと捉えられる。

他に図化していないが、SB01を構成するSP03からは中世とみられる土師器片が、SP80からは瀬



第30図 第1遺構面遺構出土遺物 1/4

戸・美濃焼の小片や中世の土師器皿が出土している。

(守田)

(2) 小銅鐸(図版5・37・38)

今回、洗浄中に確認された小銅鐸片は、鐸身を中心とする大破片1点、稜を有する伴出の小片1点、微細片数点である。現在、保存処理と科学分析を実施しているため、クリーニング前の土が付着した状態での第一次所見を中心に記す。大破片のうち、主要残存面をA面、その裏をB面と便宜的に呼称する。

小銅鐸の大破片は、A面の約3/4と舞部および鈕脚部の一部が残存している。B面はほとんどが失われ、裾部はまったく残っていないが、鐸身の残存率は90%程度と判断される。A・B面が接地する鐸身側縁の稜部分は、片側のみ2/3程度、鈕は舞に接続する下半部のみ残存している。破断面の大半は新鮮な青銅腐蝕層が見えており、出土時に大きく破損したことがわかる。なお、鐸身に存在する貫通孔は、型持孔とその周囲に生じた湯回りの悪さを素因とする鑄造欠陥と推定される。残存高は約6.6cmで、残存最大幅は約2.7cmを測る。重量は、土が付着した現状で約29.6gである。現状における肉眼観察では、文様は認められない。また、赤色顔料などの付着も視認できない。

色調は、外面が淡黄緑色に薄い橙色がのる部分と暗褐色の部分とに大きく分かれる。なお、A面において、型持孔付近に、縦方向に直線的な色調の違いが確認されている(図版5-②)。これは保存状況下における接触埋土の違いを示す痕跡の可能性が指摘されている。内面は全体に土が付着しており、不明な点が多いが、淡黄緑色を呈する。鈕は、淡黄緑色に薄い橙色がのる。破断面は、新鮮な部位が明青緑色、旧状を保つと判断される部分が淡黄褐色を呈する。前者は、一部が暗赤褐色を呈し、メタルそのものに近い色調が看取される(図版5-③)。

次に細部について記すと、まず鈕については下半部が残存している。2ヶ所の破断面は、A面に向かって左側が新しいものであるが、右側は古色を保っている。舞との接合部となる鈕基部の幅は約1.8cm、内孔が約0.7cmを測り、残存高はA面の右側では約0.6cmである。破断面から断面形を観察すると、舞部において鐸身後縁から約0.4cm内側に横断形が楕円形の鈕基部が取り付けられており、その厚さは長軸約0.5cm、短軸約0.3cmを測る。鈕の外側には、幅約0.4cm、厚さ約0.3cmの鑄型合わせ目の鑄張り状の部分もしくは鈕外縁部ともみられる残存部が認められる。舞面は略長円形を呈し、長軸で約2.3cm、短軸で

約1.8cmを測る。鈕基部は断面が菱形を呈する。

鐔身については、側縁の上端部は少し丸みを帯び、鐔身中位の型持孔付近から裾に向かってわずかに外反している。横断面形は、鐔身のいずれの部位においても両側縁に稜をもつ杏仁形を呈する。接触による稜の摩滅が看取されるものの、鐔や甲張りはまったく認められない。この稜線は直線的ではあるがやや左右に振れがあり、A・B面相互からの研磨の度合いに応じ生じたものと考えられる。稜線の残存長はA面左側で約4.9cmを測る。裾は残存していないが、横断面形は残存部最下端では長軸で約2.9cm、短軸で約1.8cmを測る。これらの数値から舞の筒形度は78%、身裾に近い下部残存部の筒形度は62%程度となる。上半部と下半部の横断面形は相似せず、下半部がやや扁平化することがわかる。A面上部には、左上がりの斜め方向に入る擦痕状痕跡、中央部やや上方に2条の浅い沈線状の刻線痕跡が観察される(図版5-④)。これらはキサゲなどによる鋳造後の仕上げ研磨痕か、廃棄以降に付いたものか、現時点では特定できない。

型持孔については、A面中央に向かって左側寄りに一孔のみ認められる。この型持孔と対応するようには、A面右側の型持孔がもう一孔存在したと考えられる。型持孔は略隅円方形～長方形の形態を呈し、孔の右辺に型持孔の壁の一部が認められる。型持孔と連続する鋳造欠陥は、型持孔の周囲において不定形にしばしば存在し、歪な部分は型持陰となり湯回りが悪いため、生じたとみられる。また、この型持孔に接続した上位に、到達の長さ0.7cm、最大幅0.4cmを計測する、不整形な孔が存在する。さらに、孔の右壁辺に一致するように縦方向に鋭利な傷のような痕跡が認められる。

なお、X線写真の撮影(神戸市埋蔵文化財センターの施設・技術協力により実施)によって、舞部の型持孔は、予想どおり二孔存在することが確認できた(図版38)。

鐔身の壁厚については、最小1.7mmから最大3.4mmの箇所まで認められる。厚さは全体に不均一で、A面の左側の方が薄く、右側の方が厚い傾向が認められる。鐔型と中子のバランスや型持の高さの違い、あるいは湯回りの偏りなどが複雑に絡んで影響したものと考えてよい。

一方、付随した小破片には稜線が認識された。鐔身片との接合部位はないものの、稜線の角度から鐔身裾に近い下半部にあたる側縁部分と判断できる。大きさは、長辺約2.2cm、短辺約1.0cm、重量1.3gである。色調などの特徴から、向かって右側がB面、左側がA面と同一面を形成すると思われる。

(竹村・守田・森岡秀人)

(3) 土坑出土の遺物(第30図33、図版27)

SK03からは典型的な「て」の字状口縁を有する土師器皿(10世紀後半～11世紀前半)、淡緑色の緑釉陶器が2点、古代の壺底部(33)が出土している。

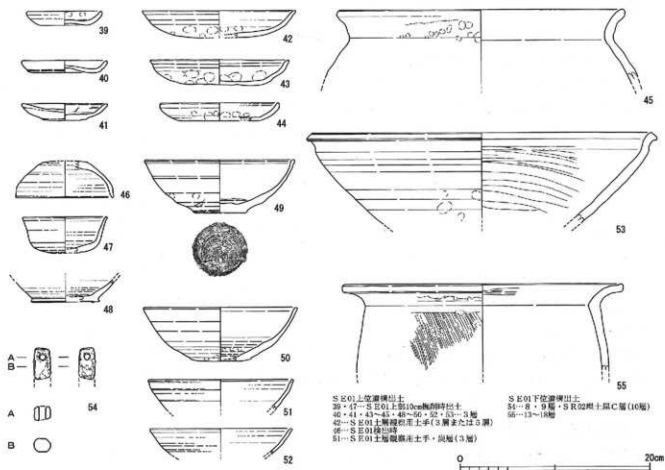
(守田)

(4) 井戸出土の遺物(第31図39～55、図版28)

SE01から出土した遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、磁器、土鏝である。SE01は上位遺構と下位遺構とに分けて考えているので、遺物も分けて記述する。

上位遺構から出土したものは、土師器皿・碗・壺、須恵器杯・碗・鉢、磁器碗で、土師器7点、須恵器8点の計15点を図示した。このうち、SE01埋土3層(第18図)から出土した40・41・43・44・45・49・50・53は比較的残存率が高く、SE01上位遺構の廃絶時に投棄されたものと考えられる。

土師器(39～45)のうち、39～44の6点は皿、45は壺である。39～41は口径7.8cm～9.0cmの小皿、42～



第31図 SE01出土遺物 1/4

44は口径12.4cm～16.9cmの大皿である。これらはいずれも乳白色から淡橙色の褐色系土師器皿といえる。41はロクロ成形であるが、他は手づくね成形で、二段ナデを施す伊野分類のAタイプ〔伊野1995〕、小森分類の皿N〔小森2005〕といえる。42・43は口縁部が外反し、端部を丸くおさめるが、39～41・44は口縁端部の外反がみられないので、おおよそ11世紀後半から12世紀前半の年代観が与えられよう。

ところで、39・40・42～44に似た資料として、神戸市祇園遺跡第5次S X07暗灰褐色泥砂質シルト出土の皿が挙げられる〔富山編2000〕。この資料は、「京VI(京都V)期新から京VII(京都VI)期古・古相の土師器皿Nによく近似している。」として、「京都から工人が移動して製作された可能性」も指摘されている〔小森2005〕。口縁端部の形態からは、SE01上位遺構の資料の方が祇園遺跡のものよりも幾分古相を呈しているが、SE01上位遺構の資料についても、同様に京都風の手づくね土師器と解することができよう。一方、45は摂津に特有の長胴形の甕(甕B)とみると、口縁端部の立ち上がりが小さく、頸部のくびれが丸みを帯びているので、8世紀まで遡る可能性がある〔福島2006〕。

須恵器(46～53)は、46が杯H蓋、47が杯Gで、48～52の5点が碗、53が鉢である。46・47はともに7世紀後半まで遡れるものであり、出土層位からも、SE01上位遺構に本来伴うものではなく、SE01の廃絶後に上流部の古墳時代包合層が崩壊して流入堆積したものと考えられる。48～52は東播系(神出窯)の碗である。いずれも内弯気味に立ち上がるので、おおむね森田編年第1期(11世紀後半～12世紀前半)のものである。底部形態をみると、48は弱いながらも底部が突出する平底碗であるので11世紀後半に遡るが、50は平高台が消えており11世紀末葉以降に下るものである。また、53は内弯気味に立ち上がる体部に、

外反する口縁部をもつ鉢で、口端部はやや肥厚して下方に拡張されることから、森田編年第1期第2段階(11世紀末葉～12世紀前半)といえる。よって、土師器皿や須恵器碗・鉢の年代観から、SE01上位遺構の廃絶時期を11世紀末葉から12世紀前半に比定したい。

下位遺構から出土した遺物は、土師器碗・皿・甕、須恵器杯・壺・甕、黒色土器碗、土鍾である。残存率の低い細片が多いため、土鍾1点(54)と土師器1点(55)しか図化できなかった。55はSE01埋土8・9層(第18図)から出土した土師器甕で、口縁端部に巻き込みの見える長胴甕であるが、SE01の東側に近接するSR02 I 区南側の埋土黒C層からの出土片と接合関係にある。54はSE01埋土13～18層から出土した棒状有孔土鍾である。孔径は0.6cmを測る。(白谷)

(5) 溝出土の遺物(第30図34、図版27)

溝から出土した遺物は、主にSD03とSD06からで、土師器・須恵器・瓦器である。このうち図化できたのは、SD03出土の瓦器(34)のみである。

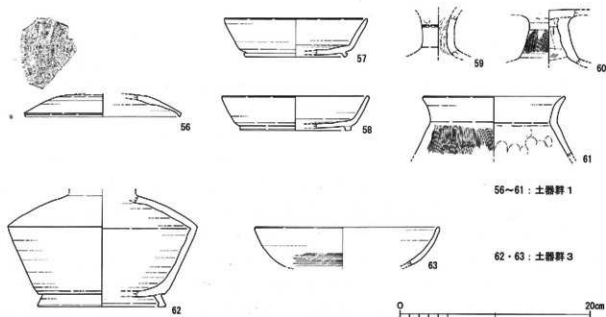
34は瓦器碗である。器表の剥離が激しく、ミガキは観察不可能である。口径は16.2cmと大きい。口縁部内面に沈線をもち、体部が外弯せずにおさまることや口径からⅡ期後半(12世紀前半)の所産であろう〔橋本1992、尾上・森島・近江1995〕。なお、34は犁痕であるSD03と重なって、第2遺構面において検出されたSP116に伴っていた可能性が高い遺物である。(守田)

(6) 土器群出土の遺物(第32・33図56～75、図版29)

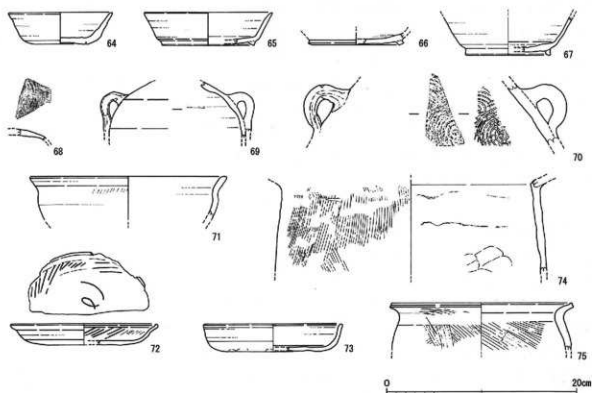
土器群1～3はSR02の肩部付近にまとまって廃棄されていたものである。検出した順に番号をとっているが、このうち土器群1および土器群3は調査区北部に近接して位置し、これより南東に1.4mのところまで土器群2を検出している。これらは8世紀を中心とした古代の土器群(土師器・須恵器)で、7～9世紀の時間幅が認められる。

①土器群1出土の遺物(第32図56～61、図版29)

56～59は須恵器で、60・61は土師器である。



第32図 土器群1・3出土遺物 1/4



第33図 土器群2出土遺物 1/4

56は口縁部内面に断面三角形の内傾する端部をもつ、須恵器の杯B蓋である。頂部は回転ヘラケズリで仕上げ、一条のヘラ記号が認められる。57・58は杯Bの身である。59は長頸壺などの頸部である。60は高杯の脚部である。脚柱部の外面は面取りを行った後、西摂に特徴的なハケ調整を施す。橙色を呈している。61は甕である。外面は細かいハケで、内面はナデによって調整する。復元径14.8cm。口縁部の上方への立ち上がりや、頸部のゆるやかな屈曲などから8世紀第Ⅱ四半期までは下らない。他に、内外面をハケで調整した土師器の甕が認められた。

②土器群2出土の遺物(第33図64～75、図版29)

土器群2は土器群1・3から離れて出土した一群である。北部(土器群2-1)には土器や瓦、南部(土器群2-2)には製塩土器がかたまって出土しており、後者は製塩土器群ともいえるべき密集度である。このうち第33図では他の土器類のみを集め、製塩土器は第37図に、瓦は第39図に載せている。

第33図の内、64～71は須恵器で、72～75は土師器である。

64～68は杯である。65は高台端部に段をもつ。68は杯蓋であろう。回転ナデを施した天井部には、「×」印のヘラ記号(拓影)が認められる。69・70は双耳壺や四耳壺などの耳部である。69は肩部に丸みをおびる。精製された胎土でかたく焼かれ、器壁は0.4～0.6cmと薄い。70の外面は甕に使用される格子状タタキをナデ消し、把手部を貼り付けている。内面は、同心円状の当て具痕をナデ消している。四耳壺の類例は調査地周辺では寺田遺跡第167地点[川上・阿部・中村2005]において、また10世紀の双耳壺が神戸市深江北町遺跡第8次調査において出土している[西岡1999、森岡2008]。71は須恵器の鉢である。口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端面をもつことから鉢Daに分類される[森内2000a]。片口をもつタイプとみられる。外面は口縁部下にわずかに稜をもち、屈曲部はタタキを施した後ナデ消している様子が認められた。9世紀前半から半ばであろう[森内2001b]。

72は皿A、73は杯Aである。72は口縁端部をやや折り込み、外面下半はケズリで調整する。内面には1条の放射状の暗文を施し、見込み部のラセン状暗文は著しく退化する段階のものである。皿Aは他にS X02(S R02埋土C層)からも出土しているが、外面の底部付近にケズリを施すいわゆるb手法で作られたものは、これのみである。平城Ⅱ・Ⅲ期に相当するとみられる〔古代の土器研究会1992〕。73の口縁端部は、折り込み傾向をもち内面に沈線が認められる。このタイプの杯や皿はS R02埋土C層においても出土しており(第35図128~131)、詳細は後述する。74・75は甕Cである。74は大型、75は中型になる。74は頸部が「く」の字状に屈曲し、胴部が張らない長胴タイプの甕である。外面は粗いクシメのようなハケメをもち、内面は板ナデを施しているようである。75は頸部が丸く屈曲し、外反しながら開く口縁の端部を上方につまみ上げる。明確な面を作り出すことによって、その端部は凹線状をなす。また土器群2では、74とよく類似した甕が数点出土している。図示していないが、頸部が丸く屈曲し、外面はハケで内面はナデで調整している長胴甕もある。

出土遺物は7世紀から9世紀前半までの幅があるが、その中心は8世紀半ばから後半である。

③土器群3出土の遺物(第32図62・63、図版29)

62は須恵器の長頸壺である。肩部にシャープな稜をもち、高台はやや内側から外方へ踏ん張るものがつく。田辺昭三氏による編年では陶邑MT21型式期〔田辺1966・1981〕、中村浩氏による編年ではIV型式I~Ⅱ段階〔中村2001〕のものである。63は土師器の杯である。外面にはカキメ状の条線が、内面は口縁部下で1段の強いナデが認められた。胎土は非常に多くの鉱物を含み、在地のものであろう。

土器群1および3は、双方とも8世紀初頭から前半のうちににおさまるもので、第I四半期を中心にした年代が与えられる。(守田)

(7) 流路の遺物(第30・34~36図35~38・76~165、図版27・30~32)

流路は第1遺構面において3条検出されている(S R01~03)。ここでは、それぞれの流路出土遺物を掲載し、それ以外の瓦や製塩土器については製品ごとに分けている。

①S R01出土の遺物(第30図35~38、図版27)

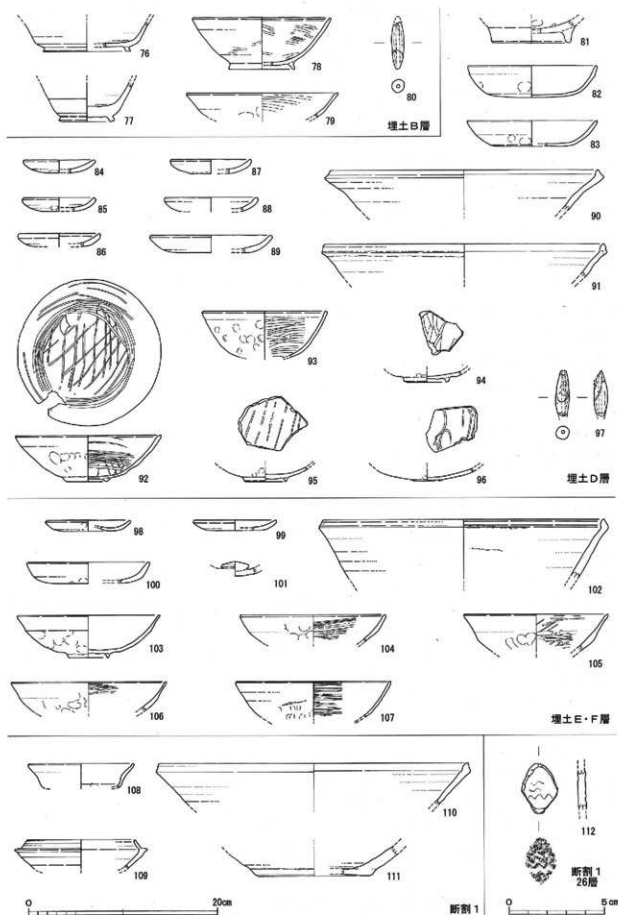
S R01埋土は下層(調査区北壁③・⑤~⑧層)の水成堆積層と、それを起源とする上層の整地土(同①・②層)に分けられ、遺物はほとんどが下層より出土している。35は弥生土器の甕である。わずかに上げ底状を呈している。36は赤褐色の土師器皿である。回転台によって成形され、口縁部は内外面とも強いナデで調整される。37は土師質羽釜で、口縁部は垂直に立ち上がりつつ、わずかに外弯する。激しくローリングを受けている。15~16世紀頃のものであろう。38は小型の管状土罐である。接合痕や孔の形状から、棒に巻きつけて成形したと考えられる。孔径0.4cmを測る。

また、遺物が多く出土した下層埋土から退化した蛸唐草文の染付磁器が出土していることから、18世紀後半に至ってもS R01は流れていたと考えられる。

②S R02-1(埋土B・D~F層)出土の遺物(第34図76~112、図版30)

S R02出土遺物は、8~13世紀を中心としている。そのうち、第34図には古代末から中世にかけてのS R02-1(埋土B・D~F層)出土遺物を、第35図には古代のS R02-2(埋土C層)出土遺物を掲載している。

第34図はS R02埋土の内、76~80がB層、81~97がD層、98~107がE・F層、108~112がS R02断削1から出土した遺物である。その中心は中世前半である。



第34図 SR02-1 (埋土B・D～F層) 出土遺物 1/4、112のみ1/2

B層出土の内、76・77は須恵器である。76は杯身で、C層出土の可能性もある。やや内側に高台を貼り付けた精緻なつくりである。77は小型の壺で、底部が厚く仕上がる。78は内黒の黒色土器である。やや丸みをおびた底部に、断面三角形の外方に開く高台が付く。体部は緩やかに外上方へ開き、内面と口縁部外面とに黒色処理する。口縁端部内側に弱い沈線がめぐる。10世紀半ばに属する〔森1995〕。79は瓦器碗である。口縁部外面に1段の強いナデを施す。和泉型で、橋本久和氏の編年に照らすとⅡ-3期に位置付けられる〔橋本1992〕。80は小型の管状土鉢である。手づくね成形である。孔径0.4cm、重量6.9g。B層からは他に、土師器皿や移動式カマドの基部が出土している。

D層から出土した遺物は、土師器(81~89)、須恵器(90・91)、瓦器(92~96)、管状土鉢(97)である。81は回転台土師器の碗もしくは杯である。底径は8.0cmを測る。ナデを中心に成形しているようだが、器表全体が激しく摩滅しており観察しづらい。10世紀後半のものとみられる。82・83は乳白色を呈した、手づくね成形の杯である。底部から口縁部に向けてわずかに内湾しつつ立ち上がる。口縁部下に1段のヨコナデが認められる。82は口径13.4cm、器高3.4cm、83は口径13.4cm、器高2.7cmであり、それぞれ橋本編年のⅡ-1、Ⅱ-2期に属するとみられる。84~89は皿である。84~88は淡黄褐色を呈した皿で13世紀後半の所産とみられる(伊野1995)。84~87は復元径7.4~8.5cmと小さく、88は復元径9.5cmである。89は復元径12.6cm、器高1.9cmを測り、84~88に比べて大きい、伊野分類でのJタイプ、橋本編年ではⅢ-2期〔橋本1992〕に属するとみられるので、13世紀前半と捉えておきたい。これらの土師器皿はすべて手づくね成形である。

90・91は東播系須恵器の捏鉢である。復元径はそれぞれ90が28.0cm、91が29.2cmを測る。口縁部の外反が弱くなり、とくに91は端部を上方へ拡張し始める段階のもので、12世紀末から13世紀の初頭に位置付けられる〔森田1986〕。

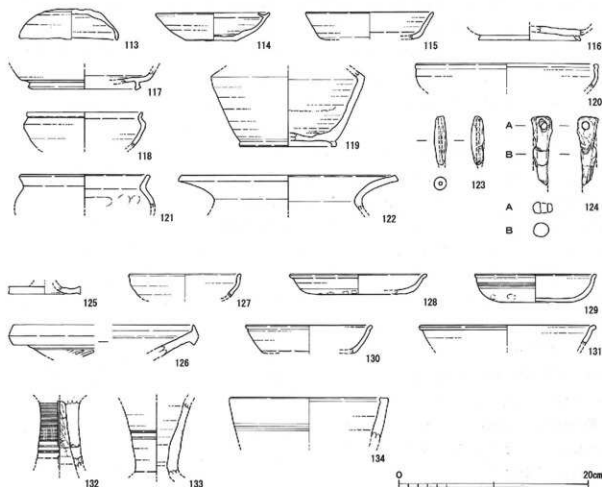
92~96は瓦器碗である。92はD層よりほぼ完形で出土した(図版20)。口縁部に2段のヨコナデを施し、下半には指頭圧痕が認められる。見込み部には斜格子状暗文が見られ、それを体部に広げるより太い暗文が切っている。橋本編年のⅢ期に相当する。口径15.2cm、器高4.9cmである。1mm程度の長石や石英を少量含み、やや良好な焼成である。93は復元径13.0cmであるが、深めの体部をもつ。外反する口縁部下のヨコナデは1段のみで、指頭痕が目立つ。橋本編年のⅢ期とみられる。94は台形状の高台をもつ底部である。高台貼付ナデの内側は未調整である。見込み部の暗文は省略化がすすむ。95は見込み部に平行線状暗文をもつ。96は復元径3.6cmで、形骸化を遂げた小さな断面半円形高台をもち、暗文の省略化が著しい。

97は管状土鉢である。粘土接合部で割れており、残存長4.9cm、孔径0.4cm、残存部の重量7.7gを測る。

E・F層出土遺物では、土師器(98~100)、須恵器(101・102)、瓦器(103~107)を図示した。

98・99は土師器の皿で、手づくね成形である。98はやや上げ底状の底部をもち、回転台土師器の影響を受けた強いヨコナデで成形される。復元径は8.8cmで乳白色に焼きあがる。橋本編年のⅡ-2期に属する。99は伊野分類のJタイプで86・87とよく似ている。復元径は8.6cm。100は復元径13cm、器高2.3cmを測る。口縁部へは直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。101は杯蓋のつまみ部分である。擬宝珠化が進む。102は東播系須恵器の捏鉢である。口縁端部は上方へ拡張し、内面には凹面が見られる。復元径29.4cmを測る。12世紀中葉から後半の所産である。

103~107は瓦器碗である。103・106は口縁部に沈線が見られるが、その他は端部を丸くおさめた和泉型のものである。104は口縁部内側に1段のヨコナデが施され、口縁部下の暗文が省略され始める段階



第35図 SR02-2（埋土C層）出土遺物 1/4

のものである。橋本編年のⅡ-2・3期にあたり、12世紀の半ばから後半にかけてのものであろう。105は口縁部に強いヨコナデを施している。焼成は良好で、暗文が観察できる状態である。復元径は15.1cm。106は口縁部内面に沈線が認められ、外面には強いナデが施される。口縁部まで暗文が認められることや、復元径は16.3cmを測ることから、橋本編年Ⅱ-3期に属する。107は口縁部にまで暗文を施す段階のものである。復元径は16.2cmを測り、橋本編年のⅡ期に位置付けられる。

ここまでの土師器および瓦器の時期を整理すると、E・F層が橋本編年のⅡ-2・3期主体、D層がⅢ期主体の土器が比較的多く見られる。図化できない遺物を含めると、おおむねD層が12世紀後半から13世紀半ば、E層が12世紀前半から半ば、F層が11世紀後半から12世紀前半とみられる。

108～112はSR02の断割で出土した土器で、108が土師器、109～111が須恵器、112が縄文土器である。

108は皿である。端部は丸くおさめ、ヨコナデによって仕上げる。109は杯身である。内傾度の高い立ち上がりをもち、回転ヘラケズリも広範囲で行っている。110・111は東播系の捏鉢である。90・91と同じ12世紀末から13世紀初頭のものである。

112は押型文土器である。外面に山形の押型文を施している。基本土層9層にあたるSR02断割1の26層付近より出土した。播磨・播磨式の範疇で理解することができ、ポジティブ押型文出現時期より下降する年代のものであろう。内面斜行沈線などは観察されない。

③SR02-2（埋土C層）出土の遺物（第35図113～134、図版31）

第35図では、上位(113~124)に黄C層(第11図⑨層、第20図11層に相当)、中位(125~131)にSR02北部に広がる黒C層(第11図⑩層、第20図12層に相当)、下位(132~134)にSR02の下層礫除去時に出土した遺物を掲載している。これらは、須恵器(113~119、125・126、132~134)、土師器(120~122、127~131)、土鍾(123・124)で、土器群2-1と接合関係にあるものが多い。

113~117は杯である。113は回転ヘラケズリの範囲が狭くなり、陶器TK217型式に属するとみられるが、114や115は7世紀前半に位置づけられよう。116や117は底部のやや内側に高台が付き、杯Bの中でも比較的古い段階のものである。118は短頸壺、119は長頸壺である。外面は回転ヘラケズリ後、ナデを施す。内面には接合痕跡が残る。外底面は、高台貼付部の内側が黒変する。

120は杯である。口縁部を内側に巻き込むことから平城Ⅱ期に相当する[古代の土器研究会1992]。内面のミガキは観察できない。121・122は甕である。121は「く」の字状に頸部が屈曲し、内外面ともナデで仕上げる。122は頸部から口縁に向けて外反している。端部は面をもつ。橙色を呈する。

123は管状土鍾である。孔径0.3cm、重量12.2gを測る。124は棒状有孔土鍾である。今回出土した棒状有孔土鍾の中では最も大きい。頭部はバチ形に開き、扁平化が進む。土師質ながら、かたく焼きあがる。孔径0.8cm、残存長7.3cm、残存重量12.2gである。

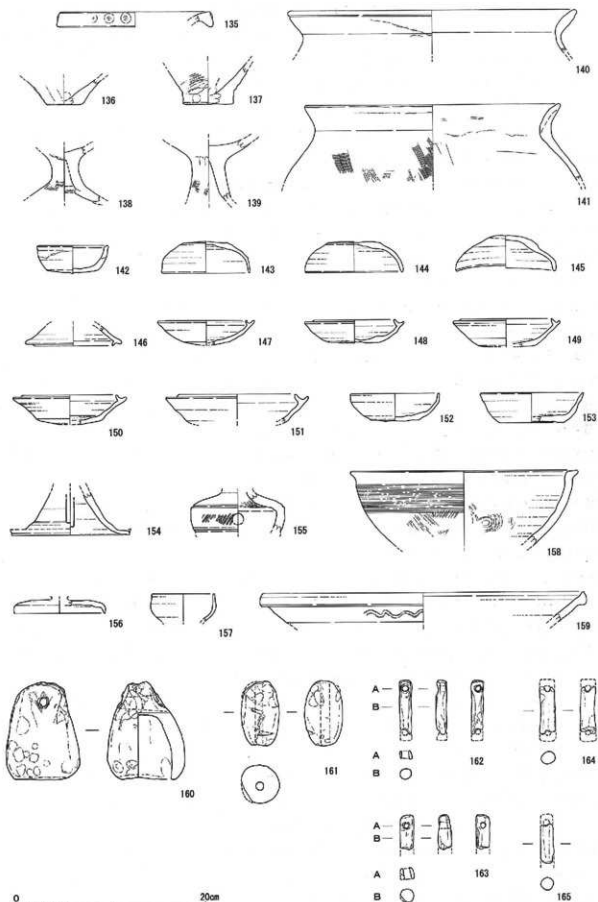
125~131は黒C層の出土遺物で、この一群が最も土器群2との接合率が高い。125は低脚高杯の裾部である。7世紀のものとみられる。126は甕の口縁部である。かなり大型品とみられ、復元すると口径は110cmほどになる。外面には凹線と斜めの凹線文を施す。口縁内面には、段が認められる。

127は杯であろう。端部を丸くおさめ、2段の強いヨコナデを施す。平安時代のもものとみられ、混入品であろう。128は皿A、129~131は杯で、130・131は杯Eの可能性もあろう。128はやや直立気味に立ち上がり、口縁端部は外方へ引き出す。内面には浅い沈線がめぐり、体部はヨコナデ、体部下半はナデで仕上げる。復元径14.1cm、残存高2.2cmである。129は口縁部に向かい内湾気味に立ち上がり、端部は外方に肥厚させている。体部外面には回転性の強いヨコナデにより、条線状の痕跡が残る。体部下半はナデ調整で、底部はやや上げ底状である。復元径12.6cm、器高3.0cmを測る。130は口縁部を肥厚させ、内面には浅い沈線がめぐり、端部をつくり出した際にくぼみが生じる。外面は、129と同様に強いヨコナデが認められ、体部下半はナデで仕上げるa手法をとる[古代の土器研究会1992]。復元径13.0cm、器高3.0cmを測る。131は口縁端部を大きく外方に肥厚させ、内面には顕著に沈線が認められる。小片の出土であり、復元径は18.6cm、残存高2.2cmであった。128~130は、平城Ⅲ期の範疇におさまるとみられる。

胎土について記すと、第33図72や第35図128の皿Aは緻密な胎土で、橙色を呈している。他の杯は、砂粒を含むやや密な胎土で、橙色の他に浅黄色も含まれる。これらの杯皿類は、平城Ⅰ期に相当する口縁部の折込が顕著なものは認められない。また、平城Ⅳ期以降に盛行し体部外面にケズリを施す、いわゆるc手法で成形されたものも見出せなかった。したがって、土器群やSR02C層の堆積時期は平城Ⅱ・Ⅲ型式を主体とする時期であると判断している。ただし、西摂津地域に多い回転ヨコナデを施した第33図73や第35図129・130のような杯は、口縁部や立ち上がりの様子や法量などから平城Ⅳ期に属することも考えられ、おおよそ8世紀半ばと捉えておきたい。

132は高杯の脚部である。脚中位に2条の凹線が施され、その上部はカキメで調整される。133は平瓶や長頸壺などの頸部である。丁寧に回転ナデが施され、2条の凹線が認められる。134は鉢Dの口縁部[森内2000b]であると思われるが、壺Fの可能性も残す。

④ SR03出土の遺物(第36図135~165、図版32)



第36図 SR03出土遺物 1/4

S R03からは、弥生時代から奈良時代にかけて多くの遺物が出土した。砂礫の多い上層と、上層よりやや粒子が揃ったしまりの良い下層に分けて取り上げたが、層位での時期差は認められなかった。第36図では、7世紀前半を中心に、弥生時代後期後半から庄内期、8世紀の3時期が認められた。

135～139は弥生土器、140～142は土師器、143～159は須恵器、160はイダコ壺、161～165は土鍾である。

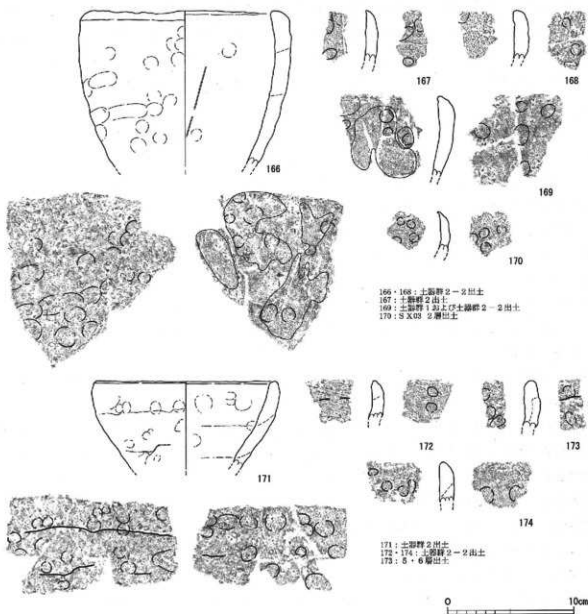
135は広口壺の口縁部である。摩滅が激しいが、円形浮文(個数不明)が認められた。136は壺の底部である。内底部に指頭圧痕、外面にはヘラミガキが認められた。角閃石を含む生駒西麓産の胎土で、褐色を呈する。137は壺の底部である。外面は平行タタキで、底部はユビオサエで調整する。底部付近に接合痕跡が認められた。138は高杯脚部である。脚柱部から下に向けて強く外反しており、その部分で接合痕が認められた。接合部の内面は未調整である。139は淡黄褐色に焼きあがった高杯である。著しく摩滅しているが、脚柱部の外面にわずかにハケメが看取された。140・141は甕である。141は復元径26.6cmの大きなもので、体部から「く」の字に屈曲する口縁は強く外反し、端部を丸くまとめる。142は杯であろう。外底面は未調整で器肌が荒れる。体部中位に大きく接合痕跡が見られる。褐色を呈し、かたく焼きあがる。復元径は7.3cmである。140～142は8世紀のものと思われる。

143～146は杯蓋である。143～145は杯Hで、陶邑TK217型式、飛鳥I・II型式に属する〔田辺1966・1981、西1986〕。143・144は回転ナデによる成形後、ヘラ切り未調整である。145は口径10.2cm、器高3.8cmを測る。製作台からの切り離し痕跡が明瞭であり、回転ヘラ切り開始部分には約5～8mm大の粘土塊が付着したままになっている。胎土は密ながら、大きいものでは器壁を貫通するような径8mm大の礫を含んでおり、粗雑な雰囲気をもつ土器である。146は小さくかえりが付き、宝珠つまみが付くと推定できる。立ち上がりの角度から壺蓋の可能性もある。147～153は杯身である。147～150は杯Hで小型化が著しく、口径が10cmに満たない。立ち上がりは大きく内傾した後、端部をわずかにつまみ上げる。153は杯Gである。体部と底部の境が明瞭で、7世紀後半のものである。154は高杯脚部である。裾部に向かってハの字に大きく開き、端部を上方につまみ上げる。長脚2段の二方向透孔をもつ。155は甕の体部である。肩部が大きく張り、体部には簡描列点文が施文される。156は薬壺などの蓋であろう。天井部から端部にかけて、緩やかな屈曲である。157は脚台付小型埴になろう。復元径は6.5cmを測り、端部はシャープにつくる。158は器台である。復元径は23.7cmを測る。端部は面をつくり、外方に引き出した後丸くおさめる。残存する外面の上半部はカキメが見られるが、下半部はケズリによってカキメが消されており、また工具痕が認められる。内面は下半部に同心円状の当て具痕が認められるが、それをナデ消している。無文化が著しく、短脚が付くタイプとみられる。159は甕の口縁部である。退化した波状文を1条施す。基本土層5・6層から出土した破片との接合関係にある。これらの須恵器はおおむね7世紀におさまるものである。

160は土師質の釣鐘型イダコ壺である。把手部と壺部を一体に作り、ユビナデ後にユビオサエを行う。器表は淡褐色を呈する。把手部の頂部は形状にそってくぼみ、紐をかけた痕跡と考えられる。161は中型の管状土鍾である。孔径0.8cm、重量97.7gを計る。162～165は棒状有孔土鍾である。162は橙色を呈し、孔付近は扁平につくられる。孔径は162が0.7cm、163が0.6cmである。(守田)

(8) その他の遺物(第37～41図166～194、図版6・33・35)

①製壺土器(第37図、図版6・33)



第37図 製塩土器 1/3

製塩土器はコンテナ2箱分出土している。一部遺物包含層や、S X 03から出土したもの(第37図170)があるが、約75%が土器群2から出土したものである。特に土器群2-2は出土遺物の97%が製塩土器であり、「製塩土器群」とも言える出土状況である。第37図では、反転復元ができた2点のほか、口縁部が残存する7点を図化している。今回出土した中からは、底部片は確認できなかった。なお、器肌が摩滅しており、拓影上に布目範疇と指頭痕を合わせて図示している。

全体を眺めると、色調は淡橙色系、乳白色系、灰色系、褐色系の4種類、胎土は数種類見られる(図版6)。成形技法は、内面は布目をもち、外面はナデで仕上げるものや、内外面ともナデのみで仕上げるものが確認されている。両者の比率は4:6の印象をもち、ナデ調整の方が多く認められる。

166~170は、土器群2とS X 03から出土した内面に布目をもつ一群である(第37図上)。166は復元径14.4cmであり、やや大きめの砲弾型である。内外面ともに摩滅が激しい上、非常に目の細かい布目である(図版6-①~③)ことから拓本には表現することが難しかった。167や169は細かい布目をもち(図版

6-④・⑦・⑧)、168は粗い布目であった(図版6-⑤)。167は硬質の焼き上がりで、5mm程度の石英・長石を含むものの、胎土は比較的均質である。167に似た破片も認められ(図版6-⑪)、胎土や色調が酷似することから同一個体であると考えられる。168のように粗い布目をもつ個体は(図版6-⑥)も認められたが、こちらも同一個体であろう。167・168・170は、これら1個体分のみの出土である。他に170も灰黒色の特徴的な胎土をもち(図版6-⑩)、やや薄いつくりであるが、口縁部形態や細かい布目は他の製塩土器に通じる様相である。3mm程度の石英・長石を含む精緻な焼き上がりである。なお、170のみS X03の2層から瓦片とともに出土している。

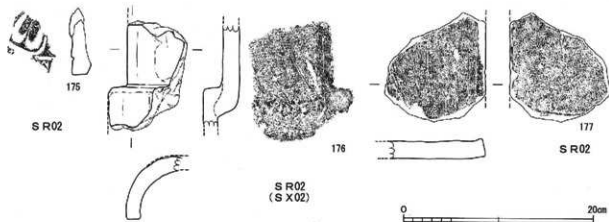
他に、(図版6-⑨)のように、山形の布目をもつ個体が少数認められた。

171~174は、内面は粘土ヒモ巻き上げ後、ナデやユビオサエによって成形する一群(積山1b類)である。底部片の出土はないが、おそらくやや尖りぎみの鉢形もしくは逆円錐形で、後述の6類と同じく8世紀半ば~後半に位置付けられる[積山1994]。171は復元径14.6cmで、胎土はやや粗く、7mmまでの小礫を多く含む(図版6-⑫)。軟質焼成で、内外面は灰白色、断面は黄橙色である。幅約2.5cmの粘土ヒモを巻き上げて成形しており、その痕跡を明瞭に残す。西部瀬戸内においてよく出土するタイプである[岩本・大久保2007]。172は、内面に強い板ナデのような痕跡が認められた(図版6-⑬)。黄橙色を呈し、胎土には石英・長石を含む。173は灰白色に焼き上がるが、166によく似た胎土である(図版6-⑭)。172・173は口縁部下で粘土を接いでいる。174は比較的丁寧にナデを施し、端部を丸くおさめる。浅黄橙色で、6mm以下の石英・長石をやや多く含む(図版6-⑮)。

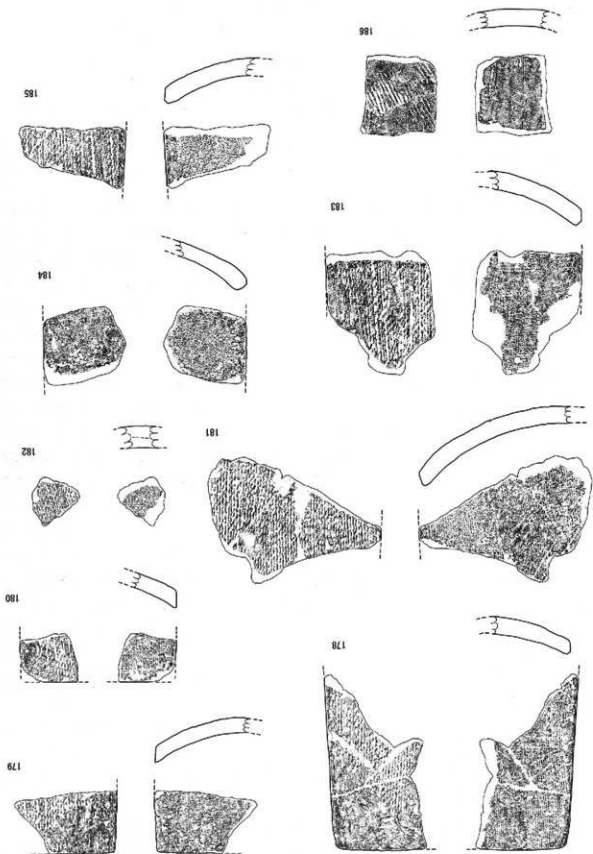
上位の166~170は、布目痕跡から型作りであることがわかる。積山洋氏の分類によると、内面に布目をもつ6類は、8世紀半ばから後半にかけて盛行することが指摘されている[積山1994・2007]。また、これらは内外面ともにナデ成形の一群(171~174)に比べると、口縁端部は薄く上方に引きのぼされる傾向にあり、中にははみ出した粘土塊が認められるものも存在することから、型にはめ込んだまま、ある程度まで乾燥させた可能性が指摘できる。また、口縁部に直交して段と布目痕跡が認められる個体(図版6-⑦)も存在し、消極的ながら木組みなどの型の痕跡と捉えることができる。

今回出土した製塩土器は332片以上の大小の破片が認められ、市内で際立った出土点数となった[守田2009]。土器群2の土師器の杯・皿と同様に8世紀半ばから後半にかけての時期と捉えることができる。②瓦(第38・39図175~186、図版34)

瓦は、コンテナにして4箱分の出土があった。その大半が古代の瓦片(約55点)で、中・近世に下る瓦はほとんど出土していない。古代瓦の出土はS R02埋土C層や土器群2が最も多く、次いでS R02の中



第38図 瓦(1) 1/4



第39圖 瓦(2) 1/4

世埋土、基本土層5・6層の順である。第38・39図において図化したのは、瓦当(175)、丸瓦(176)、平瓦(178～186)、熨斗瓦(177)である。

出土した平瓦は、A類(土師質焼成で、ナデ調整が主体。)、B類(須恵質焼成で、凸面はケズリやナデ調整で縄目タタキが認められず、凹面に布目痕跡をもつ。側縁は分割に伴うヘラ切りを行うのみ。)、C類(軟質焼成。凸面には縄目タタキ、凹面には布目痕跡をもつ。側縁はヘラ切り後に数回のヘラケズリを行う。)の3種と、その他に大別される。なお、平瓦A類は約10点の出土があるが、残存状況から図化していない。

175は複弁八弁蓮華文の軒丸瓦である。内区に8弁の複弁を配し、界線で面した外区は面違鮫歯文がめぐる。縁部は2段のヘラケズリを行う。胎土は径2mmまでの石英・長石をやや多く含み、色調は灰白色である。芦屋廃寺遺跡出土資料と同型式である。176は土師質焼成の丸瓦片である。残存長は、玉縁部で6.8cm、筒部で3.8cmを測る。凸面はナデ調整を行い、凹面は布目が認められる。側面は「コ」字状を呈し、わずかに凹面側を面取りする。また、図化していないが、同様に土師質の有段式丸瓦が出土している。

177は熨斗瓦である。凸面・凹面ともに布目が残る。凸面は全体をケズリやナデで調整するが、部分的に布目圧痕が残ることが特徴的である。凹面は約1～1.5cmごとに帯状に幅3～4cmのヘラケズリを施す。径3mm以下の石英・長石を多く含み、須恵質(青灰色)に焼き上がる。一方、第39図186は平瓦B類と判断し図化した。177と同様に凹面は約1.5cmごとに帯状に幅2cmのヘラケズリを施しており、熨斗瓦の可能性もあろう。凸面はナデ調整の後、太めのタタキが部分的に認められる。177・186のように、平瓦B類は、凹面を平滑にするため数cm間隔で帯状に模骨痕跡の突出部を削りとりしている個体が約半数(8点)を占める。また、側縁は「コ」字状にヘラ切りしているもののみで、分割線が残るものも認められる。

第39図178～181・183～185は平瓦C類で、これらの中には同一個体が含まれている可能性がある。凸面には縦方向に4本/cm程度の縄目の平行タタキ、凹面には布目が看取される。凸面の端部付近は縄目タタキがナデ消され、とくに178や179では狭端部近くで顕著に認められる。凹面の布目には縫合痕跡や模骨痕は認められない。側面はヘラ切りを行った上、凹面側を1段(178・179・180・181・184)、もしくは2段(183・185)にケズリを施す。広端部に近い方がケズリの回数が多く、幅広い傾向が認められる。石英・長石は径1mm程度のものが極少量含まれるのみで、胎土は緻密である。焼成は軟質で、いずれもにぶい黄褐色を呈する。184はこれらに比べ、焼成は不良で、石英・長石を多く含む。

182は上記の平瓦A～C類には属さないもので、凸面は5～6本/cm程度の細かな縄目タタキを施している。径4mm以下の石英・長石を多量に含み、須恵質(灰色)である。このような瓦片はSR02から、合計2点出土している。出土資料の中では2.4cmと最も厚みがあり、接合痕跡から一枚作りであると判断される。

③円筒埴輪(第40図187・188、図版35)

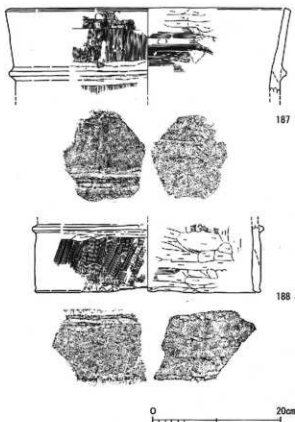
今回出土した埴輪は2点で、SR03北部において近接して出土している。

187は口縁部である。図上復元するにあたって、突帯上面で50cm弱の数値を得たが、図化にあたっては突帯下ナデの値に基づいて反転復元している。口縁端部は面をつくり、丸くおさめている。突帯は小型の台形を呈し、外面は一次調整のタテハケ後に貼り付けている。内面はヨコハケを施した後、口縁部付近にケズリが認められる。淡黄色に焼き上がる。

188は基底部である。突帯上面で復元すると径約50cmになるが、基部外面の中位で復元した。第一段

突帯までは9cmほどの低い基部をもつ。突帯の形状は台形をとり、小ぶりであるもののシャープさを保っている。外面はタテハケを施し、その方向はやや斜めに傾いている。この一次調整後、突帯を貼り付け、上下ともナデを施している。基部外面や底部、突帯下には赤色顔料が認められる。また破片の外面半分ほどに黒斑が看取される。内面はヨコハケのちへラケズリを施すが、一部にハケメや指頭痕が残る。底部調整は行っていない。内外面ともに黄橙色、器壁断面は黄褐色に焼き上がる。

187・188は、ともに胎土には径4mmまでの長石・石英をやや多く含み、密であるという点が共通する。調整はへラケズリの様相やハケ調整の原体も酷似する。さらに、出土状況や突帯上の復元径、図化した復元径の類似性といった要素から、同一個体である可能性が高い。さらに、基底部・口縁部ともに突帯までの間隔が短く、多段突帯の傾向が認められる。



第40図 円筒埴輪 1/6

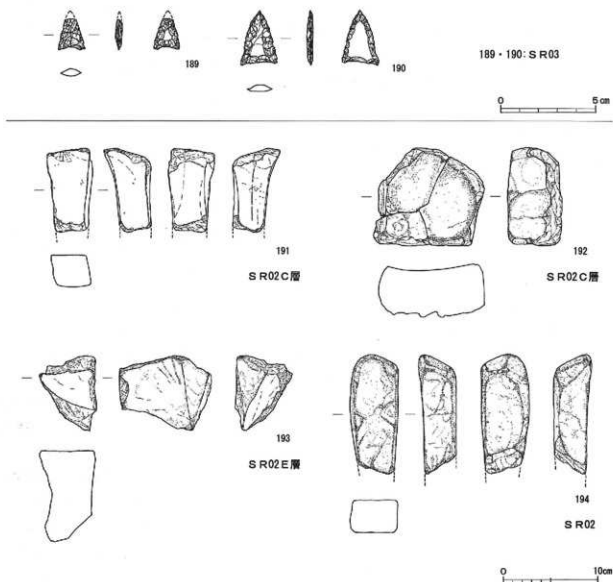
この埴輪については、内面のケズリや黒斑、タテハケ後の突帯貼り付けという点から、4世紀に位置付けられる[川西1978]。ただし、川西編年のI期に位置付けられる資料と比較すると、突帯の突出度の低さや、器壁の厚さ、ケズリなどの技法などが地域による時期差と考えられる点には注意が必要である。

④石製品(第41図189～194、図版35)

今回の調査では、石鏃・砥石や搬入石材が出土した。第41図では、このうち石鏃2点(189・190)と砥石4点(191～194)を図化している。石鏃(189・190)はSR03、砥石のうち191・192はSR02C層、193はSR02E層、194はSR02の断割から出土している。

189はサヌカイト製の石鏃である。全体がやや磨耗していることから鋭さは失われ、先端部を欠いている。残存長1.65cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、現存重量0.7gを測る。裏面には主要剥離面が認められるものの、微弱ながら鏃を作り出すような両面を加工している。190は二上山産のサヌカイト製の平基式無茎鏃である。側縁は直線的にのび、先端部付近でゆるやかなカーブを描く。基部の挟りは浅い。両縁より浅形の細部調整(ステップ・フレイキング)によって成形され、裏面中央部にはフリー・フレイキングによる大剥離面を残す。横断面は偏平な凹凸レンズ状をなし、全長2.95cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、重量2.1gを測る。

191は砂岩製で、やや扁平な直方体状の形状をもつ。國下多美樹氏の分類によると、平面長方形、断面方形のⅢ類に属する[國下2005]。小口面を除く4面を研ぎ面として利用している。下端は欠損するが、上端小口部分は敲打による浅い凹みの他、使用時についたとみられる3条の条痕が認められた。中砥～仕上砥であろう。残存長8.85cm、最大幅4.85cm、厚さ3.4cm、残存重量230gを測る。192は砂岩製で、平面は方形である。裏面は大きく割れ、本来は3寸を基準にした立方体のような形状であった可能性が



第41図 石製品 189・190は1/2、191～194は1/4

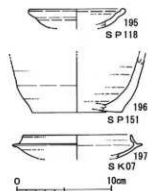
ある〔國下2005〕。よく使い込まれ、表面は凹状となり、断面は弓形をなす。荒砥であろう。残存重量は920gである。193は礫岩製である。割れによって本来の規模は不明である。様々な面を利用し、4面に使用痕跡が看取された。この4面は表面の滑らか具合に差があり、荒砥から仕上げまでの3段階をカバーしていた可能性もあろう。一部が赤黒く変色し、被熱したと考えられる。最大長9.65cm、残存重量440gである。194は灰色の砂岩製である。おおそ直方体を志向し、使用面は4面であるが、残存する上端も使用していたとも考えられる。平面的な使用で、断面は浅く凹状を呈する。出土状況から中世に下る可能性もある。残存長12.6cm、幅5.1cm、最大厚3.95cm、残存重量420gを測る。

その他、SR02埋土のB層からは、結晶片岩(図版35-④)、砥石(図版35-①)や砂岩が、SR02埋土黒C層からは最大長7.8cm、最大幅3.9cm、最大厚1.6cmの緑色片岩(図版35-③)、またSX03からは最大長29cm、最大幅14cm、最大厚9cmの結晶片岩大片の他に、砂岩製の砥石(図版35-②)や橙色の玉石が出土している。

(守田)

3. 第2遺構面に伴う遺構の出土遺物

195はS P 118出土の土師器皿である。口縁端部の屈曲が直立する移行期に位置付けられ、11世紀末～12世紀初頭になろう〔橋本1992〕。この遺構からは土師器皿類の破片が多く出土しているが、概要がわかるものはこれのみである。遺物の年代から、S P 118が本来は第1遺構面に伴うものであることがわかる。196は須恵器壺の底部である。8世紀頃の土器である。



第42図 第2遺構面ビット・土坑出土遺物 1/4

197はS K 07より出土した須恵器杯身である。田辺編年によると陶邑MT 85～TK 43型式に位置付けられるので、調査区全体を通して遺構が希薄な6世紀後半のものと捉えられる。

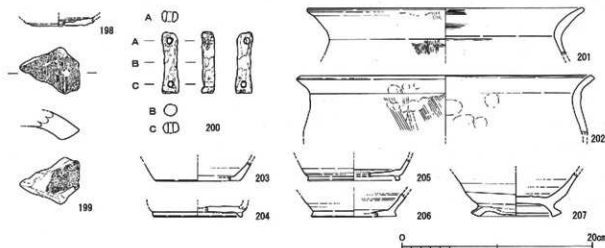
S X 03から出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、土鍾、製塩土器、瓦、砥石、結晶片岩である。S X 03の埋土は上位埋土と下位埋土に二分されているので、出土層位を分けて記述する。

上位埋土からは、土師器の杯・甕、須恵器の杯・碗・壺、瓦、製塩土器が出土している。古墳時代の須恵器片が多いが、これらは小さなものが多く、図化できたのは須恵器杯1点(198)と奈良時代の瓦1点(199)、製塩土器(第37図170)のみである。

198は須恵器杯の底部である。粗いケズリの様相や範囲から、陶邑TK 217型式と判断する。199は土師質焼成の丸瓦で、下面に布目痕跡が残り、端部はヘラによる面取りが明瞭な奈良時代の瓦である。

下位埋土からは、弥生土器甕、土師器甕、須恵器杯・碗・壺・甕、土師質の土鍾が出土している。この層序から出土したものは上位埋土から出土したものと比べるとかなり大きいものを含んでおり、土師器2点(201・202)、須恵器5点(203～207)、土鍾1点(200)の計8点を図化した。

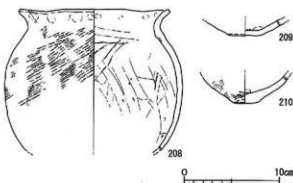
土師器の201・202は甕の口頸部である。どちらも外面にハケメを施す長胴甕で、201は頸部で強く屈曲しやや外反する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめる。202は胴部の張りが弱く、頸部はゆるやか



第43図 S X 03 出土遺物 1/4

に屈曲して口縁端部に面をもつ。201は8世紀後半、202は9世紀前半のものであろう〔池田1996〕。

須恵器はいずれも底部片を図示した。203～205が杯、206が碗ないし壺、207が壺である。203は高台を有しない杯Aで、204・205は小さな高台を外周部に有する杯Bである。203と205は灰白色の軟質焼成であり、播磨産と推測できる。206は外底面に糸切り痕が見られる平底をもつ。復元底径は9.0cmとやや大きいので、壺の可能性もある。207は外に踏ん張る高台を有する。これらはおおむね9世紀のものである〔森内1995・2000b・2001b〕。



第44図 土器群4出土遺物 1/4

200は土師質焼成の棒状有孔土鐿である。全長は6.5cm、重量12.4gを測る。

(白谷)

(4) 土器群出土の遺物(第44図208～210、図版36)

第2遺構面の西部において、土器群4・5として取り上げた遺物のうち、図化が可能なものは土器群4に限られていた。これらはいずれも庄内期前半に限定されるものである。

208はいわゆる畿内第V様式系のタタキ甕である。タタキは細筋でラセン状にめぐる。口縁部径より胴部径が大きく、最大径で17.7cmを測る。球胴化が進み、重心を下半に落とした中型甕である。体部より板などで叩き出して口縁部を成形しており、端部は面をもち、頸部の屈曲はゆるやかでたわんでいる。内面は、体部下半に一部ハケ調整の後、ヘラケズリを施した様子が認められるが、全体的に不定方向のヘラケズリで調整するのみである。土壌の影響を受け、マンガンを砂粒の付着が著しいものの、外面は右上がりの平行細タタキが看取された。別個体であるが、同様に平行細タタキや内面ヘラケズリが認められる甕片が出土している。西撰4様式に属すると見られる〔森岡・竹村2006b〕。

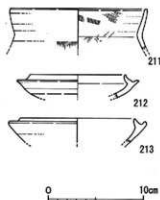
209・210は、208と直接接合はしないが、いずれかが208と同一個体になる可能性が高い。210の底部はやや丸みをもった平底で、その径は2.6cmを測る。外面は平行細タタキを施した後、上半部はナデ消している可能性がある。内面はナデ調整で、底部は厚みをもって仕上げる。209はマンガンを著しく器表に付着しており、外面調整は観察できない。

(守田)

4. 第4遺構面に伴う遺構の出土遺物

図化した遺物は、すべてSK09出土のものである(第45図211～213、図版36)。211は土師器の甕である。頸部の屈曲はゆるやかで、口縁部は内弯しつつ立ち上がり、端部を丸くおさめる。外面は胴部にハケ調整が認められ、口縁部はナデで丁寧に仕上げる。内面はハケ調整の後、ナデを施している。淡橙色を呈し、軟質の焼き上がりである。6世紀のものであろう。212・213は須恵器杯身である。シャープなかえりをもつ212は、同一個体ではないが酷似する破片が出土している。212・213は、陶器TK209型式に比定される。須恵器の年代観から、SK09は7世紀をまたぐ頃のものと考えられる。

(守田) 第45図 SK09出土遺物 1/4



第4章 まとめ

前章では、今回、発掘調査を実施した月若遺跡第96地点の調査結果について詳述してきた。今回の調査では、第1～4遺構面が検出された。第1遺構面からは古墳時代後期～江戸時代、第2遺構面からは弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が検出された。第3・4遺構面からは遺物が出土しなかったが、それぞれ弥生時代前期～中期、縄文時代後期～晩期の遺構面と推定される。

本章では、これらの遺構面に伴う遺構・遺物についてまとめ、本地点における土地利用の変遷を時代・時期を追って考える。

調査地点の立地する地形・地質 月若遺跡は芦屋川中流の右岸地域に分布する縄文時代早期から近現代にわたる複合遺跡である。既往の調査では、集落跡に伴う遺構や耕作地に伴う遺構が見つかった。本遺跡周辺には、芦屋廃寺・寺田・西山町遺跡が隣接しており、本来は、これらの遺跡の分布範囲内、時期ごとに集落域や生産域が複雑に絡み合っていて変遷したと考えられる。

本遺跡が立地する地形は、沖積扇状地中位面であり、標高は約20～30mを測る。本調査地点の現地表面での標高は約23mである。月若遺跡の分布範囲の東端では、弥生時代後期まで遡る芦屋川の河岸段丘崖と考えられる崖状地形が検出されている(第69・89地点)。そして、本地点はこの崖状地形のすぐ西側の段丘上に位置している。つまり、本調査地点は、少なくとも弥生時代以降、継続的に月若遺跡の東端に位置していたと推測される。

縄文時代の遺構・遺物 本調査地点において、第4遺構面が縄文時代後期～晩期の遺構面であると推測される。これは、寺田遺跡第128地点におけるC14年代測定値[辻・矢作・辻本・田中・バリノ2003]を援用した結果である。当遺構面からは、樹木の根などの痕跡と考えられる遺構が検出されたが、人為的な遺構は認められなかった。

縄文時代の遺物としては、SR02断削1の26層(基本土層9層と対応)から出土した縄文土器片(第34図112)、SR03から出土した石鏃2点(第41図189・190)が挙げられる程度で、その数は極めて少ない。これらの内、縄文土器片には山形押型文が認められ、黄島式の古層に一部併行する播磨の福本式に比定される。この土器片は器表が摩耗しており、包含されていた基本土層9層が縄文時代後期～晩期に堆積したものと推測されていることから、原位置は保っていないと考えられる。ただし、月若遺跡ではこれまで当該時期の遺物は確認されておらず、今後、本遺跡付近で当該時期の遺構や遺物が新たに確認されることが予測される。これらの結果から、本調査地点では、縄文時代に掘削を伴う人間活動などが行われる場所ではなかったと考えることができる。

弥生時代の遺構・遺物 今回の調査では、第3遺構面が弥生時代前期～中期の遺構面になると推測されるが、遺構・遺物はまったく確認されなかった。弥生時代後期から古墳時代前期の遺構面である第2遺構面においては、後期前半のものはまったく認められず、後期後半になってようやく土器が少量確認されている。月若遺跡全体を見渡しても、これまでに前期の遺構・遺物はまったく確認されておらず、中期においても第12地点で弥生時代中期後半(IV様式)の土坑1基(SK-06)が検出されているのみである[森岡・白谷編1992]。

今回の調査で出土した遺物の中には、後世の遺物包含層や遺構の埋土に混入したのを含めると、弥生時代後期後半～末[森岡・西村2006]の土器も確認できるが、その数は極めて少ない。それらの中で、

飛鳥時代の流路(S R03)から出土した弥生時代後期後半の広口壺の口縁部片(第36図135)は、角閃石を含む生駒西麓産の胎土をもつ搬入土器である。

なお、西側に隣接する月若遺跡第70地点についても、当該時期については同じような状況である〔前田・石島・中村2004〕。一方、今回の調査地点から南西方に約30m離れた第81地点では、弥生時代後期後半の南北方向にのびる溝(S D203)から大量の土器が出土しており、居住域の中心はこの溝の西側にあると考えられている〔安田編2006〕。

ところで、今回の調査では、小銅鐸がピット(S P33)から出土した。当ピットの出土遺物の中には、遺構の形成時期を示すものは認められなかったが、層序から検討した結果、弥生時代後期後半から古墳時代前期の間に形成された遺構であると判断された。

なお、小銅鐸に関しては、平成21年度に別途、報告書を刊行する予定であり、その中で様々な視点から詳しく検討したい。

古墳時代の遺構・遺物 古墳時代初頭〔森岡・西村2006〕～前期が本地点の第2遺構面、弥生時代後期が第3遺構面にあたる。なお、今回、古墳時代中期の遺構・遺物は、まったく確認されていない。

月若遺跡やその周辺に分布する芦屋魔寺遺跡、寺田遺跡などの芦屋川扇状地上の遺跡では、古墳時代初頭の遺構・遺物が数多く認められている〔森岡1999・2003c、森岡・辻2007〕。しかし、本地点では古墳時代初頭の遺構・遺物は少ない。その理由としては、弥生時代後期後半と同様に、当調査地点が集落の東端に位置しており、居住域の中心から外れていることに起因すると考えられる。

一方、芦屋川扇状地上の遺跡において、古墳時代前期では、初頭と比べて遺構および遺物の数量は激減する。本地点において、前期の遺構としては、溝(S D07)が1条あるにすぎない。古墳時代前期の遺物としては、4世紀の円筒埴輪(第40図187・188)が挙げられる。両片は同一個体の可能性が高く、7世紀の流路であるS R03に混在していた。なお、芦屋川右岸地域では古墳時代前期の古墳の存在は確認されておらず、これらの埴輪片は埴輪円筒棺に用いられていた可能性が高い。ただし、近隣の寺田遺跡第117・118地点からは碧玉製管玉の出土が見られ(未報告)、古墳副葬品の遊離物である可能性が高い。阪神間における4世紀の埴輪円筒棺の事例としては、兵庫県伊丹市の有岡城跡・伊丹郷町204次調査H地区の埴輪円筒棺が挙げられる〔西口2006、岡本2006〕。大阪府豊中市大石塚・小石塚古墳をはじめ、埴輪円筒棺の単独出土事例が少ないことから、伊丹市の場合も上臈塚古墳や鶴塚古墳との関係が濃密なものと考えられる。

先述したとおり、本地点において中期の遺構・遺物はまったく確認されていないが、後期になると第1遺構面において遺構・遺物がやや目立つようになり、飛鳥時代(7世紀)になるとその数が増加する。掘立柱建物を構成していたと考えられるピットが数多く検出されており、堆積環境からうかがえる生活面の形成過程からみて、本地点が居住域であったと考えられる。ただし、芦屋川扇状地上の既往の発掘調査結果と比べると、遺構・遺物ともにその数量は相対的に少なく、集落の中心からは外れていたと推測される。

なお、調査区東部で検出されたS R02-2の底面において古墳時代後期の土坑(S K09)が検出されたことから、当流路に伴う谷地形が6世紀にはすでにあったと判断することができる。

古代の遺構・遺物 7世紀以降、古代の遺構・遺物の数量は増加している。これらは第1遺構面で検出されており、8～9世紀になると官衙的要素をもつ遺物が目立つようになる。具体的には、法隆寺式軒丸瓦(第38図175)を含む古代瓦(第38図176・177、第39図178～186、第43図199)、製塩土器(第37図166

～174)、緑釉陶器、灰釉陶器(第29図15)、須恵器双耳壺・四耳壺などの耳部(第33図69・70)、律令的な土器様式の一部が挙げられる。また、生産用具といえる砥石も多く出土している(第41図191～194)。

本調査地点周辺で実施された発掘調査においても、官衛的な遺物が数多く確認されている。古代瓦では、月若遺跡第81地点の古代の大溝から出土した法隆寺式軒丸瓦1点と軒平瓦2点を含む多量の瓦片や埴[安田編2006]、本地点の南方に位置する寺田遺跡第191地点[守田・竹村2009]・197地点から出土した古代瓦片、西方に近在する寺田遺跡第181地点で出土した単弁八弁蓮華文高勾麗様式軒丸瓦1片と法隆寺式軒平瓦1片[安田編2006]などが挙げられる。なお、これらの瓦当は芦屋廃寺跡の創建期のものと同型式である。

これまでに芦屋川右岸において古代瓦が比較的多く出土した調査地は、古代の寺院や官衛施設の所在地に推定されている。具体的には、芦屋廃寺跡(芦屋廃寺遺跡第1～3次調査、A・B・K・Q・R・43・47・62・71・75地点など)、初期兎原郡衙推定地(寺田遺跡第1・90地点など)、葦屋駅推定地および関連施設(津知遺跡第2地点、深江北町遺跡第9次調査など)が挙げられる。そして、これらの施設は密接に関連して、「官衛ブロック」を構成していたと考えられている[森岡2001・2002・2003a・2003b・2007a・2007b・2008]。これらの調査地点から考えると、今回の調査地点を含む月若遺跡の南半部や寺田遺跡の東部において古代瓦が数多く出土しており、官衛施設や寺院関連施設があった蓋然性が高い。なお、芦屋川右岸の地域でこれまでに古代の瓦片が出土した調査地点を第1・2表に掲げておく。

市内において製塩土器が多数出土した事例は、寺田遺跡第90地点[森岡・竹村2005b]について2例目である。なお、寺田遺跡第90地点では「大領」「少領」の墨書土器が出土しており、最初期の兎原郡衙があったと考えられている[森岡2001・2002・2003a・2003b・2007a・2007b・2008]。今回の調査における製塩土器の出土状況を見ると、そのほとんどは土器群2-2に伴っていた。当土器群は一括投棄を含む比較的短期間に形成されたものと考えられることから、本調査地点では短い期間に限って製塩土器が廃棄されたと言えることができる。

なお、月若遺跡第81地点の大溝からは、瓦片と一緒に腕形滓を含む鉄器生産に伴う鋳滓が出土している[安田編2006]。これらの遺物からも、本調査地点を含む月若遺跡東部において、官衛施設や寺院関連施設があった可能性が高いと判断することができる。

ところで、古代の遺構であるSX03からは、搬入された結晶片岩の破片が出土した。同様の破片は、古代から中世の流路であるSR02-1・2からも出土している(図版35)。これらは加工痕或使用痕などの人為的な痕跡は認められないが、何らかの理由で芦屋の地に運び込まれたことは確かである。今後、このような古代以降に搬入された結晶片岩が、市内で見つかる可能性は高いと考えられる。その搬入された理由については、今後の課題としたい。

なお、本調査地点の出土遺物をみると、9世紀後半～10世紀頃に遺物が減少し、11世紀頃から再び増加する傾向が認められる。

中世の遺構・遺物 中世の遺構は、第1遺構面で検出されている。その中で主な遺構としては、SE01とSR02-1が挙げられる。ただし、両者ともに厳密に言えば古代末に築かれた遺構である。

SE01は、11世紀末葉～12世紀前半には廃絶した井戸である。当遺構から出土した土師器皿は、京都風の手づくね土師器と理解できる。

古代と中世の流路であるSR02については、東播系須恵器や瓦器を伴う段階の流路をSR02-1とした。当流路は12世紀代に礫を用いて護岸をしている。市域でこのような礫を多数用いた護岸遺構としては、

[illegible]

第2表 芦屋川右岸地域出土古代瓦一覽表(2)

遺跡・調査地	所在地	瓦の出土した遺構 （埋没状況等） （S X01）	古代の瓦製物類・出土数	瓦の種類・出土量	特殊遺物・「管形」の発見など	文 献
月夜通第17号地点	戸部市西山町60-3	川根院寺へ（埋没状況不明） 7～8世紀の大溝（S D01）	-	丸瓦 1点	-	【竹村・白根継2004】
月夜通第19号地点	戸部市月夜町60番地	-	堀内八甲斐寺文庫丸瓦 1点、堀正寺古瓦文庫平瓦 5点	平瓦、平瓦瓦当と参道、得志寺文庫平瓦 5点	区画境界、線形排水	【宇田重雄2006】
月夜通第20号地点	戸部市西原町60番地	-	-	平瓦、平瓦瓦当6点	月夜通第20号地点に存在	【宮本大輔2007】
月夜通第24号地点	戸部市月夜町60-3（40-3）	土樋跡など	堀内八甲斐寺文庫丸瓦 1点	丸瓦、平瓦瓦当6点	縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代	本書
月夜通第31号地点	戸部市月夜町68-2	古代の溝	-	平瓦	月夜通第31号地点と同一の溝が確認されている。瓦の形状も異なる。	-
寺田通第1号地点	戸部市三宅町75-5	遺物包蔵層	-	平瓦1枚	和銅銭、鉄釘、大板瓦、土器破片	（山田・大下・森下1995）
寺田通第2号地点	戸部市三宅町75-5	古代の土井の遺物包蔵層	-	平瓦瓦当	和銅銭、鉄釘、大板瓦、土器破片	（遠藤隆1993）
寺田通第3号地点	戸部市三宅町75-5	和銅銭の出土した遺物包蔵層	-	平瓦瓦当	ローリングを欠けている	（清岡・北村・後神直樹1993）
寺田通第4号地点	戸部市三宅町75-5	中世後半以降の遺物包蔵層	-	平瓦、平瓦瓦当、合弁6点	中世の遺物包蔵層に属入	（清岡・北村・後神直樹1993）
寺田通第5号地点	戸部市三宅町75-5	亀石遺構（S X01、15番地）	-	丸瓦、平瓦、平瓦瓦当	中世の遺物に属入	（清岡・北村・後神直樹1993）
寺田通第6号地点	戸部市三宅町75-5	古代の遺物包蔵層	-	平瓦、平瓦瓦当	古代の遺物包蔵層から出土	（清岡・木間謙1998）
寺田通第7号地点	戸部市三宅町75-5	中世の遺物	-	平瓦、平瓦瓦当	中世の遺物に属入	（清岡・木間謙1998）
寺田通第8号地点	戸部市三宅町75-5	和銅銭の出土した遺物包蔵層	-	丸瓦、平瓦	ローリングを欠けている	（清岡・竹村2005b）
寺田通第9号地点	戸部市三宅町75-5	和銅銭の出土した遺物包蔵層	-	丸瓦、平瓦	中世の製作土に属入	（清岡・岩村2005b）
寺田通第10号地点	戸部市三宅町75-5	中世の土坑（S K11）	重要文化財平瓦	-	中世の遺物に属入	（山田隆2001）
寺田通第11号地点	戸部市西原町60-4-31-4	瓦片群（S X100）	-	丸瓦、平瓦、平瓦瓦当	8世紀の大板瓦が検出され、残っている	（新田・平田・寺田2002）
寺田通第12号地点	戸部市西原町60-5	中世の遺物包蔵層	-	丸瓦 1点	中世の遺物包蔵層に属入	（清岡・岩村2003）
寺田通第13号地点	戸部市三宅町77-7	平野神社末社の跡（S E201）	十九尊寺井蓮堂文庫丸瓦 1点	丸瓦 1点	平野神社末社の礎石から出土	【川上・利興・牛井2005b】
西山通第4号地点	戸部市西山町48	古代の遺物包蔵層	-	瓦片	古代の遺物包蔵層から出土	（清岡・竹村2005a）
西山通第7号地点	戸部市西山町69-2	古代の遺物包蔵層	-	古瓦瓦当破片	古代の遺物包蔵層から出土	（清岡・竹村2007）
三宅通第7号地点	戸部市西山町142	近郊代の竈	-	平瓦 1点	奈良時代の須賀崎片が出土	【中田・鈴木2005】
三宅通第8号地点	戸部市三宅町245	7世紀の流溝（S D01）	-	平瓦 1点	奈良時代の須賀崎片が出土	【高橋隆1997】
大赤通第17号地点	戸部市清水町38	-	-	平瓦 2点	紀伊半島式（852年）が伴出	（清岡・岩村2002）
八条通第G - 9 - 11区	戸部市新田町	-	-	平瓦 6点	鎌倉が覆しい	【澤田隆2003】
六条通第A - 7区	戸部市清水町	-	-	丸瓦 2点、平瓦 1点	-	【遠藤隆2003】
六条通第A - 25区	戸部市清水町	-	-	丸瓦 1点	-	【遠藤隆2003】
八条通第B - 20区	戸部市清水町	-	-	丸瓦 1点、平瓦 1点	-	【澤田隆2003】
六条通第B - 24区	戸部市清水町	-	-	丸瓦 1点	-	【澤田隆2003】
新田通第1号地点	戸部市新田町115-8	近世の耕作土	-	中瓦 1点	障壁が覆しい	【清岡・岩村2007】
津知通第1号地点	戸部市津知町27	赤土層	十九尊寺井蓮堂文庫丸瓦 5点	丸瓦、平瓦多数	大形焼物、和銅銭、真時通、行成等の出土。新田通、新田通、新田通、新田通	【竹村隆1998】
津知通第2号地点	戸部市津知町20-1、20-1	近代の中世の遺物包蔵層	-	丸瓦 1点、平瓦 1点	古代の遺物包蔵層から出土	【竹村・山内継2003】
津知通第3号地点	戸部市津知町40-1	近代の遺構	-	丸瓦 1点	近代の遺物に属入	【竹村・山内継2003】

六条遺跡第18地点の堤(12世紀)〔森岡・坂田編2002〕、六条遺跡A-7・14区の園池遺構(12世紀)〔渡辺編2003〕が挙げられる。

その他、第1遺構面では、古代末～中世(11世紀後半～13世紀)の遺物が多数出土していることから、検出されたピットの中には当該時期のものが多く含まれていると判断される。今回確認できた唯一の掘立柱建物であるSB01も当該時期のものと考えられる。なお、今回の調査地点の南側に隣接する第70地点で平安時代末～鎌倉時代前期の堀状遺構(SX103)が検出されており、当地点付近に逆「コ」字状に集落を区画する堀が存在していた可能性が指摘されている〔前田・石島・中村2004〕。

第1遺構面では、調査区南西隅において北東～南西に走る犁痕が検出されており、当該調査地点付近は遺物が激減する14世紀以降、耕作地として利用されたと考えられる。そして、基本土層2～4層が中世～近代の耕作地に対応すると考えられるが、耕作土が形成されることによって地表面が急速に上昇していったと推測される。このような状況は、月若遺跡第71地点において15世紀頃に耕作地となつてから、土層の堆積が激増するなど〔竹村・白谷編2004〕、各調査地点で認められる。さらに、月若遺跡では、大きくみて中世のある段階に居住域から生産域に変化した地点が複数認められる。これは、近畿地方全般でみられる中世前期から中世後期にかけての集落の再編をはじめ、その背景に大きな社会変化があると考えられる。

近世の遺構・遺物 近世では、耕作土が形成されている。主な遺構としては、流路SR01が挙げられる。なお、本調査地点の近世の土層を機械掘削で除去したことから、近世の状況については不明な点が多い。そのため、犁痕の方向などを、平成21年度に山手幹線街路事業に伴って実施予定の第100地点の発掘調査において確認する必要がある。

近代の遺構・遺物 明治18年(1885)の地形図において、本調査地付近は耕作地であったことがわかる〔清水編1995〕。そして、大正12年(1923)測図1万分の1地形図「東芦屋」をみても、耕作地となっている。それが、昭和7年(1932)の地形図では、家屋が記されている〔清水編1995〕。さらに、当該調査地点の既存建物にお住まいであった今村氏からは、建物の部材に「大正6年」の墨書があったというご教示を受けた。これらのことから、本調査地点では、少なくとも大正6年(1917)頃より耕作地から宅地に地目が変化し始めたことが推測される。なお、第1遺構面において、近代の電信柱アンカー、防空壕跡、地下施設などが検出された。

最後に 平成10年(1998)に芦屋市教育委員会によって山手幹線街路事業に伴う埋蔵文化財の試掘・確認調査が実施されてから、今年で11年が経過した。その間、平成12～18年度には、震災復興調査の対応に追われていた芦屋市教育委員会に代わって、事務委任を受けた神戸市教育委員会が調査機関となって本事業に伴う発掘調査を行った。これらの発掘調査報告書は神戸市教育委員会によって迅速に刊行され、月若遺跡や寺田遺跡をはじめ、街路用地に関わる諸遺跡の内容が次々と明らかにされた。そして、平成19年度からは、再び芦屋市教育委員会が当事業に関わる発掘調査を実施することになり、今回の調査が行われた。その調査成果は、これまでに記してきたとおりである。

来年度(平成21年度)は、山手幹線街路事業にとって最終の年度にあたる。本事業に関わってきた文化財担当としては、平成21年度に実施する発掘調査はもちろんのこと、十年以上に及ぶ本事業に伴う発掘調査の成果をまとめて、調査を締めくくることがあるだろう。

(竹村)

引用・参考文献

- 浅岡俊夫 編 1993 『芦屋市 月若遺跡—第10地点・第13地点—』 六甲山麓遺跡調査会
- 芦屋市 1997 『阪神・淡路大震災 芦屋市の記録 I '95～'96』
- 芦屋市 2001 『復興への歩み 阪神・淡路大震災 芦屋市の記録 II 1996.4～2000.3』
- 芦屋市教育委員会 2001 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』<芦屋市文化財調査報告第40集>
- 芦屋市広報課 2008 『山手幹線開通目指し 大詰めの調査成果 県下2例目の小銅鐸出土に一同ビックリ!』『広報あしや』
No.1001 平成20年(2008年)12月1日号
- 芦屋市広報課 2009 『広報あしや』No.1007 平成21年(2009年)3月1日号
- 芦屋廃寺跡発掘調査団・芦屋市教育委員会 1987 『芦屋廃寺B地点遺跡発掘調査 現地説明会ノート』
- 池田征弘 1996 『摂津西部・播磨』『古代の土器』4巻(近畿編) 古代の土器研究会
- 伊藤宏幸 編 2002 『貴船神社遺跡(製塩遺跡)—平林地区土地改良総合整備事業に伴う発掘調査報告書—』北淡町教育委員会
- 伊藤宏幸 編 2008 『志筑廃寺発掘調査報告Ⅱ—国庫補助事業 志筑廃寺範囲確認調査報告書—』<淡路市埋蔵文化財調査報告書第3集> 淡路市教育委員会
- 伊野近富 1995 『土師器Ⅲ』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 岩本正二・大久保徹也 2007 『備讃瀬戸の土器製塩』<古備考古学ライブラリー③> 吉備人出版
- 岡田章一 編 2007 『経路市 豆腐町遺跡Ⅰ—J R山陽本線等連続立交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—』<兵庫県文化財調査報告第322冊> 兵庫県教育委員会
- 岡本一秀 2006 『岡崎輪軸』『伊丹市所在 岡崎城跡・伊丹第Ⅳ—主要地方道伊丹停車場線舗装修繕工事に伴う発掘調査報告書—』<兵庫県文化財調査報告第301冊> 兵庫県教育委員会
- 尾上 実・森島康雄・近江俊秀 1995 『瓦葺器Ⅲ』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 小野田義和・日次謙一 2005 『月若遺跡(第36次地点)発掘調査実績報告書 平成8年』『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査—本発掘調査—実績報告書集』<芦屋市文化財調査実績報告集Ⅰ> 芦屋市教育委員会
- 川上厚志・阿部 功・中村大介 2005 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第150～153・157～160・166～168地点—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅳ—』<芦屋市文化財調査報告第59集> 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 川西宏幸 1978 『岡崎輪軸総論』『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 関下多美樹 2005 『古代都城砥石考』『龍谷大学考古学論集Ⅰ』龍谷大学考古学論集刊行会
- 古代の土器研究会 1992 『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』
- 小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年の研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀—』真福社
- 斎木 巖 編 2007 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第83地点—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅵ—』<芦屋市文化財調査報告第68集> 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 斎木 巖 編 2008 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第89地点—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅷ—』<芦屋市文化財調査報告第69集> 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 寒川 旭・森岡秀人・竹村忠洋 2001 『芦屋廃寺跡建物基壇に関する地震痕跡』『日本考古学』第12号 日本考古学協会
- 汐見一夫 1999 『砥石について—中世遺跡出土の仕上砥石を中心に—』『第12回 北陸中世考古学研究会資料集 中世北陸の石文化Ⅰ』北陸中世考古学研究会
- 清水雄夫 編 1995 『明治前期・昭和前期 神戸都市地図』柏書房
- 駒形俊夫 1997 『中世食器の地域性 〔6〕畿内周辺』『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館
- 横山 洋 1994 『律令制期の製塩土器と塩の流通—摂河泉出土資料を中心に—』『ヒストリア』第141号(1993年度大会特集)

- 号) 大阪歴史学会
- 横山 洋 2004 「大阪湾沿岸の古墳時代土器製造」『季刊考古学』別冊14号 雄山閣
- 横山 洋 2007 「大阪湾沿岸の濠溝・製塩土器集団と広域交流」『第56回近畿文化財研究会 古墳時代の海人集団を再検討するー海の生産用具から20年ー』 近畿文化財研究会
- 高瀬一喜 編 1997 『芦屋市所在 三条ノ坪遺跡一被災マンション等再建事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』<兵庫県文化財調査報告第168号> 兵庫県教育委員会
- 高橋照彦 1995 「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
- 竹村忠洋 2002 「芦屋市域の古墳時代後期から飛鳥時代の遺跡について」『八十塚古墳群の研究』<関西大学文学部考古学研究第7号・芦屋市文化財調査報告第33号> 関西大学文学部考古学研究室
- 竹村忠洋 2008 『遺跡が語る近代芦屋ー芦屋市域における最近の発掘調査ー』(2008年12月13日開催 西宮市立郷土資料館歴史講座 阪神間の考古学(その10) 阪神間を掘るー阪神南編ー当日配布資料) 西宮市立郷土資料館
- 竹村忠洋 2009 「津知遺跡の爆弾穴 1945年5月11日に受けた空襲の傷跡」『芦屋市立美術館研究紀要』第1号 芦屋市立美術館
- 竹村忠洋 編 1999 『津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書ー芦屋西部第二地区土地区画整理事業(津知第2公園)に伴う震災復興調査ー』<芦屋市文化財調査報告第34号> 芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋・白谷剛世 編 2004 『月若遺跡(第71地点)発掘調査報告書』<芦屋市文化財調査報告第51号> 芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋・白谷剛世 編 2007 『芦屋川水車場跡発掘調査報告書ー城山古墳群第20号墳と芦屋川水車場跡の発掘調査成果ー』<芦屋市文化財調査報告第71号> 芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋・山内芳子 2009 「寺田遺跡(第144地点)」『平成14年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書ー震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査とその成果ー』<芦屋市文化財調査報告第78号> 芦屋市教育委員会
- 田辺昭三 1966 『陶器古窯址群』I 平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 田辺真人・位原康太・渡部永子・岩本昌三・森岡秀人 1979 『芦屋の生活文化史ー民俗と史跡をたずねてー』 芦屋市教育委員会
- 辻 康男 2002 「遺跡をとりまく自然環境」『六条遺跡発掘調査報告書ー芦屋西部第一地区震災復興土地地区画整理事業・清水公園建設事業に伴う六条遺跡(第17・18地点)の事前調査記録ー』<芦屋市文化財調査報告第41号> 芦屋市教育委員会
- 辻 康男 2003a 「遺跡をとりまく自然環境」『津知遺跡第142地点ほか発掘調査報告書ー芦屋西部第二地区震災復興土地地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果ー』<芦屋市文化財調査報告第46号> 芦屋市教育委員会
- 辻 康男 2003b 「基本層序」『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡(第128地点)発掘調査報告書ー集落東端部の様相と知見ー』<芦屋市文化財調査報告第47号> 芦屋市教育委員会
- 辻 康男・矢作健二・辻本裕也・田中義文・バリノ・サーヴェイ株式会社 2003 「芦屋市内に所在する考古遺跡の自然科学分析」『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡(第128地点)発掘調査報告書ー集落東端部の様相と知見ー』<芦屋市文化財調査報告第47号> 芦屋市教育委員会
- 寺沢 薫・森岡秀人 編 1990 『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』 木耳社
- 富山直人 編 2000 『低関遺跡 第5次発掘調査報告書』 神戸市教育委員会
- 中田 英・鈴木篤英 2005 「冠遺跡第7地点発掘調査実績報告書 平成8年度」『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査ー震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査ー実績報告書』<芦屋市文化財調査実績報告集1> 芦屋市教育委員会
- 中村 浩 1981 『和泉陶器の研究』 柏書房
- 中村 浩 2001 『和泉陶器 出土須恵器の型式編年』 芙蓉書房出版
- 西 弘海 1986 『土器様式の成立とその背景』 真陽社
- 西岡誠司 1999 「関江北町遺跡 第8次調査」『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会

- 西口圭介 2006 「円筒埴輪棺」『伊丹市所在 有岡城跡・伊丹郡町Ⅳ—主要地方道伊丹停車場線舗装修繕工事に伴う発掘調査報告書—』<兵庫県文化財調査報告第301番> 兵庫県教育委員会
- 西村 歩・池澤龍彦 2006 「和泉地域」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
- 白谷朋世 2009 「打出小槌古墳の全長を考える。～実録・打出小槌古墳～」『芦屋市立美術館研究紀要』第1号 芦屋市立美術館
- 白谷朋世・森岡秀人 2008 「金津山古墳の墳形・規模・年代」『金津山古墳発掘調査報告書—第17地点で検出した外周漆の発掘調査成果—』<芦屋市文化財調査報告第75集> 芦屋市教育委員会
- 橋本久和 1992 『中世土器研究序論』高橋社
- 兵庫県教育委員会 2004 『兵庫県道跡地図』
- 福島正和 2006 「古代末から中世初期の煮炊具—摂津地域における甕・羽釜・鍋—」『第25回 中世土器研究会 土製煮炊具の諸様相』中世土器研究会
- 藤澤良祐 2001 「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通—研究の現状と課題—」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品—東アジアの視野から—(財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立10周年記念「瀬戸大窯とその時代」シンポジウム・講演会)』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤原 学 2002 「群集墳と群集墓—八十塚古墳群出土須恵器と周辺の生産地から—」『八十塚古墳群の研究』<関西大学文学部考古学研究第7号> 芦屋市文化財調査報告第33集> 関西大学文学部考古学研究室
- 細川道草 1963 『芦屋郷土誌』芦屋史談会
- 前田佳久・石島三和・中村大介 2004 『兵庫県芦屋市 月石遺跡発掘調査報告書 第68・69・70地点—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅲ—』<芦屋市文化財調査報告第57集> 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 前田佳久・千種 浩・佐伯二郎・平田朋子・中居さやか 2003 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第132・133・137・139・141・142地点—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅱ—』<芦屋市文化財調査報告第45集> 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 前田佳久・平田朋子・中居さやか 2002 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第127・130・132・133地点—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅰ—』<芦屋市文化財調査報告第43集> 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 松元美由紀・田中義文・辻 康男 2007 「芦屋川水車場跡出土遺物自然科学分析」『芦屋川水車場跡発掘調査報告書—城山古墳群 第20号墳と芦屋川水車場跡の発掘調査成果—』<芦屋市文化財調査報告第71集> 芦屋市教育委員会
- 南 博史・山田邦和・大下 明・森下英治 1985 『芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書』財団法人古代学協会
- 武藤 誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘 編 1971 『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 武藤 誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘 編 1976 『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 武藤 誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘 編 1986 『新修芦屋市史』資料篇2 芦屋市役所
- 村上伸之 2006 「肥前 生産に關する技術の成立と展開を中心に」『江戸時代のやまの一生産と流通—』記念講演会・シンポジウム資料集 財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター
- 村川行弘 編 1970 『芦屋庭寺址』<芦屋市文化財調査報告第7集> 芦屋市教育委員会
- 百瀬正恒・近江俊秀 1995 「近畿」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 森 隆 1995 「黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 森内秀造 1995 「相生窯址群における平安期の遺物について」『相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ—山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告XⅢ—』<兵庫県文化財調査報告第139番> 兵庫県教育委員会
- 森内秀造 2000a 「中谷2号窯 出土遺物の概要」『兵庫県加古川市所在 志方窯址群Ⅰ—中谷支群— 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告XⅩⅩⅠ—』<兵庫県文化財調査報告第203番> 兵庫県教育委員会
- 森内秀造 2000b 「まとめにかえて」『兵庫県加古川市所在 志方窯址群Ⅰ—中谷支群— 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告XⅩⅩⅠ—』<兵庫県文化財調査報告第203番> 兵庫県教育委員会
- 森内秀造 2001a 「白沢・志方窯址群における遺物の特徴」『兵庫県加古川市所在 志方窯址群Ⅱ—投松支群— 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告XⅩⅩⅣ—』<兵庫県文化財調査報告第217番> 兵庫県教育委員会

- 森内秀造 2001b 「まとも」『兵庫県加古川市所在 志方臨峯群Ⅱ—投松文群— 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXXIV—>兵庫県文化財調査報告第217冊> 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1994 「月若町の先住者—古墳時代の大集落の発掘調査を終えて—」『芦屋市立美術館だより なりひら』 Vol. 15. '94/6 芦屋市立美術館
- 森岡秀人 1988a 「芦屋廃寺A地点遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1988b 「月若遺跡(第1地点試掘)」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1999 「摂津における土器交流拠点の性格—真正弥生時代と庄内式期を比べて—」『庄内式土器研究XXI—庄内式併行期の土器交流拠点—摂津・播磨地域』庄内式土器研究会
- 森岡秀人 2001 「摂津国菟原郡菟原郷・賀美郷考証覚書」『考古学論集』第5集 考古学を学ぶ会
- 森岡秀人 2002 「摂津・八十塚古墳群と菟原郡菟原郷・賀美郷周辺の古代史」『八十塚古墳群の研究』>関西大学文学部考古学研究所第7号・芦屋市文化財調査報告第33集> 関西大学文学部考古学研究室
- 森岡秀人 2003a 「古代摂津国菟原郡菟原郷・賀美郷と寺田遺跡」『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡(第128地点)発掘調査報告書—集落東端部の様相と知見—』>芦屋市文化財調査報告第47集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2003b 「考古学と古代史からみた摂津国菟原郡東部の8世紀史と藤ヶ谷古墳の占める位置」『摂津・藤ヶ谷古墳—藤ヶ谷遺跡第五地点・古代大葬墓の調査—』>芦屋市文化財調査報告第48集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2003c 「弥生時代後期—終末期の土器変遷について」『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡(第128地点)発掘調査報告書—集落東端部の様相と知見—』>芦屋市文化財調査報告第47集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2007a 「芦屋廃寺跡周辺調査の進展」『平成12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書—震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果—』>芦屋市文化財調査報告第65集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2007b 「芦屋駅と古代山陽道路踏切をめぐっての一試行」『考古学論集—小笠原好彦先生退任記念論集—』真臨社
- 森岡秀人 2008 「歴史からみた本庄地域 第1章 考古学から語る本庄地区周辺の地域史」『本庄村史編—神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ—』本庄村史編纂委員会
- 森岡秀人 編 1995 「平成6年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 月若遺跡(第19地点)」>芦屋市文化財調査報告第26集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・木南アツ子 1996 「金津山古墳」『平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認(試掘)調査—概要報告書 寺田遺跡(第40・41・47・52・55・57地点) 芦屋廃寺遺跡(W地点・第29・38地点) 月若遺跡(第20・25・28・30・33地点) 打出岸遺跡(第1地点) 打出小根遺跡(第17地点) 金津山古墳(第9地点) 久保遺跡(第15地点) 山芦屋遺跡(S8地点)』>芦屋市文化財調査報告第27集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・木南アツ子 2005a 「芦屋廃寺遺跡(Z地点)確認調査概要報告書 平成8年」『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査—実績報告書集』>芦屋市文化財調査実績報告集1> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・木南アツ子 2005b 「芦屋廃寺第45地点(小阪家住宅)発掘調査実績報告書 平成8年度」『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査—実績報告書集』>芦屋市文化財調査実績報告集1> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・木南アツ子 編 1996 「平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認(試掘)調査—概要報告書」>芦屋市文化財調査報告第27集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・板田典彦 編 2002 「六条遺跡発掘調査報告書—芦屋西部一地区震災復興土地再開発事業、清水公園建設事業に伴う六条遺跡(第17・18地点)の事前調査記録—」>芦屋市文化財調査報告第41集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・板田典彦 編 2003 「平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡(第128地点)発掘調査報告書—集落東端部の様相と知見—」>芦屋市文化財調査報告第47集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・板田典彦 編 2007 「前田遺跡(第26地点)発掘調査報告書—弥生時代前期水田跡の北限域の状況—」>芦屋市文化

- 財調査報告第70集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2005a 「平成8年度 寺田道跡(第40地点)発掘調査実績報告書 平成9年(1997)3月」『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集1＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2005b 「平成8年度 寺田道跡(第90地点)発掘調査実績報告書 平成9年(1997)3月」『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集1＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2005c 「平成9年度 都市計画道路山手幹線・川西線整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査実績報告書 寺田遺跡第103地点・月若遺跡第49地点・粟平遺跡第43地点・大原遺跡第32地点・打出岸造り遺跡第24地点 平成10年3月」『平成9・10年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集2＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2005d 「平成9年度 西山町遺跡(第4地点)発掘調査実績報告書」『平成9・10年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集2＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2006a 「平成11年度国庫補助事業 芦屋鹿寺遺跡(第62地点)発掘調査実績報告書－震災復興調査－平成12年2月」『平成11・12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集3＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2006b 「摂津地域」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
- 森岡秀人・竹村忠洋 編 2007 「平成12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書－震災復興に伴う埋蔵文化財調査の成果－」＜芦屋市文化財調査報告第65集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 編 2008 「平成13年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書－市内遺跡及び震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査の結果－」＜芦屋市文化財調査報告第72集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋・古川久雄 編 1999 「芦屋鹿寺遺跡(第53地点)・寺田遺跡(第104地点)震災復興埋蔵文化財確認調査概要報告書 津知川排水区雨水管敷設工事(東川用水路推定地)に伴う確認調査」＜芦屋市文化財調査報告第35集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・辻 康男 2007 「打出岸造り遺跡(第32地点)」『平成12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認の成果－』＜芦屋市文化財調査報告第65集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・中井秀樹・濱野俊一 1996 「庄内式併行土器の様相をめぐる摂津地域の動向」『庄内式土器研究Ⅱ』庄内式土器研究会
- 森岡秀人・西村 歩 2006 「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題－最新年代学を基礎として－」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
- 森岡秀人・西村 歩 編 2006 「古式土師器の年代学」財団法人大阪府文化財センター
- 森岡秀人・白谷朋世 編 1991 「平成3年度国庫補助事業 芦屋鹿寺遺跡ほか発掘調査概要報告書」＜芦屋市文化財調査報告第22集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷朋世 編 1992 「平成3年度国庫補助事業 芦屋鹿寺遺跡ほか発掘調査概要報告書 月若遺跡第12次地点 月若遺跡第14次地点 八十塚古墳群岩ヶ平文群第50号墳」＜芦屋市文化財調査報告第22集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・松村朋世・後神 泉 編 1991 「平成2年度国庫補助事業 芦屋鹿寺遺跡ほか発掘調査概要報告書」＜芦屋市文化財調査報告第21集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・若林純也 2005a 「平成10年度国庫補助事業 芦屋鹿寺遺跡(第56地点)発掘調査実績報告書」『平成9・10年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集2＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・若林純也 2005b 「平成10年度国庫補助事業 寺田道跡(第105地点)発掘調査実績報告書」『平成9・10年度国庫補

- 助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査—実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集2＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編 1989 『昭和63年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡K地点・寺田遺跡第16次地点発掘調査概要報告書』＜芦屋市文化財調査報告第17集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・渡辺 昇・古川久雄 1999 『庄内式土器研究XXI 庄内式併行期の土器交流拠点—』（摂津・播磨地域）庄内式土器研究会
- 森田 聡 1986 『東播系須恵器生産の成立と展開』『神戸市立博物館研究紀要』3 神戸市立博物館
- 森田 聡 1995 『東播系須恵器』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 守田めぐみ 2009 『芦屋市内出土の漁撈具・製塩土器』『芦屋市立美術館研究紀要』第1号 芦屋市立美術館
- 守田めぐみ・竹村忠洋 2009 『寺田遺跡(第191地点)』『平成19年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査報告書』＜芦屋市文化財調査報告第79集＞ 芦屋市教育委員会
- 矢口裕之・瀬田田住男 2005a 『芦屋廃寺遺跡第43地点発掘調査実績報告書 平成8年度』『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査—実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集1＞ 芦屋市教育委員会
- 矢口裕之・瀬田田住男 2005b 『芦屋廃寺遺跡第47地点発掘調査実績報告書 平成8年度』『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査—実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集1＞ 芦屋市教育委員会
- 安田 強 編 2006 『兵庫県芦屋市 桑平遺跡第61地点 月若遺跡第79・81地点 寺田遺跡第178・181地点 発掘調査報告書—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査V—』＜芦屋市文化財調査報告第72集＞ 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 山下峰司 1995 『灰輪陶器』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 山田晃弘・弘田和司 2005 『芦屋廃寺遺跡40地点発掘調査実績報告書 平成8年』『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査—実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集1＞ 芦屋市教育委員会
- 山田清朝 編 2001 『寺田遺跡(第117～124地点)発掘調査概要報告書 都市計画道路川西線建設に伴う発掘調査—震災復興調査—』＜芦屋市文化財調査報告第39集＞ 芦屋市教育委員会
- 山仲 進 編 2002 『神戸市北区長尾 宅原遺跡 豊浦地区の調査(1987年) 付録「7世紀中葉の木製祭祀具をどのように理解するか」—宅原遺跡宮之元地区出土の木製人形、木影仮面等をめぐって』 妙見山麓遺跡調査会
- 山本雅和 編 2008 『芦屋市山手幹線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要—総集編—』＜芦屋市文化財調査報告第74集＞ 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 吉田知史 2007 『文様と形態からみた後期古墳山上意の編年』『勝福寺古墳の研究』＜大阪大学文学研究科考古学研究报告第4冊＞ 大阪大学文学研究科考古学研究室
- 果実歴史民俗博物館・(財)果実市文化体育振興事業団 2008 『発掘調査成果展 湖国の「塩」その歴史と民俗』
- 渡辺 昇 編 2003 『芦屋市 六条遺跡』＜兵庫県文化財調査報告第256冊＞ 兵庫県教育委員会
- 渡辺 昇 編 2007 『富島遺跡—富島地区震災復興土地地区面整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—』＜兵庫県文化財調査報告第321冊＞ 兵庫県教育委員会

写真図版

P L A T E





第1遺構面（SR02・03 埋没前）全景（南西から）



SE01（南から）



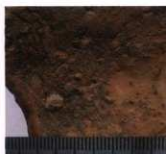
SR02-1 護岸遺構（南東から）



土器群 2-1・2-2（南から）



①第37図166 外面



②第37図166 内面(1)



③第37図166 内面(2)



④第37図169 内面



⑤第37図168 内面



⑥乳白色系・布目



⑦第37図167 内面(1)



⑧第37図167 内面(2)



⑨淡橙色系・布目



⑩第37図170 内面



⑪灰色系・布目



⑫第37図171 外面



⑬第37図172 内面



⑭第37図173 内面



⑮第37図174 内面



⑯褐色系・ナデ



調査地の既存建物（南西から）



調査地現況（南西から）



調査地現況（北西から）



既存建物の煉瓦組の東（南西から）



工事中の山手幹線芦屋川トンネル（西から）



調査地から西方の山手幹線（東から）



調査地東側の石垣（南東から）



西芦屋町 30 番地に設置したコンテナハウス（西から）



調査風景 (3月18日)



調査風景 (3月25日)



調査風景 (3月28日)



調査風景 (3月28日)



調査風景 (4月4日)



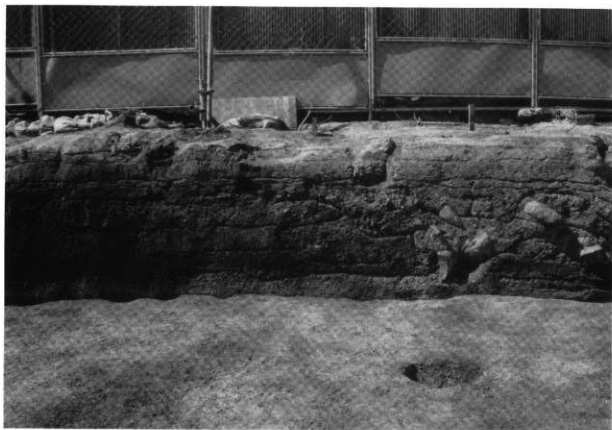
調査風景 (4月4日)



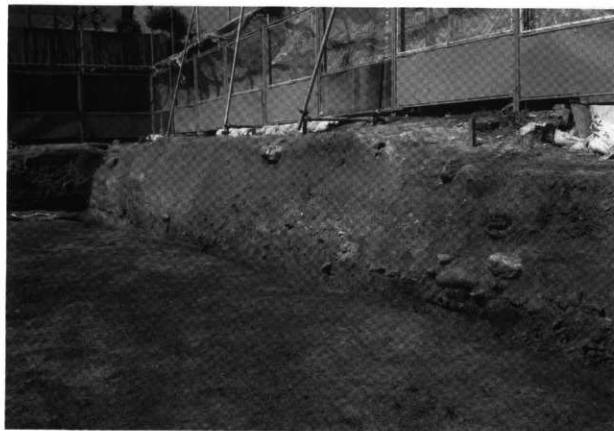
調査風景 (4月14日)



調査風景 (4月17日)



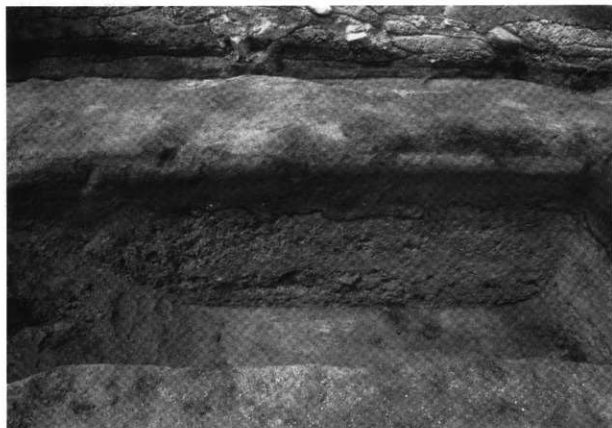
調査区北壁土層（南から）



調査区東壁土層（南西から）



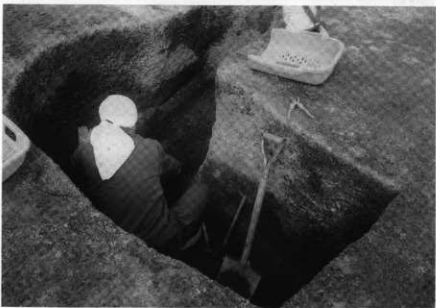
調査区南壁土層（北西から）



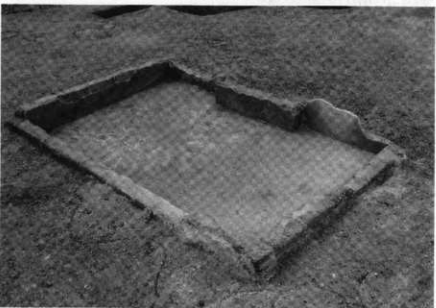
深掘トレンチ1北壁土層（南から）



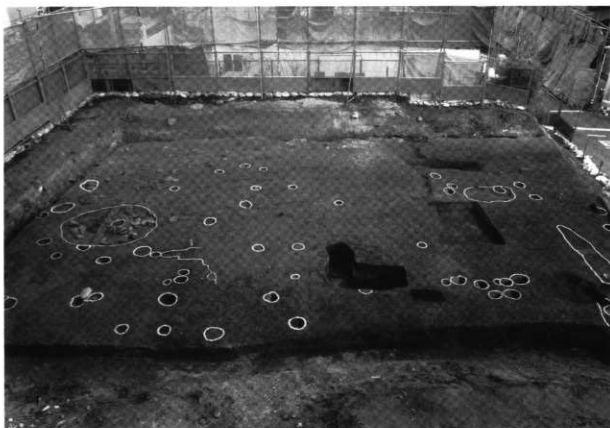
電信柱アンカー（西から）



防空壕跡（南西から）



地下施設（南東から）



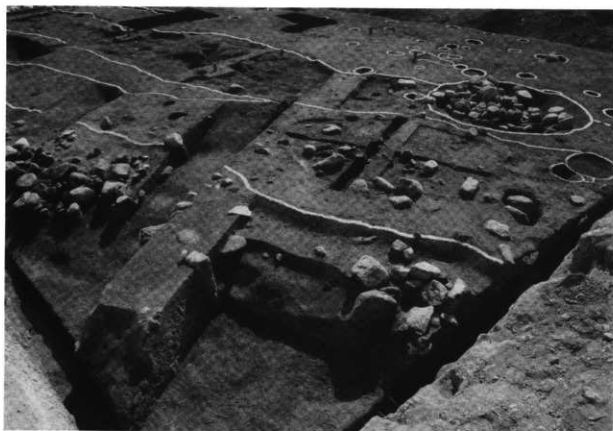
第1遺構面（SR02・03埋没後）全景（西から）



第1遺構面（SR02・03埋没後）全景（南西から）



第1遺構面（SR02・03埋没前）全景（西から）



第1遺構面（SR02・03埋没前）北半（北東から）



S B01 全景 (南から)



S B01 全景 (北から)



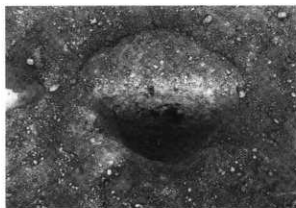
S P21・01 土層 (西から)



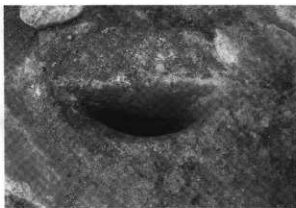
S P02・25 土層 (西から)



S P03 土層 (南から)



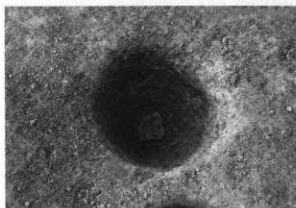
SP15 土層 (南から)



SP27 (SE01 内) 土層 (南から)



SP48・49・63 土層 (西から)



SP49 土器出土状況 (南から)



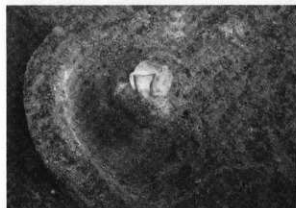
SP51・52 土層 (南から)



SP73 土層 (南から)



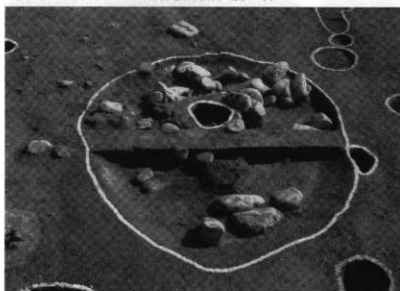
SK03 土層 (西から)



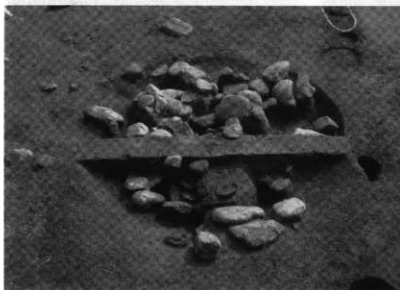
SD03 土器出土状況 (南から)



S E01 検出状況 (南から)



S E01 および S P27 掘削状況 (北から)



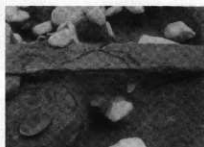
S E01 掘削状況 (北から)



S E01 土層 (北から)



S E01 東部土層 (北から)



S E01 西部土層 (北から)



S E01 土層 (南から)



S E01 東部土層 (南から)



S E 01 礫・遺物出土状況（南から）



S E 01 遺物取り上げ後の礫出土状況（北から）



S E 01 完掘状況（南から）



S E 01 土師器皿 (43) 出土状況（東から）



S E 01 須恵器碗 (49) 出土状況（南から）



S E 01 須恵器鉢 (53) 出土状況（北から）



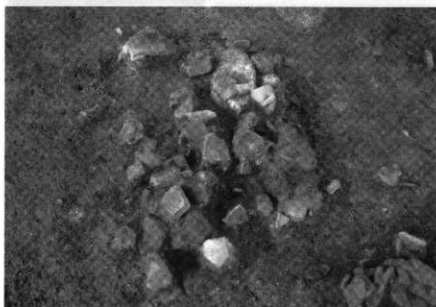
S E 01 礫群下の埋土（北から）



S E 01 下位遺構の埋土（南から）



土器群 1 (南から)



土器群 2-1 (南から)



土器群 2-2 (南から)



S R 02-1 護岸遺構 (北西から)



S R 02-1 護岸遺構 (北東から)



S R02 断割1土層 (南東から)



S R02-1 埋土D層瓦器碗 (92) 出土状況 (南西から)



S R02-1 杭埋土断面 (南から)



S R02-2 完掘状況 (北から)



S R02 断割1土層 (東から)

S R03 (南から)



S R03 断割 1 土層 (南から)



S R03 断割 2 土層 (南から)

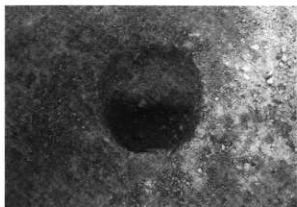




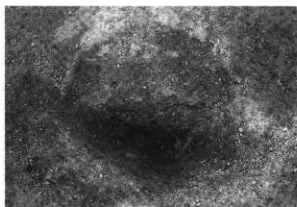
第2遺構面全景（西から）



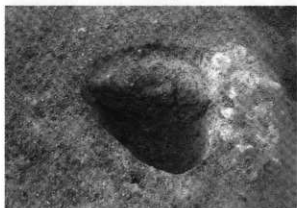
第2遺構面全景（南西から）



SP90 土層 (南から)



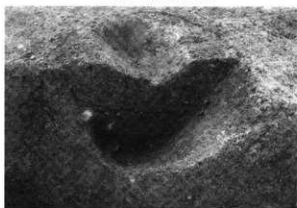
SP101 土層 (南から)



SP118 土層 (南から)



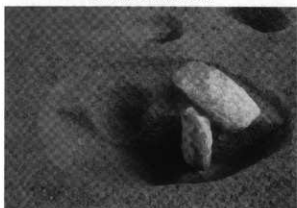
SP142 土層 (南から)



SP170 土層 (北から)



SK06 土層 (西から)



SK07 土層 (西から)



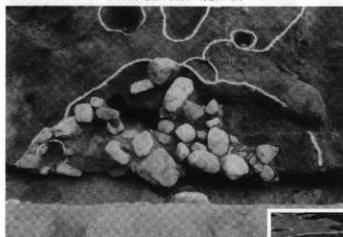
SD07 土層 (南西から)



S X 03 検出状況（南から）



S X 03 上位埋土土層（南から）



S X 03 掘削状況（北から）



S X 03 下位埋土土層（南から）

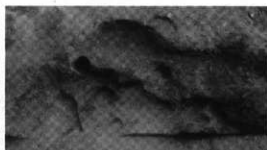
S X 03からは礎が多く出土している。
また、S X 03を切り込むビット（S P
148）も見られる。



S X 03 掘削状況（南東から）



S X 03 完掘状況（東から）

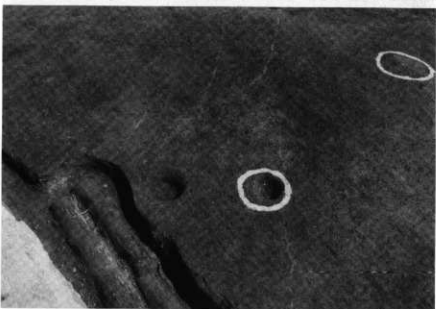


S X 03 完掘状況（北から）

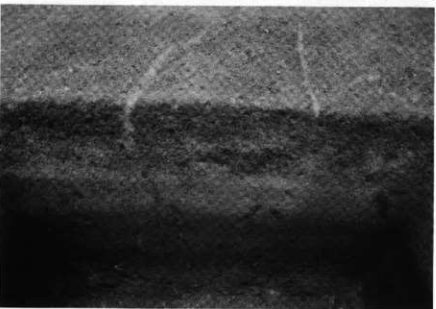
S X 03 の南部は浅く、北東側は二段落ちになっている。



第3遺構面全景（西から）



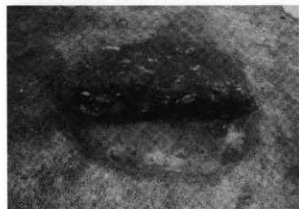
砂脈検出状況（北東から）



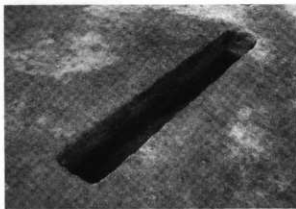
砂脈土層断面（南東から）



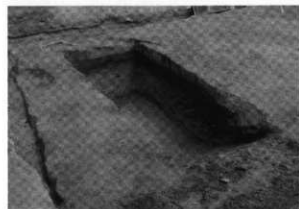
第4遺構面全景（西から）



S K09 土層（南から）



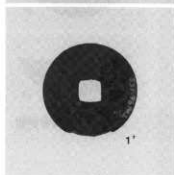
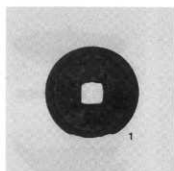
植物痕跡の土層（南西から）



深掘トレンチ1（北西から）



深掘トレンチ2（北東から）



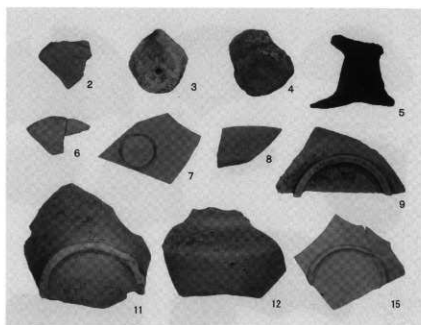
寛永通寶



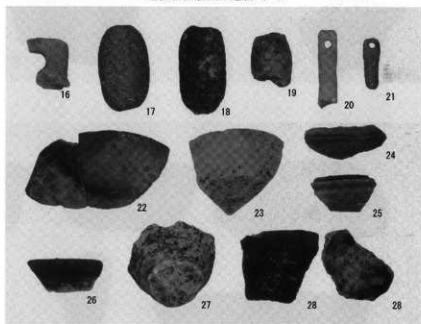
刻字もしくはヘラ記号をもつ須恵器片



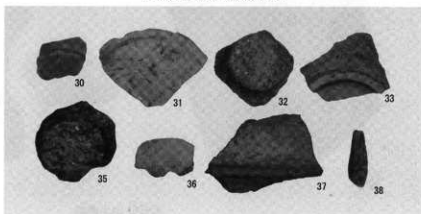
S D03 出土瓦器碗



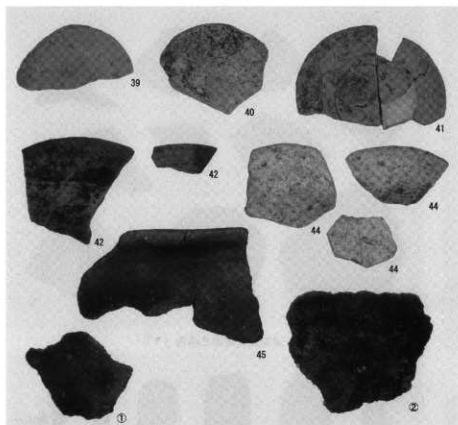
遺物包含層出土遺物 (1)



遺物包含層出土遺物 (2)



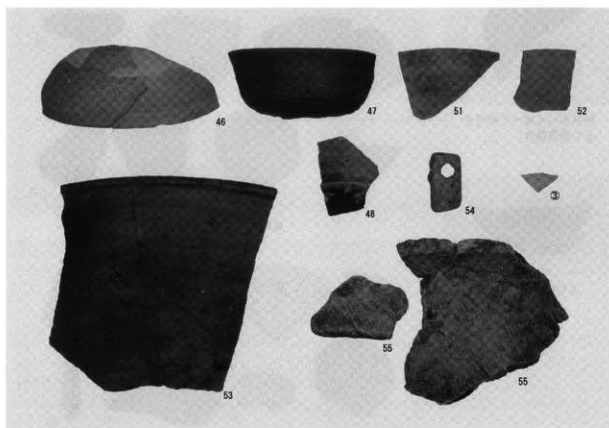
第1遺構面ビット・土坑・S R01 出土遺物



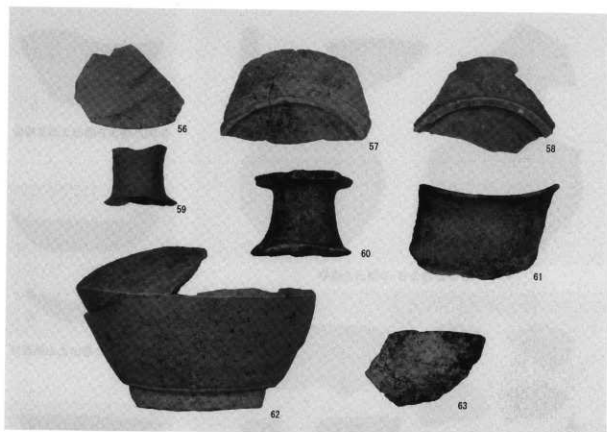
S E 01 出土土師器皿



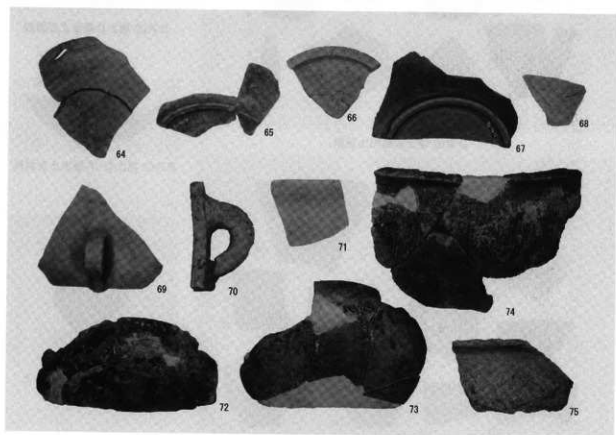
S E 01 出土須恵器椀



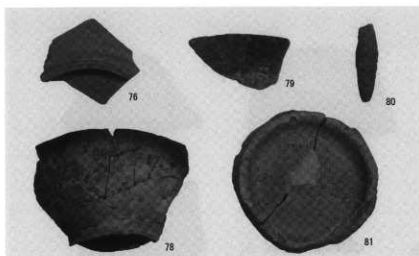
S E 01 出土遺物



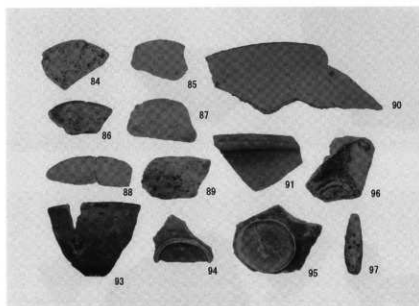
土器群 1・3 出土遺物



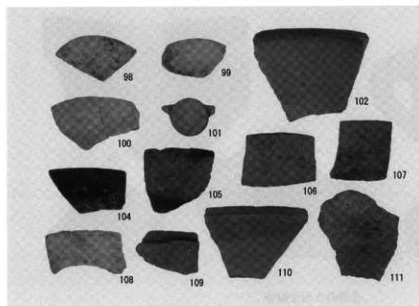
土器群 2 出土遺物



S R 02 埋土 B・D 層出土遺物



S R 02 埋土 D 層出土遺物



S R 02 埋土 E・F 層出土遺物



S R 02 埋土 B 層出土須恵器壺



S R 02 埋土 D 層出土土師器杯



S R 02 埋土 D 層出土土師器杯



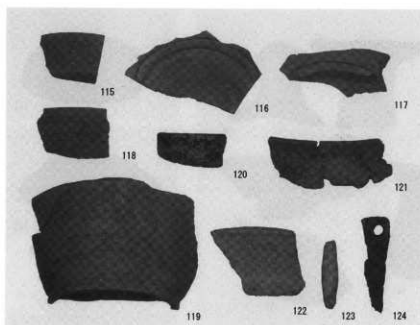
S R 02 埋土 D 層出土瓦器椀



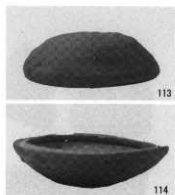
S R 02 埋土 E・F 層出土瓦器椀



S R 02 断割 1 26 層出土
縄文土器



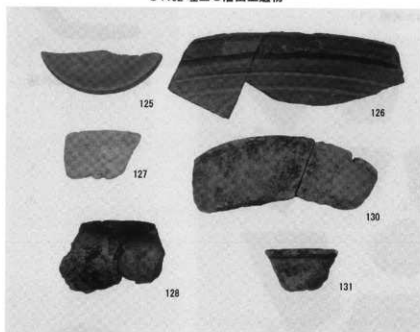
S R 02 埋土C層出土遺物



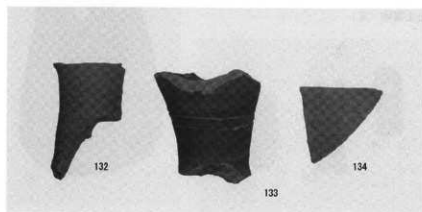
S R 02 埋土C層出土須恵器蓋杯



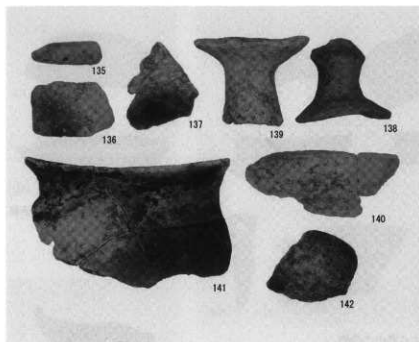
S X 02 出土土師器杯



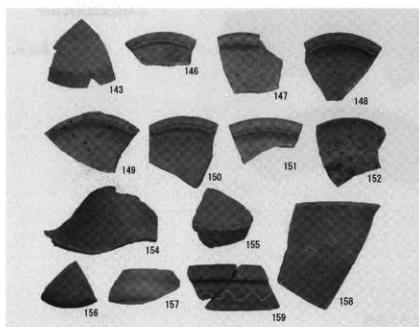
S X 02 出土遺物



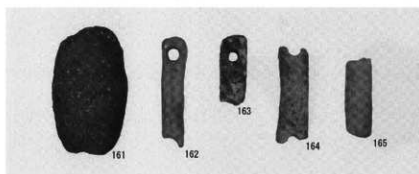
S R 02 礫除去時出土遺物



S R03 出土遺物 (1)



S R03 出土遺物 (2)



S R03 出土漁撈具



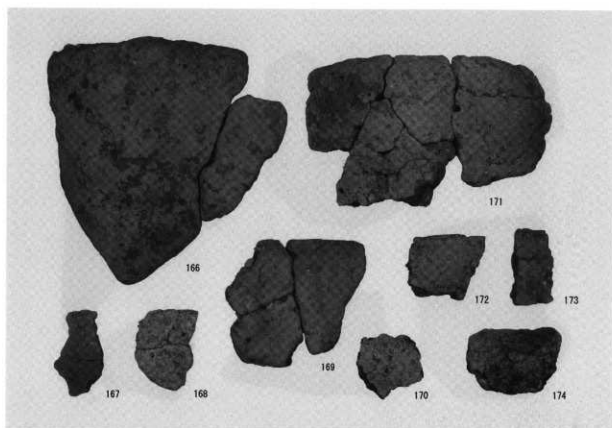
S R03 出土須恵器杯蓋



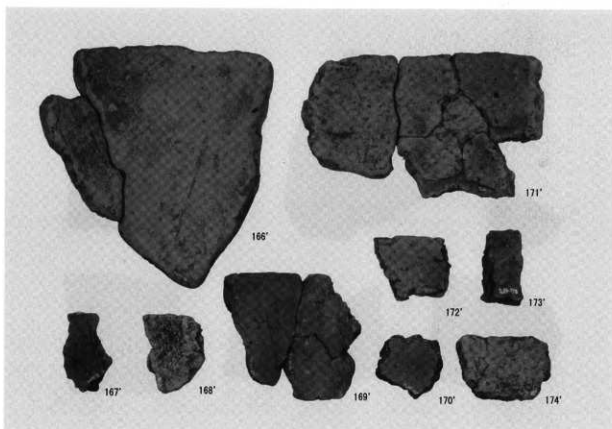
S R03 出土須恵器杯身



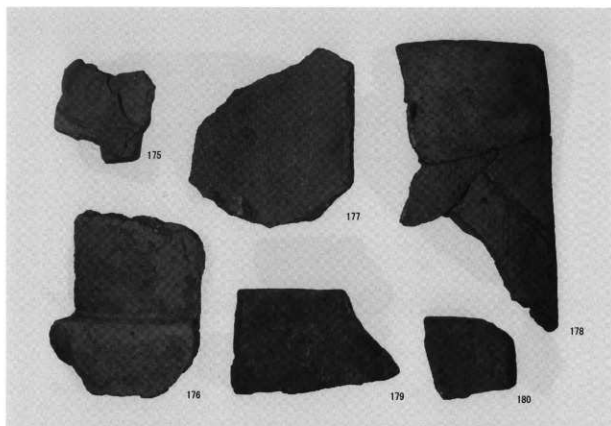
S R03 出土イイダコ壺



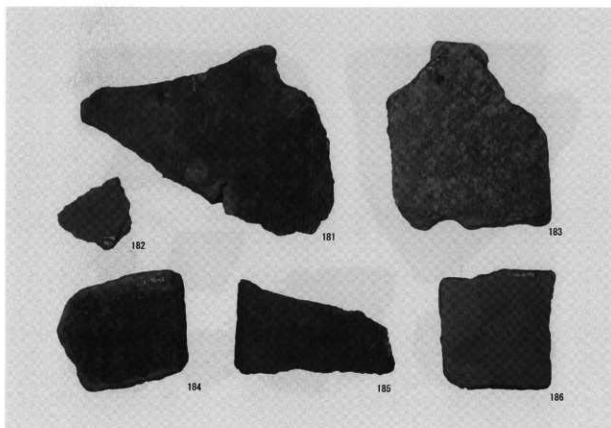
製塩土器（外面）



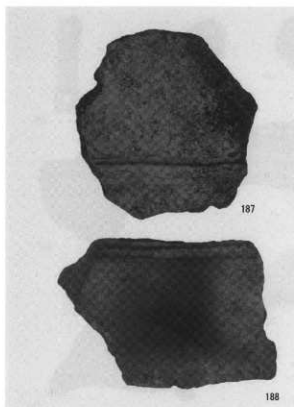
製塩土器（内面）



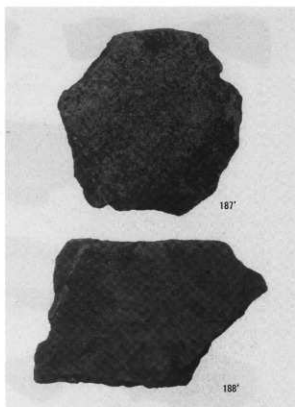
瓦当・丸瓦・熨斗瓦・平瓦（C類）



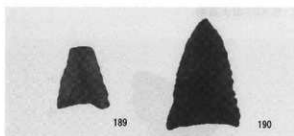
平瓦（B・C類）



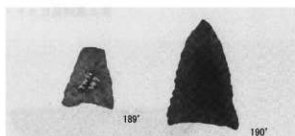
円筒埴輪（外面）



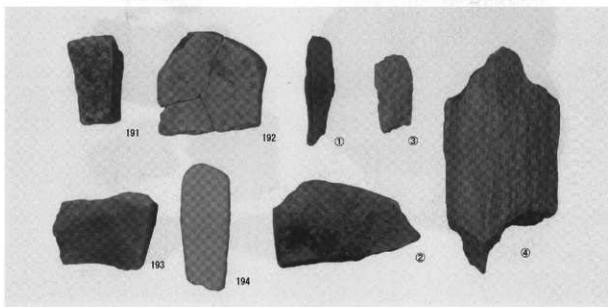
円筒埴輪（内面）



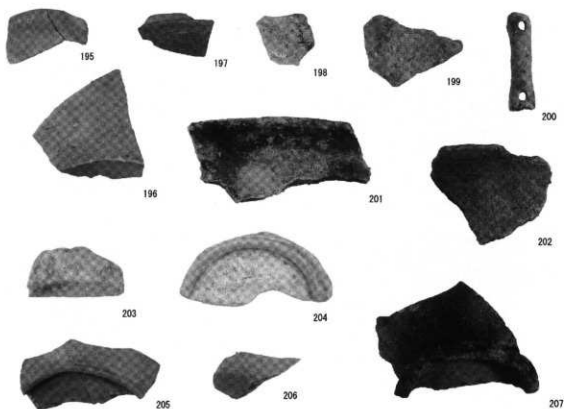
石鏃（表）



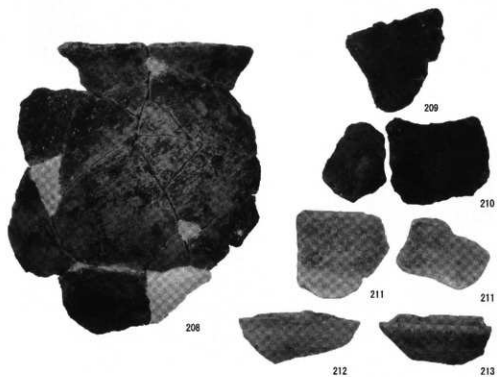
石鏃（裏）



砥石・結晶片岩



第2遺構面ビット・土坑・S X03 出土遺物



土器群4・S K09 出土遺物

小銅鐸現況写真(1)

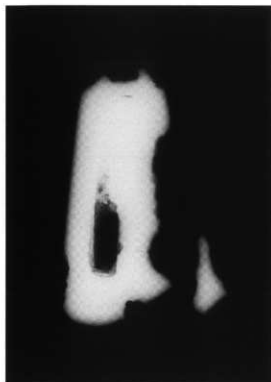


小銅鐸現況写真(2)

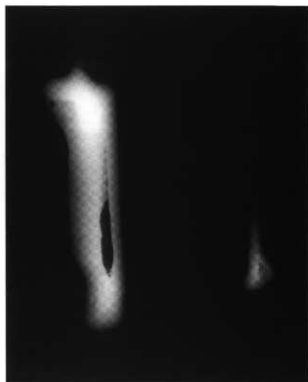


小銅鐸現況写真(3)

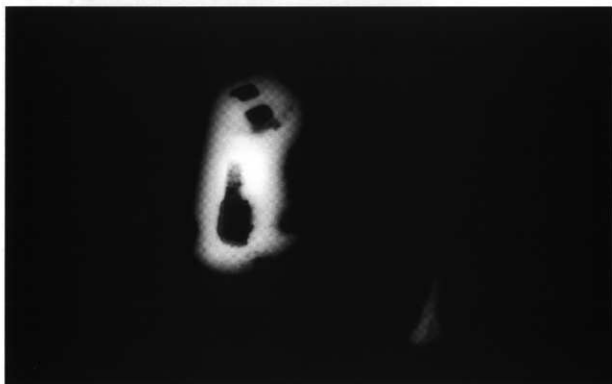




小銅鐸X線写真(1)



小銅鐸X線写真(2)



小銅鐸X線写真(3)

報告書抄録

ふりがな	つきわかいせきはつくつちょうさほうこくしょ だい96ちてん							
書名	月若遺跡発掘調査報告書 第96地点							
副書名	都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅵ							
巻次								
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告							
シリーズ番号	第76集							
編著者名	(編集・執筆) 竹村忠洋・守田めぐみ (執筆) 森岡秀人・白谷朋世							
編集機関	芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課(文化財担当)							
所在地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL.0797-31-9066							
発行年月日	2009年(平成21年)3月31日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 調査番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
つきわかいせき 月若遺跡	ひょうごけん 兵庫県 あしやし 芦屋市 つきわかいせき 月若町 66番3 ・4、 69番3	28206	TW96	34度 44分 3秒	135度 18分 1秒	20080218 } 20080430	210㎡	都市計画道路 山手幹線街路 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
月若遺跡	集落跡 生産遺跡	縄文時代 ～近世	掘立柱建物・ ビット・土坑・ 井戸・溝・土 器群・性格不 明遺構・流路・ 竪穴・電信柱 アンカー・防 空壕跡・地震 痕跡(砂眼)・ 植物痕跡		縄文土器・弥生 土器・土師器・ 須恵器・黒色土 器・緑釉陶器・ 灰釉陶器・瓦器・ 瓦質土器・陶器・ 磁器・埴輪・製 塩土器・イダ コ壺・土甕・瓦・ 石甕・石製品・ 小銅鐸・銭貨(寛 永通寶)・鉄製品		小銅鐸、古墳時代 前期の円筒埴 輪、多量の製塩 土器片が出土。 12世紀代の護岸 遺構、慶長伏見 地震(1596年)に 伴うと推定され る砂眼、1940年 代の防空壕跡を 検出。	
要約	今回の調査地点は、月若遺跡の東端に位置していた。第1～4遺構面が検出された。第1遺構面は古墳時代後期～江戸時代、第2遺構面は弥生時代後期～古墳時代前期、第3遺構面は弥生時代前期～中期、第4遺構面は縄文時代後期～晩期の遺構面である。弥生時代後期後半から古墳時代前期のビット(S P33)からは、小銅鐸が出土した。古墳時代前期の円筒埴輪片が出土した。調査区東部では、古代から中世の流路(S R02)が検出された。当流路からは、古代の段階では官衛的要素をもつ遺物が出土し、本調査地点付近に官衛施設や寺院関連施設があったと推測される。また、当流路は12世紀代に堰を用いて護岸をしている。14世紀以降は、耕作地として利用されたと考えられる。							

芦屋市文化財調査報告 第76集

兵庫県芦屋市

月若遺跡発掘調査報告書

第96地点

—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅷ—

平成21年(2009)3月31日 印刷発行

発 行 芦屋市・芦屋市教育委員会
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号
TEL. 0797-31-9066

編 集 芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課(文化財担当)
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号
TEL. 0797-31-9066

印 刷 芦屋人〜あしやびと〜
〒659-0032 兵庫県芦屋市浜風町24番9号
TEL. 0797-31-4378

